

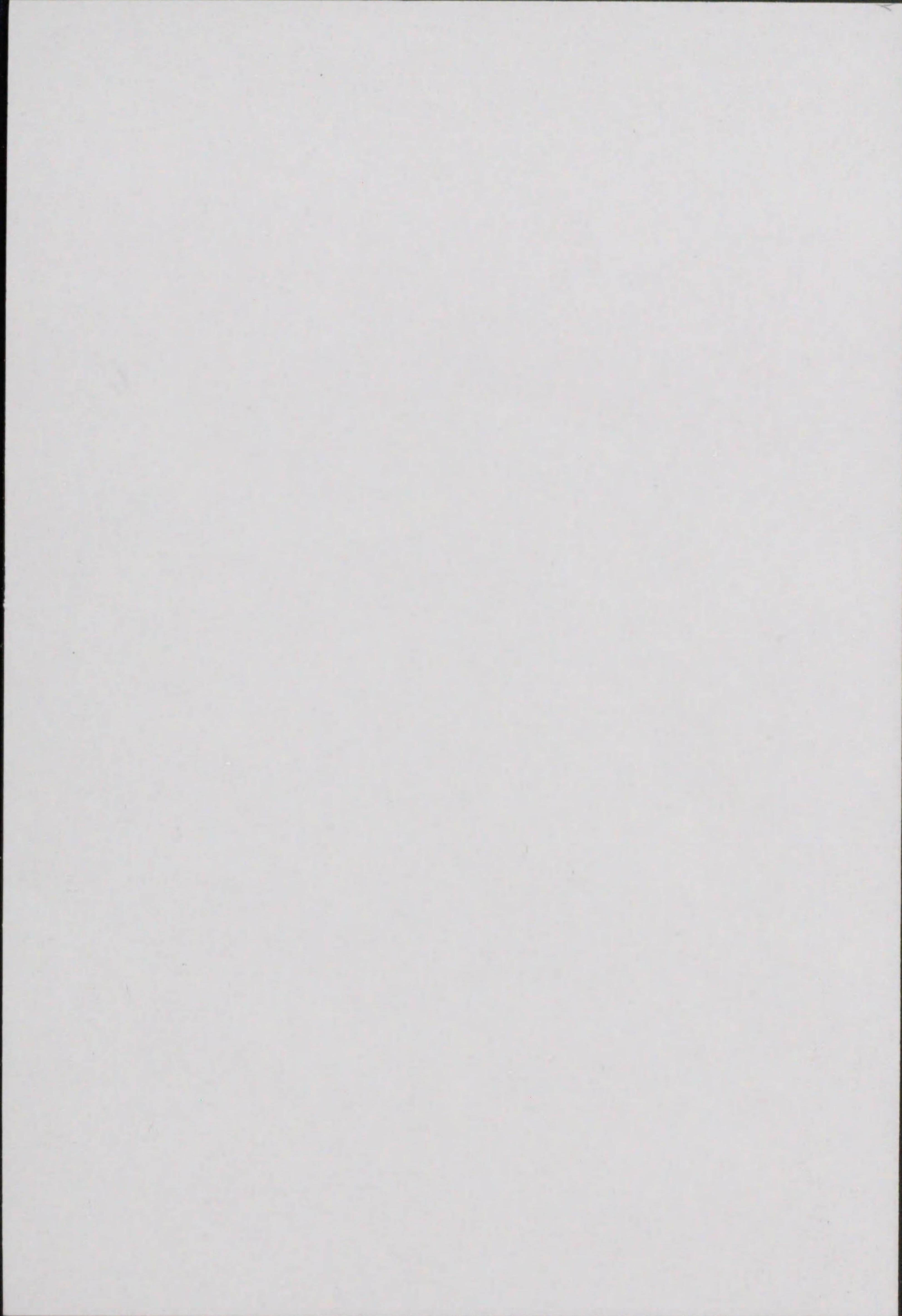
566-421



1200501514839

566  
421

口  
複  
写





26. 1. 31

26. 1. 31



14938  
5



萬葉集古義



五

郡司米津郎寄贈本



566-421

萬葉集古義五目次

萬葉集古義十卷之上……………一一九

春雜歌……………一

雜歌……………一

詠霞……………七

詠月……………六

詠煙……………三

權逢……………三

譬喻歌……………三

春相聞……………三

相聞……………三

寄霜……………四

寄草……………四

贈繚……………五

夏雜歌……………五

詠鳥……………五

詠鳥……………五

詠柳……………六

詠雨……………三

野遊……………三

詠雪……………三

詠花……………三

詠河……………三

歎舊……………三

寄鳥……………三

寄霞……………四

寄松……………四

悲別……………五

詠蟬……………五

詠雪……………三

詠花……………三

詠河……………三

歎舊……………三

寄鳥……………三

寄霞……………四

寄雨……………四

寄花……………四

寄雲……………五

問答……………五

詠榛……………五

詠榛……………五



萬葉集古義十卷之中

詠花…………… 充 問答…………… 充 譬喻歌…………… 充

夏相聞

寄鳥…………… 七 寄蟬…………… 七 寄草…………… 七 寄花…………… 七 寄露…………… 七 寄日…………… 七

秋雜歌

七夕…………… 七 詠花…………… 二四 詠鴈…………… 二六 詠鹿鳴…………… 二五 詠蟬…………… 二六 詠蟋蟀…………… 二六 詠蝦…………… 二六 詠鳥…………… 二四 詠露…………… 二四 詠山…………… 二四

萬葉集古義十卷之下

……… 一四一—一三〇

詠黃葉…………… 一五

詠水田…………… 一七

詠河…………… 一六

詠月…………… 一六

詠風…………… 一六

詠芳…………… 一六

詠雨…………… 一六

詠霜…………… 一六

秋相聞

相聞…………… 一五 寄水田…………… 一五 寄露…………… 一六

寄風…………… 一七

寄雨…………… 一七

寄蟋蟀…………… 一七

寄蝦…………… 一七

寄鴈…………… 一七

寄鹿…………… 一七

寄鶴…………… 一七

寄草…………… 一七

寄花…………… 一七

寄山…………… 一八

寄黃葉…………… 一八

寄月…………… 一七

寄夜…………… 一八

寄衣…………… 一八

問答…………… 一八

譬喻歌…………… 一九

冬雜歌

雜歌…………… 一五 詠雪…………… 一五 詠花…………… 一九

詠露…………… 二〇

詠黃葉…………… 二〇

詠月…………… 二〇

冬相聞

相聞…………… 二〇 寄露…………… 二二 寄霜…………… 二四 寄雪…………… 二四 寄花…………… 二九 寄夜…………… 二九

萬葉集古義十一卷之上

……… 三十一—三〇

古今相聞往來歌類上

相聞…………… 三三 正述心緒…………… 三三

萬葉集古義十一卷之中

……… 三九—三五



寄物陳思……………二七九

萬葉集古義十一卷之下

問答……………四〇六 譬喻……………四一九

萬葉集古義十二卷之上

古今相聞往來歌類下……………四一九—四六六

正述心緒……………四二〇 寄物陳思……………四八〇

萬葉集古義十二卷之中

萬葉集古義十二卷之下……………四八八—五九九

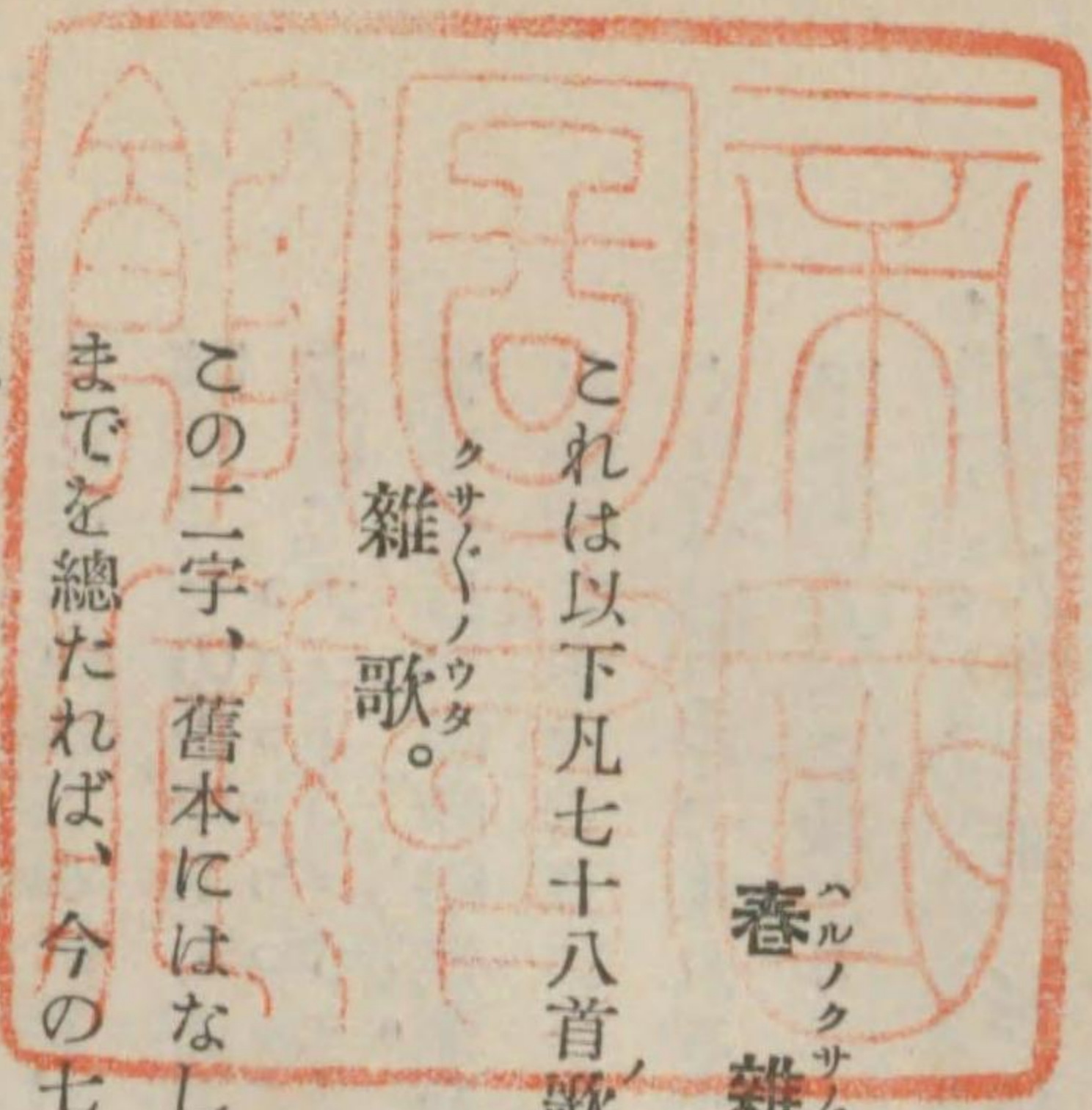
問答歌……………五〇〇 羈旅發思……………五七二 悲別歌……………五七七

問答歌……………六一五

萬葉集古義五目次終

萬葉集古義十卷之上

土佐國 藤原雅澄撰



春雜歌

これは以下凡七十八首歌の總標なり

雜歌

この二字、舊本にはなし、目錄にはかくあり、總標に春雜歌とあるは、下の旋頭歌、譬喻歌とあるまでを總たれば、今の七首の題詞、別に擧ずしては足はず、春相聞も、をはりの問答十一首までの總標なれば、はじめの七首、別に題を擧べきに、舊本になきは足はず、秋相聞の下の相聞五首、冬雜歌の下の雜歌四首、冬相聞の下の相聞二首、みな此に准ふべし、さて今この七首は、みな霞の歌なるを、下に詠霞三首といへると別てるは、所由あるにや

久方之。天芳來山。此夕。霞霏霰。春立下。

天芳來山、來字、舊本になきは、脱たるなるべし、三卷に、天之芳來山、とあるにて、必來字あるべきことを思ふべし、但別所に香山と多く書たるは、芳香同義にて、かぐはしきと云訓を、用たる



ものと思ふはあらず、香山と書るは義異れり、香は、カウの音を轉し用たるものなり、高山と書ると同義なり、既く云り、混ふべからず、○歌意は、此夕方あの迦具山に、霞の立たなびきたるよ、これにて思へば、春が來たるにてあるらし、さてものどかなるけしきぞ、となり

卷向之。檜原丹立流。春霞。鬱之思者。名積米八方。

卷向之檜原は、七卷に、動神之音耳聞卷向之、檜原山乎今日見鶴鴨、とあり、此山の事、既く七卷にいへり、○鬱之思者は、岡部氏オホニシモハハと訓るよろし、霞の立ふさがりて、おほ、おしき意に云かけたるにて、承たるうへにては、大かたの謂なり、之は助辭にて力あり、すべて之の助辭は、その一すぢをとりたて、おもく思はする處におく辭なり、既くたびく云り、○名積米八方は、ナヅミコメヤモと訓て、米は、コメの借字なるべく思はるれども、なほ思ふに來字を誤れるなるべし、嗚呼艱難來むやはの意なり、八は、後世の也波の也にて、方は、歎息辭なり、○歌意、本は序にて、大方にそこを思は、かやうに遠道を艱難、辛勞してあひに來らむやは、一すぢに深く思へばこそ、來れるなれとなり、○今按に、此歌本句は、オホといはむための序なれば、寄霞相聞條に入べき歌なり

古。人之殖兼。杉枝。霞霏霏。春者來良之。

本句は、契沖云、卷向山につきてよめる歌の中にあれば、これも卷向山の杉なるべし、杉は年ひさしくあるものなれば、いにしへの人のうゑけむ杉が枝とはいへり、今按に、卷向山に、昔時人ありて、杉を殖生しと云故事ありて、よめるなるべし、○歌意かくれたるところなし

子等我手乎。卷向山丹。春去者。木葉凌而。霞霏霏。

子等我手乎は、枕詞なり、○木葉凌而は、之奴藝とは、物の堪がたきを押するを云詞なり、三卷に、奥山之菅葉凌零雪乃云々、とあるも、菅の葉を推なびけて零雪を云るにて、薄く零雪ならばこそあれ、厚くふる雪は、その靡かすに堪がたき處をも凌奪ひ、吾處とする謂にて云るなり、但し霞は、草木の葉などをおしなびけて、たなびくものにはあらざれども、たゞ打見たるさまの、木葉の處を凌ぎ奪ひ、吾處として押なびけて、立たなびきたる如くなるを、凡にしか云るぞ古語なる、(略解に、木葉凌而は、常葉木の葉のあはひまでもの意なりといへる、これは木葉のあはひの、人に堪がたき處へも、堪て立入たる謂にとりていへるなるべけれど、いさゝかいかとなり)○歌意かくれなし、(六帖に、せながてをまきもく山に此ゆふべ木の葉しのぎて霞たなびく、と本句を改て載せたり)

玉蜻。夕去來者。佐豆人之。弓月我高荷。霞霏霏。

玉蜻は、枕詞なり、既く出づ、○佐豆人之も、枕詞なり、佐豆人とは、古事記に、海佐知彦、山佐知彦、集中に、薩雄とも見えて、すべて、獵漁する人をいふ稱なり、さて佐都人といふべきを、豆の濁音の字を書るは、妣等の妣の濁音を、上に轉す一格にて、里人を佐度人といふと同例なり、さてさつ人は、もはら弓矢もて鳥獸を獵ゆゑ、さつ人の取持弓束といふ意に、弓槻といふ地に云か



けたるなるべし、カとキは親通へり、(たゞに弓といふにのみ、かゝれるにはあらじ) ○弓月我高は、泊瀬の齊槻が峰より、○歌意これもかくれなし

今朝去而。明日者來牟等云。子鹿丹。旦妻山丹。霞霏。

此歌、第二三句、アスハコムトイフコガニとよみたれど、解べきやうなし、(岡部氏アスハキナムトイフコガニとよみたれど、なほわろし、略解に、朝妻と云山の名によりて、朝歸りては、又あすも來むといふ妻の、契たがへぬ如くに、朝妻山に霞のたなびくと云歟と云るは、大じき強説なり) 故熟按に、こは甚く字の亂れたるなるべし、今われ昔に云べし、こはもと明日者來牟等云愛也子且妻山爾云々、とありしなるべし、さるを愛也を鹿丹に誤て、つひに子字は上に入混て、今の如くなれるなるべし、(又按に子鹿丹は、左丹頰歷とありしを、左を子に誤り、頰字を脱し、歷を鹿に誤、また丹字は亂れて、且字の上に入しものなるべし、三卷に、狹丹頰相吾大王者、此卷に、左丹頰經妹乎念登、七卷に、雜豆藤漢女乎座而、十三に、散釣相君名曰者、などよみたれば、左丹頰歷且妻、とも續くべきことなり、且六卷に、狹丹頰歷黃葉散乍、と書るにて、鹿は歷字の誤なるを知べし、されどなほ上の説によりて、愛也子とせむかた、平穩なるべし、) さて且妻は且夫にて、妹がりゆきて、且に歸る夫をいふことなれば、今朝妹がりより去て、早明朝は來むといふ愛き且夫といひかけたるにて、上は且妻山と云むための序なり、○且妻山は、大和國葛上郡なり、天武天皇紀に、九年九月癸酉朔辛巳、幸于朝嬪云々、仁德天皇紀大御歌に、阿佐豆磨能避簡能鳥璫簡鳥云々、又姓氏錄に、太秦宿禰の先祖を、大和朝津間腋土地に居しめしことなど見えたり、(近江にも、あさづまで

ふ地あれど、此歌なるは、それにはあらず、) 次歌なるもおなじ、○歌意かくれなし、(夫木集に、且妻の片山櫻咲にけり明日は來むといふ人に見せばや、)

子等名丹。開之宜。朝妻之。片山木之爾。霞多奈引。

開之宜、開は闕字の誤なるべし、闕は懸の借字なり、六卷に、缺卷毛と書るなども此例に近し、四卷に、鹿煮漢國二毛とも書り、(又元曆本には關と作り、それに從ば關係る意にて、正訓とすべし、續紀四卷詔に、關母威岐、藤原宮御宇、倭根子天皇云々、關母威岐、近江大津宮御宇倭根子天皇云々、これらによるときは、關とせむぞよろしかるべき、但この續紀なるも、印本には開に誤れり、一本に關と作り、) さて子等が名に係ていふも宜しき且妻、といひかけたる序なり、○歌意これもなくれなし

〔右七首。柿本朝臣人麿歌集出。〕

詠鳥。

白雪之。常敷冬者。過去家良霜。春霞。田菜引野邊之。鷺鳴鳥。旋頭。

常敷、常は落字の誤りにて、フリシクなるべし、常の草書落に誤れる例あり、九卷に、勢能山爾黃葉常敷、十九に、十月之具禮能常可、これらみな常は落の誤なり、敷は、重る意なり、(敷は詞なり、と略解にいひたれども、ひがことなり、) ○鳥、(一本には焉と作り、) 契沖云、和名集に唐韵を引て、鳥は焉と通ずといへり、しかれば、助語におけり、○歌意は、霞の立たなびきて、其野に鷺の



鳴ぬるにて思へば、今は雪の降重る冬は過にけらし、さてもものどかなる春のけしきやとなり

打霏。春立奴良之。吾門之。柳乃宇禮爾。鷺鳴都。

打霏は、契沖、霏は靡の誤なり、前後みなしかりといへり、(霏字も、たなびく意にて、ナヒクと訓まじきにもあらねど、なほ外の例を考るに、契沖のいへるがごとくならむ、)此は草木の若くなよ、かに、打しなひ靡く春とつゞきたるなり、此つゞけ集中にいと多し、○宇禮は、末枝のつゞまれるなり、○歌意は、吾門の前に殖る、柳の梢に来て、鷺の鳴つるよ、これにて思へば、草木の打しなひ靡く、のどかなる春の來れるにてあるらし、となり

梅花。開有崗邊爾。家居者。乏毛不有。鷺之音。

第三四句、イヘチレバトモシクモアラヌと訓べし、(拾遺集には、いへしあればともしくもあらず、と載たれどわろし、)○歌意は、梅の花の咲たるこの崗の邊に、家居を爲てをれば、乏しく少くもあらぬ鷺の聲ぞ、よくこそ此處に、家居をばしつれとなり

春霞。流共爾。青柳之。枝啄持而。鷺鳴毛。

流共爾は、テガル、ナベニと訓たるよろし、さて霞雪の類にも、ながるゝといへること、古へは多し、さるは空方より豎に降るをも、横に延をも、すべて長くひきはへたるを、長るゝといへば、水にはかぎらざることをするべし、(契沖が、霞のうへは、水のながるゝやうなれば、かくはいへりと

いへるは、いさゝか本末を失たるに似たり、)○枝啄持而、契沖、鷺の木傳ふに、まことに何をはむにか、しかするなりといへり、十六詠三白鷺啄木飛歌に、池神力士儂可母白鷺乃、梓啄持而飛渡良武、源氏物語胡蝶に、みづとりのもの、つがひをはなれずあそびつゝ、ほそきえだどもを、くひてとびちがふ、といへり、○歌意は、霞の長く引はへたなびくにつれて、柳の枝を啄持て、鷺の鳴轉るよ、さてもおもしろの春のけしきやとなり

吾瀨子乎。莫越山能。喚子鳥。君喚變瀨。夜之不深刀爾。

莫越山は、大和の巨勢山に、君夫子を越すこと莫らしめよ、此方へよびかへせと云意に、いひつづけたり、七卷に、吾勢子乎乞許世山、とつゞけたるとは反對にて、今は吾方より、歸る夫を呼返せと、喚子鳥に令するなり、○夜之不深刀爾とは、(刀爾は、時爾の略なりといひ、保刀爾の略なりと云などは、穩ならず、)刀爾は、十五に、古非之奈奴刀爾、十九に、左欲布氣奴刀爾、廿卷に、佐久良波奈知利加須疑奈牟和可我做流刀爾、書紀繼體天皇卷歌に、于魔伊爾矢度爾々播都等喇柯稽播儺俱儺梨、などあるに同じ、古事記傳に、(二説出せる中に、)夜之不深刀爾は、俗言に、夜の更ぬうちになど云と同意にて、刀爾は外になり、其を俗に内にと云は、此方を内にし、彼方を外にして云言、外にと云は、彼方を内にして、此方を外にして云言にて、意は同じ、行を來と云も通ふが如しといへり、(今一の説には、刀は早くといそぐ意なり、夜之不深刀爾は、夜のふけぬほどに、早くといそぐ意、古非之奈奴刀爾は、戀死なぬほどに、早くといそぐ意なり、十九に、行得毛來等毛舶波早家無、とあるも、船路は、往きまにも、歸り來るさまにも、いかで速くといそぐ物なる故に、其



を行得來等は云るなり、又、于魔伊爾矢度爾々播都等利柯稽播儼俱儼梨は、鶏のいそぎて早く鳴意、佐久良波奈知利加須疑奈牟和我可徹流刀爾は、櫻花のいそぎて早く散むと此方の心に、然思ふ所なりと云り、いづれか是らむ、なほ上の説によるべきか、○歌意は、巨勢山に棲て鳴喚子鳥よ、今夜吾方より歸り賜ふ吾夫子を、その巨勢山を越すこと莫らしめて、夜の更ぬ内に、此方に喚かへしてよとなり、拾遺集十三に、題知す、山部赤人、吾せこをならしの山によぶ子鳥君よびかへせ夜の更ぬ時とあるは、此歌を心得あやまれるなり

朝井代爾。來鳴杲鳥。汝谷文。君丹戀八。時不終鳴。

朝井代爾、岡部氏、井代は、堰堤のこととすれど、堰堤はあまりに不意く聞え、且朝といはむもよしなし、思ふに朝戸代を誤れるなるべし、下にも、朝戸出といひたりと云り、さらば朝戸出の折節に、來鳴意なるべし、○來鳴杲鳥は、來鳴し貌鳥と云が如し、來鳴しといふ意なるを、直に來鳴とのみ云は、袖吹反せしと云意なるを、袖吹反すあすか風といへるに同じ、古人言のせまらざるを思へし、杲鳥は、品物解に出す、○汝谷毛は、汝さへもと云意なり、○君丹戀八は、君を戀しく思へばにやの意なり、君とは杲鳥の妻を云り、古今集にも、あしひきの山ほととぎすわがごとや君にこひつといねかてにする、とよめり、○時不終鳴は、止時なく、頻りに鳴と云むが如し、時を終るとは、たとへば時にていへば、寅時に鳴て、聲を姑息て、又卯時に鳴は、時を終るなり、刻にていへば、たとへば寅時の一刻に鳴て、姑聲を息て、又二刻に鳴は、刻を終るなり、こゝは時にしても、刻にしても、其時刻の終るにも鳴息ず、しばしも聲を止す、重々に頻り鳴よしなり、一日を十二時にわけ、一時を四刻にわけたるをも、皆古はときとのみいへり、○歌意は、朝戸出の折節に來て鳴し貌鳥よ、吾君を思ふに、忘るゝ隙なきことなるに、吾のみならず汝さへも、その妻を戀しく思へばにや、今朝よりはじめて、時刻の終るをもしらずに、重々に鳴頻るらむとなり

冬隱。春去來之。足比木乃。山二文野二文。鷺鳴裳。

冬隱は、春の枕詞なり、既にたびく出づ、○歌意は、山にも來て鳴、野にも出て鳴、こゝにもかしこにも、鶯のさても面白く鳴よ、これにて思へば、のどかなる春の節に至れるにてあるらし、となり

紫之。根延横野之。春野庭。君乎懸管。鷺名雲。

紫之根延とは、契沖、むらさきの根の横にはふこゝろに、かくはつとけたり、紫の根を見侍るに、横にはふものにはあらず、ほそき筆管ばかりにて四五寸なるがなほくて、めぐりに髭のごとくなるほそき根の、横と云べくもなきが見ゆるなるを、大かたの草木にならずらへて、かくはつとけたるなるべしと云り、○横野は、仁徳天皇紀に、十三年冬十月、築横野堤、延喜式神名帳に、河内國澁川郡横野神社、と見ゆ、契沖云、今横野といふ處は、うけたまはり及ばず、横沼といふ所ぞきこゆる、そこにや、また横野堤和泉なりとて、續古今集光俊、霜がれのよこのつみみかぜさえて入しほとほく千鳥なくなり、と云歌を、ある人かたり侍りし、未考へず、○春野庭は、庭とは、山常庭の庭に同じく、爾波の借字にて、他所にむかへていふ詞なり、この面白き春野には云々、他所はしらず



といふほどの意なり、同じ春なれば、他所もしからぬにはあらねども、この春野の面白きけしきを、つよくいはむがためなり、○君乎懸管は、俗に、君がことをうはさしつゝと云意なり、○歌意は、紫根の蔓る、この横野の面白き春野には、いかで君見に來賜へかしと、君がことを詞に言出つゝ、鶯の鳴よ、さても心ある鶯やとなり、鶯の聲も、人の事をかけつゝ、鳴如く聞なさるゝは、深く思へる事情なるべし

春之在者。妻乎求等。鷺之。木末乎傳。鳴乍本名。

在字、舊本に去に誤れり、○木末は、コヌレとよむべし、木之末枝のつゞまれる古言なり、(ウラエはウレに切り、ノウレはヌレに切れり、)梢のことなり、○鳴乍本名は、もとな鳴つゝの意なり、本名は俗にむさゝくと云むが如し、○歌意は、春になれば、己が妻をもとむるとて、諸木の梢を、此方彼方と傳ひうつりつゝ、むさゝく鳴て、人の戀情をもよほさしむるよ、となり

春日有。羽買之山從。猿帆之内敵。鳴往成者。孰喚子鳥。

羽買之山は、二卷に出て既に註り、○猿帆之内は、佐保山の内にて、集中にあまたよめり、猿はサの借字なり、和名抄に、下總國猿島郡佐之萬、これ猿をサといへる例なり、○歌意は、羽買の山よりして、佐保山の内へ鳴て飛往なるは、そも誰を喚ぶ喚子鳥ぞ、となり

不荅爾。勿喚動曾。喚子鳥。佐保乃山邊乎。上下二。

歌意は、佐保の山邊を、上りては喚、下りては喚喚子鳥よ、誰ありて、答ふる人もなきことなるに、しかのみ喚とよむることなかれとなり、契沖云、これは上の歌の作者、おしかへしてよめり、二首にて、かやうによむこと、この集におほし

梓弓。春山近。家居之。續而聞良牟。鷺之音。

梓弓は、枕詞なり、これは弓を張、といふ意に、つゞけたり、古今集二卷に、あづさ弓春の山べを越來れば道もさりあへず花ぞ散ける、梓弓春立しより年月の射るが如くもおもほゆるかな、などあり、○家居之は、家居を爲賜ひてと云ほどの意なり、(本居氏、之は者の誤なるべし、イヘラレバとよむべしと云るは、かへりていかゞ)○歌意かくれたるところなし、これは山近き處にすむ人を、おもひやりてよめるなるべし、古今集に、野べちかく家居しをればうぐひすのなくなるこゑは朝な朝なきく、これは自家居したる人のよめるなり

打靡。春去來者。小竹之米丹。尾羽打觸而。鷺鳴毛。

小竹之米は、シヌノメと訓べし、篠之群の意なり、十一に、秋柏潤和川邊細竹目云々、とあり、又元曆本に、米を末と作るに従ば、シヌノウレニとよむべし、十二に、小竹之上爾來居而鳴鳥目乎安見云々、とあり、○歌意は、草木の萌出て、打しなひ靡くのどかなる春になれば、細竹の群に尾と羽を打觸て鶯の鳴よ、さても面白や、なつかしやとなり

朝霧爾。之怒怒爾所沾而。喚子鳥。三船山從。喧渡所見。



之怒怒爾所沾而（怒怒、元曆本には努努と作り、）は、此下に、聞津八跡君之間世流（公鳥、小竹野爾所沾而從此鳴綿類、とあるに同じ、しとくと沾漬りてと云意なり、俗に、しつぽりとぬるゝと云に同じ、伊勢物語に、蓑も笠も取あへで、之等等に濕てまどひきにけり云々、金葉集連歌に、雨降ば岸も之等々になりけり鶺鴒ならばかゝらましやは、などある之等等は、もとの之怒怒を、シトトと訓誤りたるより出來たる詞なるべし、怒字には、ト又の兩音あればなり、されど集中には、×の假字にのみ用ひて、トには用ひざる例なるを、委く考へざりしものなり、）霧は水氣よりおこれる物なれば、沾と云はさらなり、○歌意かくれたるところなし

ヨメルユキヲ

この二字、こゝに必あるべきが、舊本になきは脱たるなり、上件十三首は詠鳥の歌、以下十一首は詠雪の歌なればなり

打塵。春去來者。然爲蟹。天雲霧相。雪者零管。

春去來者、契沖、この春さりくればといひて、下のつゞき、心たがへるやうに聞ゆるは、第四卷に、見まつりていまだ時だにかはらねばとし月のごとおもほゆる君、と云歌のごとく、此集に、者の字に、今の世とかはれることありて、心得がたし、此歌にては、春さりくれどといはざれば叶ひがたしと云り、さることなり、（但し此歌にては、其大意はたがはねども、なほ來者を、くれどときかむは、いさゝかよろしからず、來者は來るにの意なり、四卷なる、未時太爾不更者も、更らぬにの意

なり、）二卷高市皇子尊殯宮の歌に、憶毛未盡者とあるも、いまだ盡ぬにと云意にて、其處に既く委く註のごとく、今も春さりくるにの意なり、（或人疑ひて云けらく、未盡者、未解者、未枕者、不更者、不有者、など云る類を、未盡ぬに、未解ぬに、未枕ぬに、更らぬに、有ぬにと聞ことは、古言の常なり、しかるを來者を來るに、往者を往にと聞むことは、おぼつかなしといへり、まことにさることなり、しかれども、三卷に、稻日野毛去過勝爾思有者、心戀敷可古能鳥所見、とある、思有者も、思へるにと云意に聞え、又此下に木晚之暮闇有爾雀公鳥、何處乎家登鳴渡良武、とある歌の、第二句を、一本に、暮闇有者とあり、この有者も、意は有にと聞ゆれば、來者を來るにと聞こともありしか、○然爲蟹は、さすがにと云に同じ、俗に、しかしながらにと云が如し、後拾遺集に、しかすがのわたりにてよみ侍ける、思ふ人有となけれどふる里はしかすがにこそこひしかりけれ、○天雲霧相は、雪ふらむとて、雲の雨霧さまを云り、（略解に、きらひを、霞のことゝせるはあらじ、）○歌意は、草木の萌出て、打しなひ靡く、のどかなる春になりぬるを、しかしながらに、なほさえかへりて、天に雲霧などの立覆ひ陰りて、雪はふりつゝ寒さに堪がたく思はるゝ事ぞとなり、（六帖に、此歌を、打なびき春さりくらしと改たるは通え難し、）

梅花。零覆雪乎。裏持。君爾令見跡。取者消管。

裏持は、ツ、ミモチと訓べし、○歌意は、梅花をふり覆ふ雪の面白ければ、この見どころある雪を、このまゝつゝみもちて、君に見せむと思ひて、とれば消つゝ、あとかたもなく失るを、いかにしてか見せまらせむ、唯獨見つゝあらむは、甚くちをしきものを、となり



梅花。咲落過奴。然爲蟹。白雪庭爾。零重管。

咲落過奴は、散過ぬと云に同じ、散を咲散といふは、古言の常なり、○歌意は、梅花は既に散失ぬ、これにて思へば、今はひとへに和に暖なるべき理なるを、しかしながらに、庭上に重に雪のふり積つゝ、なほいと寒き事ぞとなり

今更。雪零目八方。蜻火之。燎留春部常。成西物乎。

蜻火は、陽炎にて、後世に遊絲とよむものなり、○歌意は、そらには陽炎の燎わたりて、遊絲くりわたしつゝ、まことにのどかなる春になりしものを、今更又さえかへりて、雪のふる事のあるべしやは、となり

風交。雪者零乍。然爲蟹。霞田菜引。春去爾來。

風交は、五卷貧窮問答歌に、風雜雨布流欲乃雨雜雪布流欲波云々、八卷に、風交雪者雖零實爾不成吾宅之梅乎花爾令落莫、などあり、(新古今集に、風まぜにとあるは拙し、)○春去爾來は、春になりけりと云に同意なり、佐留と云義は、既に委註り、○歌意は、風の吹に雜りて雪はふりつゝ、なほ寒くはあれど、しかしながらに、霞の立たなびきて、のどかなる春のけしきになりけり、となり

山際爾。鷺喧而。打靡。春跡雖念。雪落布沼。

歌意は、山際に鷺の鳴て、木芽萌出靡きつゝ、今はのどかなる春になりぬるよ、と思ひゆるしてあれど、又さえかへり、しきりに雪のふりつゝ、寒くある事ぞとなり、(六帖には、終句、雪はふりつゝ、とて載たり、)

峯上爾。零置雪師。風之共。此間散良思。春者雖有。

歌意は、春にはあれど、ちらりちらりと雪のふり來るは、此は今ふる雪にはあらじ、あの山の峯上に、去年の冬深く降積置たる雪が、風の吹につれて、此處に散來るにてあるらしとなり、これは實は春ふる雪をみて、去年の冬ふりおきたるゆきを、風の吹具しもて來て、此間にちらすらしといへるなり

(右一首。筑波山作。)

爲君。山田之澤。惠具採跡。雪消之水爾。裳裾所沾。

惠具は、芹の類なり、品物解に委註り、○歌意は、君が爲に、山田の澤に下り立て、惠具の若菜を摘とて、雪解の水に裳裾は沾て、寒く苦しき事ぞ、君を思ふころの深からずは、かくはあるまじきを、となり

梅枝爾。鳴而移徙。鷺之。翼白妙爾。沫雪曾落。

歌意かくれたるところなし、契沖云、此歌は、打きくよりおもしろきうたなり



山高三。零來雪乎。梅花。落鳴來跡。念鶴鳴。

歌意は、山が高きゆゑに、雪のはらくとふもとにふりくるを、梅花の咲たるが風にちりくるにやと、見まがへつる哉、さても見事の雪やとなり、○舊本に一云梅花開香囊落跡、とあり、いづれにてもよけむ

除雪而。梅莫戀。足曳之。山片就而。家居爲流君。

除雪而は、雪をさしおきての意なり、○梅莫戀は、梅を愛ることなかれといふ意なり、戀は愛ることなり、三卷に、石竹之其花爾毛我朝旦、手取持而不戀日將無、とあるに同じ、○山片就而は、山にかたよりたるをいふ、六卷には、不知魚取海片就而、とよみ、十九には谷可多頭伎低、ともよめり、會根好忠歌には、とよまかたがけ、とよみ、源氏物語手習には、山かたがけたる家なれば、松かけしけく、風のおともいところほそきに、と云り、このかたがけも、かたづくと云に同じ、○家居爲流君は、流は衍文なるべし、さらばイヘヲラスキミと訓べし、伊徹爲てふ詞は、古今集の頃よりこなたには、常に云ことなれども、集中はさらにて、他の古書にも見えたることさらになければなり、○歌意は、山にかたよりて家居し賜ふ君よ、雪をさしおきて、梅を愛賜ふ事なけれ、山かたよりたれば、雪には常にうとからじを、その雪は、見どころも、梅にはおとらじものをとなり、契沖、これはかへしなれば、梅の花ちりかもくるとおもふと云るは、梅を愛する心から、雪をもそれかと見て云るやうによみたれば、雪をば雪と見てめでずして、これをばおきて、なぞやかれにまがへては見ると、雪の方人する心によめりといへり

〔右二首。問答。〕

詠霞

昨日社。年者極之賀。春霞。春日山爾。速立爾來。

歌意かくれたるところなし、契沖云、古今集に、きのふこそさなへとりしか、とよめる歌のこと葉とおなじくて、かれは時節のはやくうつるにおどろき、これは春とともに、霞のはやくたつを、よろこべるこゝろによめり

寒過。暖來良思。朝鳥指。滓鹿能山爾。霞輕引。

本二句は、持統天皇御製に、春過而夏來良之、とあると、同じ語例なり、寒暖を、冬春といふに用ひたること此下にも、寒過暖來者、とあり、(文選左太冲吳都賦に、露往霜來、註に、濟云、露秋也霜冬也、とあり、此類なり、)○朝鳥は、朝日なり、鳥字は金鳥の義もて書り、○歌意は、いまだ冬の節と思ひ居しに、この朝日さす春日山に、霞の立たなびきたるを見れば、はやその冬は過て、春來るにてあるらしとなり、六帖に、第二句、春立ぬらしとて載たり

鷺之。春成良之。春日山。霞棚引。夜目見侶。

鷺之春と云るは、鷺の囀る春といふ意なり、白浪の濱といひて、白浪のよする濱と云意になると、



同例なり、このこと既に委云り、(夫木集に、鶯の春になりぬと佐保道なる羽買の山のまづ霞みぬる) 下に、宇能花乃五月乎待者、ともあり、○春成良思、成字元曆本には來と作り、さらばハルキタルラシとよむべし、此はいづれにても宜からむ、○夜目は、字の如し、宇津保物語萬歳樂に、中納言なにくぞととひ給へば、うへのおとと、夜目にもしるくぞときこえ給へば云々、榮花物語つぼすみに、御使の祿、夜目にもけさやかに見ゆる、つるの毛衣のほどもことなり、駒くらべの行幸に、空はれ月くもりなくかゞやけるに、女房のなり袖口夜目にもしるく、いへばおろかに、めでたうおはしましぬ、○歌意は、春日山を、晝はさらなり、夜目に見れども、それと着く、霞の立たなびきたるは、鶯の囀る、のどかなる春に成たるにてあるらしとなり

詠柳

霜干(千字、舊本十に誤り)は、字の如く、霜に枯ること、誰も思ふことにて、それも然ることな

るべけれど、今一きは立入て考るに、霜は借字にして、凋枯しの義なるべくぞ、おもひなりぬる、ボとモとは同韻にて、親通へり、十一月を霜月と云も草木の凋枯る時ゆる、凋月といふなるべし、(霜の降月と云意と思ふは、古義にあらず)○見人は、良人の誤ぞといへど、猶思ふに、見の下に、八字などの脱しものにやあらむ、さらば宮人の意なるべし、下に大宮人之藪有、ともよめるをおもへ、と中山嚴水いひたりき、宮人は、大宮人のことなり、(いはゆる宮人にかぎるべからず)○目生は、(目は借字にて)芽生なり、メハの切はマなるをモに轉じてモエといへり、○歌意は、冬の

霜雪に凋枯て、見どころなくなりし柳は、今春を待得て、大宮人の藪に造るべく芽生にける哉、さても麗しの柳ぞとなり

淺緑。染懸有跡。見左右二。春楊者。目生來鴨。

染懸とは、染て掛乾す意なり、○歌意は、薄緑の絲を、染て掛乾たるなりと、ふと見まがふまでに、春の楊は芽生にける哉となり

山際爾。雪者零管。然爲我一。此河楊波。毛延爾家留家聞。

歌意は、山際に雪はふりつゝ、なほ寒くあれど、しかしながらに、春になりぬとしられて、この河邊の楊は、芽生にける哉となり

山際之。雪不消有乎。水飯合。川之副者。目生來鴨。

水飯合は、飯は激字の誤ならむ、と岡部氏が云る、是はさもあるべし、但しミナギラフと訓るはわろし、霧ふ意ならば、激字は、遠からむ、此はタギチアフと訓べし、一卷に、珠水激瀧之宮子波とある珠も、隕字の誤にて、オチタギツと訓べければ、相例すべし、なほ一卷に委云るを、考合べし、さてこゝは、激り落合にて、急流の貌をいへるなり、○川之副者、(之字、活字本にはなし、これによらば、者字は、柳か楊かの誤にて、川副柳ならむか、顯宗天皇紀に、智鏡沂比野儺擬、とあり、現存六帖に、さよれ浪いざ行て見む佐保道なる河そひ柳もえわたるらし、)荷田翁、副は楊の誤かと



いへり、さらばカハノヤナギハとよむべし、○歌意は、山際に降積置たる雪は、なほ消あへずして寒くあるを、さすがに春としられて、この激り落合河の邊の柳は、芽生にける哉となり、(これを略解に、右の歌と問答なるべしといへれど、あらじ、たゞ似たる歌なるゆゑに、並載たるなるべし)朝旦。吾見柳。鶯之。來居而應鳴。森爾早奈禮。

森は、(説文に、森木多貌、とあり)思宜美と云むが如し、二卷に、木丘開道乎とある、木丘と同意にて、毛伎、毛久、毛利、毛留、などはたらく言なり、續紀宣命に、牟俱佐加爾とある牟俱も、是に同じ、さてこゝは毛利と體言にいひするたれば、茂みと云るに同じ、源氏物語蓬生に、かたもなくあれたる家の、木立しゆくもりのやうなるを過賜ふ、うつぼ物語俊蔭に、椎栗もりをはやしたらむごとく、めぐりて生つらなれり、枕冊子に、もりは云々、かうたての森といふ、みよとよまるこそあやしけれ、もりなどいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ、などあるもりも、みな繁茂みのことなり、夫木集に、玉ほこの道のなはてのさしやなぎ早もりになれたちもやどらむ、これは全今の歌によれり、○歌意は、朝毎に出て見る吾庭の柳よ、鶯の來り棲て、常に鳴べき茂みに急くなれとなり

青柳之。絲乃細紗。春風爾。不亂伊間爾。令視子裳欲得。

絲乃細紗は、大神眞潮翁のイトノクハシサと訓しぞ、いとよろしき、(略解に、絲乃細紗とありしを誤れるにて、ミドリノイトノと訓べし、と岡部氏の云るよし云れど、いと強解なり)細は、柳絲の

麗しきを、ほめて云言なり、目細、心細の細に同じ、紗は、廣左、深左などいふ左なり、○不亂伊間爾とは、伊は助辭なり、不亂伊と屬て心得べし、用言の下に、伊の助辭をつけて云こと、續紀宣命などに例多し、七卷に、向岡之若楓、木下枝取、花待伊間爾、嘆鶴鳴、とあるも、今と同じ、俗に亂れぬうちにと云むが如し、○歌意は、青柳の絲の微く妙に麗しきも、春風の荒く吹來らば、亂れ混ぬべければ、いかでこの麗しさを、風の吹亂さぬ内に、はやく見せむと思ふに、其女もがな、こゝにあれかしとなり

百儀城。大宮人之。繡有。垂柳者。雖見不飽鳴。

歌意は、大宮人の、繡に造りて刺るしだり柳は、見れどあかぬ哉、さても麗しやとなり

梅花。取持見者。吾屋前之。柳乃眉師。所念可聞。

歌意は、旅にありて、梅花を折取て持見れば、此ほど柳も芽生ぬらむと思へば、吾家の庭に殖る柳眉が、一すぢに戀しく思はるゝ哉となり、契沖は、わがやどの柳の眉は、妻のかほよきをおして柳眉と云り、梅をほめて、兼て梅によりておもひいづるなりといへり、こゝはさらすとも、まことの柳にてあるべし、但妻の美貌を思ひ出る意は、言外にあるべし、必比へたるものなりとせずとも

詠花。

春日在。三笠乃山爾。月母出奴可母。佐紀山爾。開有櫻之。花乃可見。旋頭歌。



月母出奴可母は、いかで月も出よかしと希ふ意なり、○佐紀山は、既く一卷に委註り、○歌意は、佐紀山に咲る櫻花の夜さへ見ゆべく、三笠山にいかで月も出よかしとなり、三笠山は添上郡、佐紀山は添下郡にて、間近ければかくよめり

鷺之。木傳梅乃。移者。櫻花之。時片設奴。

時片設奴は、契沖、梅のうつろふころ、櫻はさきそむれば、時片まけぬといへり、時をまうけ得るなり、さかりにはならねば、片設といへり、今按に片設は、片附設るよしなり、片は、夕片設、山片附なども多く云る如く、中間を過て、其方に偏倚ることなり、○歌意かくれたるところなし

櫻花。時者雖不過。見人之。戀盛常。今之將落。

歌意は、櫻花の盛の、時の過たるにはあらねど、人の賞愛るさかりをすぐしやりなば、又人にをしまるゝこともあらじ、今は見はやす人々に、愛らるゝ盛りなればとてや、今かくちるらむとなり、古今集に、いざ櫻われもちりなむ一盛ありなば人にうき目見えなむ

我刺。柳絲乎。吹亂。風爾加妹之。梅乃散覽。

我刺は、契沖は、我頭刺と有けむ、頭字の脱たるか、例みなしかり、さらすば、ワガサセルと訓べしと云り、九卷に、妹手取而引與治椽手折君刺可花開鴨、とあれば、なほもとのまゝなるべし、刺は、もとより頭刺事なり、○妹之梅とは、妹之家之梅と云が如し、○歌意かくれたるところなし

每年。梅者開友。空蟬之。世人君羊蹄。春無有來。

毎年は、十九自註に、毎年謂之等之乃波、とあり、○君羊蹄は、君は吾字の誤なり、といへる説によるべし、アレシと訓べし、羊蹄はシの假字なり、シは、例のその一すぢなることをいふ助辭なり、○春無有來は、伊勢物語に、君がやどには春なかるらむ、とあるを、思合べし、○歌意は、年ごとに、色もかはらず梅は咲ども、世の事業にかゝづらひて、暇なき吾身には、春の和かなる心もなかりけり、となり

打細爾。鳥者雖不喫。繩延。守卷欲寸。梅花鴨。

打細爾は、やがて打つけにの意なり、四卷に出て、既く委いへり、こゝは打つけに、他事なく物する謂なり、○歌意は、時としては、蔓蕨の甘味を來り吸喫事もこそあれ、打つけに他事なく來て、常にさらす鳥の喫事は無れども、標繩引延て、いつも目を離たず、守らまほしき梅の花にてある哉、さても見ても見ても見足ぬ花ぞ、となり

馬並而。高山部乎。白妙丹。令艷色有者。梅花鴨。

馬並而は、本居氏、馬は忍字の誤なるべし、オシナベテとよむべし、といへり、○梅は、岡部氏、櫻を誤れりと見ゆ、梅は後に異國より來し花にて、村里にこそ多けれ、高山に有ものにあらず、といへり、○歌意は、此方の高山をも、彼方の高山をも推なべてのこさず、白たへの布引延たるごとく、



眞白に艶々と見せたるは、櫻花にてある歟、さても見事に咲たる花の盛にてあるぞ、となり  
花咲而。實者不成登裳。長氣。所念鴨。山振之花。

長氣は、長き來經の約れる言にて、長き月日にと云が如し、○歌意は、花は既に咲たれど、未實はならず、されど未花の咲ざりし前より、此山振をなつかしく思入たれば、つひに實になる時を待て取むと、月日長く戀しく思はる、哉、といふにや、略解云、按に此歌、女のうけひきて、いまだ逢ぬをそへたる譬喩歌なるが、まぎれて入たるなるべし

能登河之。水底并爾。光及爾。三笠之山者。咲來鴨。

能登河は、大和國添上郡にて、高圓三笠の二山の間を、西へ流るゝとぞ、○咲來鴨は、櫻なるべし、○歌意は、能登河の川面はさらにもいはず、水底までが、ひかりわたるまでに、三笠山の櫻花は咲にける哉、さても見事の花盛や、となり

見雪者。未冬有。然爲蟹。春霞立。梅者散乍。

歌意は、この雪のふるを見れば、未冬のけしきなり、しかしながらに、霞の立わたりて、梅の花は散つゝ、春の節になりぬるさまの、かつはしるくてあり、となり

去年咲之。久木今開。徒。土哉將墮。見人名四二。

之久木は、(略解に、久木は冬木の誤にて、フユキなるべしと云れど、謂なし、)岡部氏は、之は左、木は樂の誤にて、左久樂とありけむか、さらば、コゾサケルサクライマサクとよむべし、と云り、今按に、之は上に屬べし、久木は、足氷の誤にてもあらむか、久足草書混ぬべし、木と氷と、もとより似たり、されば、馬酔木の借字とすべし、(枕詞のあしひきをも、足氷木と書る所もあり、考合べし)○歌意は、去年春咲し、馬酔木の花の盛に咲たるを、いかで心あらむ人に、今の間に見せたくは思へども、さる人もなければ、いたづらに地に散て失なむか、となり

足日本之。山間照。櫻花。是春雨爾。散去鴨。

山間照は、ヤマカヒテラスと訓べし、(ヤマノマと訓はひがことなり、ヤマノマならば、山際と書例なり)十七に、夜麻可比爾佐家流佐久良乎多太比等米伎美爾彌西底婆奈爾乎可於母波牟、とあるに同じ、山間は、山と山との間を云、山の峽ともいへるに同じ事なり、○散去鴨は、去の下に、來の字の脱たるか、さらばチリニケルカモとよむべし、○歌意は、山の峽を照して、盛に咲るさくらばなよ、見るほどもなくて、この春雨に散にける哉、さても惜ことぞ、となり

打靡。春避來之。山際。最末末之。咲往見者。

最末末は、トホキコヌレとよみたるは、けにさもあらむ、○歌意は、遠山の梢の花の、日にそひて咲往を見れば、今はのどかなる春になるらし、となり

春鷄鳴。高圓邊丹。櫻花。散流歷。見人毛我裳。



散流歴は、チリテナガルを延云るにて散事の緩なるさまなり、流は即落さまを云り、○歌意は、春雉の鳴て面白き此高圓山の邊に、さくら花のはらくと散飛けしきを、あはれ心ありて、見はやす人もがなあれかし、となり

阿保山之。佐宿木花者。今日毛鴨。散亂。見人無二。

阿保山は、(谷川)士清、阿保山は、大和國高市郡にありて、今阿部山といへり、と云り、此説はいか  
があらむ、頼朝陸奥へ下向の時從へる人に、阿保次郎實光あり、もしは此地より出し人か、(大神真  
潮翁説に、阿は佐の誤にて、佐保山なるべしと云る、さもあらむ、(略解に、阿保山は、山城にも、  
伊賀にも在といへれど、此前後國々の歌はなくして、大和の地名のみよみたれば、他國のにはあらじ  
かし)○佐宿木は、作樂の誤とする説やしからむ、又按に、宿木は、冥之の誤か、さらば佐冥之  
り、又宿は、空か宮の誤、木は樂の誤にて佐空樂か、猶考べし、○歌意は、佐保山の櫻花は、行て  
見はやす人なしに、今日このごろ、いたづらに散亂らむか、となり

川津鳴。吉野河之。瀧上之。馬酔之花會。置末勿勤。

馬酔之花會、本居氏、會の詞聞えず、會は者の誤なるべし、と云り、信にさもあるべし、アシビノ  
ハナハとよむべし、○置末勿勤は、大神真潮翁説に、末は土の誤なり、ツチニオクナユメと訓べし  
と云り、是よろし、(又六帖に、此歌の末句を、あせみのはなぞ手なふれそゆめ、とあれば、置末勿  
勤は、手勿觸勤とありしを、誤れるかともおもふべけれど、非ず、さるは勿云々會と云て、勤と

いへる例なし、云々勿といひて、勤といふ例なればなり、○歌意は、吉野河の瀧上の馬酔木の花  
は、ゆめノ散て土に置な、いつまでもかくて梢にあれ、といふなるべし

春雨爾。相爭不勝而。吾屋前之。櫻花者。開始爾家里。

歌意は、雨にはいたみやすければ、いな咲出じとあらそひたれど、春雨にあらそひ勝ことを得ずし  
て、櫻花は咲始にけり、いかで雨にいたますもがなあれかし、心がよりなることぞ、となり

春雨者。甚勿零。櫻花。未見爾。散卷惜裳。

歌意は、櫻花をいまだ行て見ぬうちに、はや散失む事のさてもをしや、いかでこの春雨は、さばか  
りいみじうつよく降ことなかれ、かやうにつよく降ては、得散すにはあらじと思ふぞ、となり、(新  
古今集に、末句を、まだみぬ人にちらまくをし、と載たるは誤なり)

春去者。散卷惜。櫻花。片時者不咲。含而毛欲得。

櫻一本に梅と作り、○歌意は、春になりて咲といなや、はや散失む事の惜く思はるゝ櫻花よ、しば  
しの間は、なほ咲出ずにふくみてもがなあれかし、となり

見渡者。春日之野邊爾。霞立。開艷者。櫻花鴨。

歌意かくれたるところなし



何時鴨。此夜之將明。鷺之。木傳落。梅花將見。

歌意は、いつしか此夜の明む、さてもいかに急ぐ明よかし、さらば、鶯の木傳ちらす、梅花のけしきを見むに、となり、三卷長歌に、何時鴨此夜乃將明跡侍從爾云々、十九に、袖垂而伊射吾苑爾鷺乃木傳令落梅花見爾、皆思合へし

詠月。

春霞。田菜引今日之。暮三伏一向夜。不穢照良武。高松之野爾。

暮三伏一向夜は、暮月夜なり、夕月と云に同じ、三伏一向とかけること、詳なる説なし、(東齋隨筆に、嵯峨帝御時、無惡善とかける落書有けり、野相公に見せらるゝに、さがなくてよけむとよめり、惡はさがとよむゆゑなり、御門御氣色あしくて、さては臣が所爲かと仰られければ、かやうの御疑侍らむには、智臣朝にすゝみがたくやと申ければ、一伏三仰不來人待書暗雨降戀筒寢、とかゝせ給ひて、是をよめとて給はせけり、月夜には來ぬ人またるかきくもり雨もふらなむ戀つゝもねむ、とよめりければ、御氣色直りにけりとなむ、落書はよむ所にとがありと云ことは、これより初るとかや、わらべのうつむきざいと云物、一ふして三あふけるを、月夜と云なり、と云り、此事十訓抄にも見えたり、今つら／＼按に、此説は、かた／＼まがひたるものならむ、さるは今の歌をもて考るに、三伏一仰とこそあるべきを、おほしたがはせて、一伏三仰とかゝせ給へるものか、また一ふして三あふけるを、月夜と云よしあるも疑はし、但一伏三仰とあるは、もとよりたがへることにて、其を

三伏一仰と正して、三たび伏て一たび仰ぐものを月夜といひしとせむに、もしさる物を、やがて月夜といひしならむには、今の歌、暮三伏一向にて、ユフゾクヨと訓るゝことなれば、夜字は無用に餘れり、されば思ふに、古の少童の玩具に、都久と名づけしものありしにて、その都久と云物は、三たびころび伏て、一たび仰ぐものにこそありけめ、(今世小兒の玩具に、起あがりこぶしといふものなどの類なり、)さる故に、都久と云に、三伏一向とかき、夜字をば別に添て、ツヨクとは訓せたるなるべし、さてその少童の玩具に、三たびころび伏して、一たび仰ぐものを、都久とはいかで名づけむ、其はなほよく考べし、さて又その類の玩具に、許呂と呼ぶものもありしならむ、其は一たびふして、三たび仰ぐものにこそありけめ、さるは十二に、末中一伏三起と見え、十三に、根毛一伏三向、とあるなどにて、さ思はるゝなり、堪囊抄小兒の玩物を多く擧たる中に、肚と云もの見えたり、この肚といふもの、一たび伏て三たび仰ぐものにてぞありつらむ、さて其を許呂と名づけし縁は、轉すものなる謂にてもあらむ、此はこゝに用なけれど、三伏一向夜とかけるよしをことわれる因に、かつ／＼いへるなり、なほ後にもいふべし、○不穢は、穢は淨の反對なれば、義を得てキヨクとよませたり、○高松は、タカマトとよむべし、松は言を轉して、借用る例なり、高圓なり、○歌意は、霞の立たなびきたる夕の月なれば、朦朧なるを、打晴たる高圓の野の高き地は、物にさへらるゝことなれば、なほかゝる夕も、きよく明らかに照らむ、と想ひやれるなるべし

春去者。木陰多。暮月夜。樽東無裳。山陰爾指天。

第二三句、舊本には紀之許能暮之夕月夜、とあり、木之木暗之と云なるべし、今は一云、春去者木

春去者木



陰多暮月夜、とあるを用ふ、陰は隱の誤なり、○鬱東無裳は、朦朧なるを云、裳は、歎息辭なり、  
○山陰爾指天は、三卷に、吉野爾有夏實之河乃川余杼爾鴨會鳴成山陰爾之氏、(今の歌終句を六帖に、  
花陰にしてとあるはいかゞ)○歌意は、つねだに夕月は、十五夜月などの如くに、明ならぬを、ま  
して春になりて、枝葉繁く萌出て、木隱多き山蔭にして、霞は深く、いとどおほくしく朦朧なる  
夕月哉、となり、古今集に、夕月夜おほつかなきを玉くしけ二見のうらはあけてこそみめ  
朝霞。春日之晩者。從木間。移歷月乎。何時可將待。

本一二句解え難し、(契沖、朝霞のたつ春の日、といへるか、朝霞のはるゝ、とつゞくる心か、はる  
日の晩者は、くれたらばなり、と云り、いかゞ、本居氏は、一二句は春日の朝に霞みてくらきを云、  
くれの詞は、このくれなど云に同じ、さて其朝霞のくらき時分はと云なり、朝霞のくつき時分より、  
夜までのまち久しきよしなり、と云れど穩ならず)もしは朝より霞の立覆ひて、春日の光の暗き時  
節なれば、まして夜になりなば、いよくくらかるべし、たとひ月出ても、月の光のおぼろにて、  
きよく照べきならねば、その月のうつろふ影を、いつとか待べきといふにや、猶考べし、(但し春日  
の枕詞に、春霞とおけること、三卷にも此上にも見えたり、此等を合思ふに、もしは此歌も、初句  
は枕詞にて、朝霞春日云々とつゞきたる歌なりけむを、とかく混れたるものならむも知べからず)  
末句六帖には、いざよふ月をいつしかも見む、とて載たり

詠雨。

春之雨爾。有來物乎。立隱。妹之家道爾。此日晚都。

妹之家道は、妹が家に行道なり、妹家にはあらず、○歌意は、春のならひの雨にて、つれづれとをや  
みなく降長雨なるものを、それに心のつかずして、降止たらば、その雨間に、妹が家に至らむと、妹  
が家に行道に雨やどりして、いたづらに此日を晩しつる、となり、(契沖、春の雨に有けるものをと  
は、はかしくもふらぬを、雨やどりをして暮せしとなり、と云るは、いかゞ)

詠河。

今往而。香物爾毛我。明日香川。春雨零而。瀧津湍音乎。

聳は、聞の異字なり、○歌意は、春雨に明日香川の水益りて、激り行湍音の潔さを、今急行て聞  
べき暇もがなあれかし、と云なるべし

詠煙。

春日野爾。煙立所見。憾孀等四。春野之莖芽子。採而煮良思文。

莖芽子は、若菜の名なり、品物解に委いへり、○歌意かくれたるところなし

野遊。

春日野之。淺茅之上爾。念共。遊今日。忘目八方。



淺茅之上爾、七卷に、家爾之氏吾者將戀名印南野乃淺茅之上爾照之月夜乎、ともあり、○遊今日は、アソブコノヒノと訓べし、アソベルケフハと訓は、よろしからず、○歌意は、心のあへる友人共、春日野の淺茅がうへに群居て遊ぶ、今日の面白さの、得忘れられむやは、いつまでも得忘れじ、となり  
春霞。立春日野乎。往還。吾者相見。彌年之黃土。

往還は、往つ來つ幾回も度重ぬるよしなり、○相見は、思ふ友人共と共に見む、となり、○歌意か  
くれたるところなし

春野爾。意述將跡。念共。來之今日者。不晚毛荒糲。

意將述跡は、十九に、許己呂能字知乎思延、又、振放見都追念暢見奈疑之山爾云々、又古今集長歌に、  
いかにして念ふ心をのばへまし、などあるによらば、コ、ロノベムトと訓べし、但三卷に、酒飲而  
情乎遣爾、十一に、戀事心追不得、又意追、(この二の追は、遣の誤ならむ)、十二に、意遣、十七  
に、於毛布度知許己呂也良武等、十九に、見明良米心也良牟等、などあるうへ、こゝも舊訓には、  
コ、ロヤラムトとあれば、述は遣の誤にてもあらむか、(略解にも、遣ならむ、といへり)、○今日をケ  
フノヒ明日をアスノヒなど云は、古言なり、集中に多し、伊勢物語にも、をしめども春のかぎりの  
けふの日の夕ぐれにさへ成にけるかな、とあり、○荒糲は、有かしと希ふ意なり、糲は、ヌカの借  
字なり、四卷に、人毛無國母有糲、とかけり、續紀に糲虫、字鏡にも、穉俗作糲、奴可と見え  
り、(糲は糠の誤とするは、中々に非なり)、○歌意は、春の野に遊びて、いぶせきこゝろをやり失は  
むとて、心のあふ友人共、さそひつれて出て來し今日は、いかで晚ずもがなあれかし、となり

百穢城之。大宮人者。暇有也。梅乎挿頭而。此間集有。

暇有也は、暇あればにやの意なり、○歌意かくれたるところなし、後世此歌の末句を、櫻かざして  
今日も暮しつ、として、赤人の歌とせり

歎。舊。

寒過。暖來者。年月者。雖新有。人者舊去。

雖新有は、アラタマレドモとよむべし、古今集に、百千鳥さへづる春は物毎にあらたまれどもわれ  
はふりゆく、とあり、○歌意かくれたるところなし

物皆者。新吉。唯人者。舊之。應宜。

新吉は、アラタシキヨシと訓べし、(新を、アタラシキといふは非なり、アラタは新字の意、アタラは  
惜字の意にて、もとより別言なるを、言の似たるより混ひて、新をも惜をもアタラといふことゝな  
れるは、後のことなり、この事は、はやくいへり、)吉は字義の如し、(縦といふにはあらず、)○舊之  
は、舊本にフリヌルノミソ、と訓るによりて思ふに、之は耳の誤なるべし、○歌意かくれたるとこ  
ろなし、契沖云、尙書盤庚上曰、遲任有言、人惟求舊、器非求舊、惟新、とあり、此心にて此  
歌はよめるか、おのづからかなへるか、又云、次上の歌の作者、二首にてこゝろを足すゆゑに、此



歌に春はなけれども、春の歌とせり、按に、尙書に云る謂は、人は多くの年を経て、さまざまの理に習たる故に、老人を求め、器は年ふりたるは、敝れやすきによりて、新を求むと云るなりと、説るによれば、此歌の意にかなひたれば、實にかのからぶみを思ひて、よめるにもあるべし、但彼に求舊と云るは老人の謂にあらず、世臣舊家の人をいふなり、といへる説の如きは、とらざりしなるべし

ヨロコブアヘルナ  
權逢

住吉之。里得之鹿齒。春花乃。益希見。君相有香聞。

里得之鹿齒、岡部氏、得は行の草書を短く書しより、得に誤しなるべし、さればサトユキシカバと訓べし、といへり、○春花乃は、賞愛の枕詞なり、○益希見は、三卷人麻呂の長皇子に奉られたる歌に、春草益目頼四寸吾於富吉美可聞、とあり、○歌意は、住吉の里を行たりしかば、思はずも賞愛しき君に行遇たる哉、と深く懼びたるなり

譬諭歌

吾屋前之。毛桃之下爾。月夜指。下心吉。菟楯頃者。

下心吉は、本居氏、吉は誤字にて苦なるべし、本の句は、下をいはむ爲の序のみなり、さて下心苦は、シタナヤマシモ、又シタニソナケク、などもよまむか、といへり、○菟楯は、借字にて轉なり、本居氏、宇多曰は、本よりあることの愈進て、殊に甚しくなるをいふ言なり、古事記、須佐之

男命の悪行を爲給ふ所に、猶其悪態不止而轉云々、此集十一に、若月清不見雲隱見欲宇多手比日、十二に、何時奈毛不戀有登者雖不有得田直比來戀之繁母、廿卷に、秋等伊弊婆許己呂會伊多伎宇多呂家爾花爾奈蘇倍巨見麻久保里香聞、又源氏物語葵上卷に、紫上の髪のことを、うたて所せうもあるかな、いかにおひやらむとすらむ、と云、同卷に、年ごろあはれと思ひきこえつるは、かたはしにもあらざりけり、人の心こそ、うたてあるものはあれ云々、此等にて心得べし、さて古事記穴穂朝段に、宇多呂物云王子、書紀に、武烈天皇御所行を言所に、設奇偉之戲、などあるは、右の意よりうつりて、平穩に尋常ならで、奇僻く善からぬ意ときこゆ、といへり、なほ古事記傳に委見ゆ、○歌意は、本句は序にて、本より惱ましき心の愈進みて、殊に甚しく、このころは下心のさても苦く惱ましや、と云なるべし

春相聞

これは、以下凡四十七首歌の總標なり

相聞

此二字、舊本にはなし、目錄にはかくあり、總標に春相聞とあるは、をはりの問答十一首までの總標なれば、今の七首の題詞、別に擧ずしては足はぬことなり

春日野。犬鷺。鳴別。春益間。思御吾。



犬鷺は、犬は哭の誤にて、ナクウグヒスノなるべし、と或人云り、いとよろし、岡部氏が、犬は去の誤にて、イヌルならむと云るはあらず、又略解に、犬は友の誤にて、カスガノ、トモウグヒスノならむと云るは、いみじきひがことなり、さて本二句は、鳴別を云む料のみなり、○鳴別は、夫婦泣つ、相別る、意なり、○思御吾は、オモホセアレヲと訓べし、思御は、御思とありしを顛倒たるか、○歌意は、相共に泣別れ起出て、夫君の還ります道の間にも、吾思まるらするごとく、いかでわれをも、あはれと思ほしめせ、といふか

冬隠。春開花。手折以。千遍限。戀渡鳴。

手折以は、タワリモチと訓べし、(モチといふはわろし、既くいへり、)○千遍限は、千遍までと云むが如し、實は際の知れぬを云、○歌意は、咲花を折持て、或は女に見せたく思ひ、或は共に頭刺したく思ひなどして、際しられず戀しく思ひて、月日を送る哉、となり、花に感て戀情を催すなり  
春山。霧惑在。鷺。我益。物念哉。

歌意は、春山の霧にまどへるうぐひすは、いぶせくあるらめども、戀ぢにまよへるわれにまさりて、物思をすべしやは、となり、朗詠集に、咽霧山鶯啼 猶少

出見。向崗。本繁。開在花。不成不止。

開在花は、本居氏、花は桃字の誤なり、七卷に、はしきやし吾家の毛桃本繁花のみ開てならざらめ

やも、十一に、やまとの室原の毛桃本繁いひてしものをならすはやまじ、と云るに、大方同じと云り、略解云、濱臣云、在は毛の誤なるべしと云り、此に従べし、○不成不止は、實に成すばやまじの意にて、思ひの成就するをたとへたり、○歌意、第四句までは、成をいはむ料の序にて、思立たる心の成就すしては、いつまでも思止らじ、となり

霞發。春永日。戀暮。夜深去。妹相鴨。

春永日は、按に、春永の二字、下上にいりまがひたるにて、永春日とありしなるべし、一卷に、霞立長春日乃晚家流、云々、とあるをも考合べし、○歌意かくれたるところなし

春去。先三枝。幸命在。後相。莫戀吾妹。

先三枝乃は、春になればまづ花の咲三枝と云意に、つゞけなしたり、されば先咲三枝といはでは、言足はぬごとくなれど、かくさまに用言を省きて、其意を帶せたる一格なり、されば吾通ふ通路といふべきを、七卷に、妹所等我通路細竹爲醉寸、とよみ、吾夫子が使來むかと出立つ、出立の松原といふべきを、九卷に、我背兒我使將來賦跡出立之此松原乎、とよみたる、みな同格なり、十八に、毛能乃布能八十伴雄乎麻都呂倍乃牟氣乃麻爾麻爾、とあるも、服従はしむる、麻都呂敏の令趣のまにの意を省きて云、廿卷に、伊佐美多流多氣吉軍卒等禰疑多麻比麻氣乃麻爾麻爾、とあるも、勞たまひ任たまふ、任のまにの意を省きて云、續紀十七詔に、皇親神魯伎神魯美命以、吾孫乃命將知食國天下止、言依奉乃隨、とあるも、言依しまつりし、言依奉のまにの意を省きて云



意を省きいへるにて、同例なり、三枝のことは、品物解に委云り、さてこれまでは、幸を云む料の序のみなり、○歌意かくれなし

春去。爲垂柳。十緒。妹心。乘在鴨。

爲垂柳は、シダルヤナギノと訓べし、春になれば、しだる、柳のと云意なり、○十緒は、契沖、とを、は、たわなり、登と多と五音相通なり、袁と和ともおなじ、わが心の、妹が心の上のること、かたちあるものならば、たわむばかりなれば、しだり柳の風にあひて、たわむによせてかくはよめり、と云り、今按に、わが心の、妹が心の上のると云ること、すこしいかゞなり、妹がわが心の上にかびのる意にこそあれ、此は集中に多くいへり、既に二卷に委云り、なほ次にも云べし、○乘在鴨は、ノリニケルカモと訓べし、在字、ケルと訓例、既に委云り、○歌意は、妹が容儀の、常に、東人之荷向篋乃荷之緒爾毛妹情爾乘爾家留香聞  
〔右七首。柿本朝臣人麿歌集出。〕

七首の二字、舊本には脱たり、○右相聞七首、人麻呂歌集の書體なり

寄鳥。

春之在者。伯勞鳥之草具吉。雖不所見。吾者見將遣。君之當婆。

伯勞鳥之草具吉は、顯昭袖中抄に、もずの草ぐきとは、もずの草ぐきと云なり、考萬葉歌、あし

ひきの山邊にをればほととぎすこのまたちぐきなかぬ日はなし、又同集第八に、あしひきのこのまたちぐ、ほととぎすかくき、そめてのちこひむかも、又第十九長歌に、はるばるになくほととぎすたちぐ、とはふれにちらすふちなみのはななつかしみ云々、又同集云、やまぶきのしげみとびぐ、うぐひすのこゑをきくらむ君はともしも、などありて、ぐは、ぐること、聞えたり、と云り、其義なり、へかゝるを中昔に、もずの草ぐきと云歌につきて、あらぬ説どもを作り出で、世の人どものまよはざりしはすくなし、ひとり顯昭ぞ、古をよく考へてまよはざりける、〔頭註、千載集、頼め芝夏ふかし、いづくなる〕久吉と云詞、なほ古くは古事記に、伊邪那岐命の加具土神を斬給ふ所に、集らむもずの草ぐき、御刀之手上、血自手候、漏出、また大穴牟遲神の事を、自木俣漏逃而去、また少毘古那神の事を、御祖命の、自我手候、久伎斯子也、ともの給へり、十四に、伊毛我奴流等許乃安多理爾伊波具久流水都爾母我母與、とも見えたり、(本居氏、久具流と云は、此久々を延たるなり、然らば伎を濁るべくもあれど、此清音なり、集中清字をのみかきたり、と云り、今云、久々流は、久々を延たるなりと云こと、少しまぎらはしきにや、其は久流は久と約る故に云るか、この久々流の流は、等與牟を等與牟流、志奴布を志奴布流などいふ流と、同例なり、)さてもずの草の間をくゞるは、見えぬものなれば、雖不所見と云む料に、本二句は設たるなり、○吾者見將遣は、欽明天皇紀に、聘望をミヤルとよめり、熱田宮縁起歌に、奈留美良乎美也禮波止保志比多加知爾己乃由布志保爾和多良部牟加毛、などあり、○歌意は、君が家の當の遠くて、たとひ見えずとも吾は見やらむぞ、と云なるべし

容鳥之。間無數鳴。春野之。草根之繁。戀毛爲鳴。



容鳥之云々は、三卷に、容鳥能間無數鳴、雲居奈須心射左欲比、其鳥乃片戀耳爾、とよめり、さてこの歌、本句は繁を云む料のみにて、容鳥に用はなし、契沖が、此上に朝井でにきなくかほとりなれだにも君にこふれや時をへずなく、とよめれば、上の句は、わがかた戀になくたたとへたり、と云るは、あらず、○歌意は、さても重ねく、に、繁くも戀しく思はるゝ事哉、となり

寄花。

春去者。宇乃花具多思。吾越之。妹我垣間者。荒來鳴。

宇乃花具多思は、十九に、宇乃花乎令腐霖雨之始水逝、とよめり、さて右の十九なるは、五月の歌なれば、その頃の霖雨には、まことに卯花もくつべきを、こゝに春去ばとて、卯花をよめることを、人々いぶかり思ふことなるに、本居氏、四月ごろまでも、大やうに春といふは古意なり、春さればきのこのくれなどいふも、四五月頃を云り、三月までは、さまで木はしげらず、もはらしげるは、四五月なり、と云り、(源氏物語若菜上に、この秋の行幸の後とあるも、十月の行幸を、大やうに秋といへるなり、考合べし、)○歌意は、わがしたしく通ひなれて、常に越て來し妹が家の垣間は、此ころわが遠ざかりて來ざりしかば、たゞさへあるに、卯花を雨に腐らしなど、いやましにあれまされるかな、と云か、三四一二五、と句を次第てきくべし

梅花。咲散苑爾。吾將去。君之使乎。片待香花光。

片待香花光、花は衍文なり、カタマチガテリなり、片待は、片懸待意なり、○歌意は、君が使を、

片かけ待かたがたに、梅の花の散苑に吾は行む、となり  
藤浪。咲春野爾。蔓葛。下夜之戀者。久雲在。

本句は、下を云む料の序なり、葛は、木の下などに蔓ものなれば、蔓葛の下とつゞけたり、○下夜之戀者は、シタヨシコヒバと訓べし、夜は從の意なり、又從字の誤にてもあるべし、之は、その一すぢなることを、おもく思はする助辭なり、○久雲在は、ヒサシクモアラムと訓べし、(略解に、久は乏の誤にて、トモシクモアラムなるべしと云るは、大じきひがことなり、)○歌意は、下に忍びて戀しく思ひつゝあらず、久しく逢ことのなき事あらむ、いで今は色に出てこひむぞ、といへるなるべし

春野爾。霞棚引。咲花之。如是成二手爾。不逢君可母。

如是成二手爾は、契沖云、かく竈になるまでになり、○歌意、かくれたるところなし

吾瀬子爾。吾戀良久者。奥山之。馬醉花之。今盛有。

第三四句は、句中の序なり、○歌意は、八卷に、茅花拔淺茅之原乃都保須美禮今盛有吾戀苦波、とあるに同じ

梅花。四垂柳爾。折雜。花爾供養者。君爾相可毛。



花爾供養者は、或説に、花は神の誤なり、といへり、これによるべし、カミニタムケバと訓べし、  
○歌意は、梅と柳を折雜て、神にさゝげまつりて、ねもころに祈り申さば、君にあふ事のあらむか、  
さても戀しく思はるゝ事ぞ、となり

姫部思。 咲野爾生。 白管自。 不知事以。 所言之吾背。

姫部思は、咲とかゝれる枕詞なり、○咲野は、大和の佐紀野にて、はやく往々見えたり、○白管自  
は、白躑躅にて、不知を云むための序なり、○歌意は、契沖が、あふこともなきを、はやあひみた  
るやうに、世にいはいはれしと云て、わがせ、これをき、給へ、君故にこそ、かゝるうきことにはあへ  
れ、と告てうれふるなり、いはれしと切て心得べし、と云り、其意なり、吾背は、吾背よといふほ  
どのこゝろなり、心に知ず覺えのなき事によりて、とかく人にいひさわがれし、いで吾夫よ、とな  
り、按に、上に曾乃也何等の言なければ、所言寸といふこと常格なるを、此歌は、偏格に所言之と  
いひたるか、又は寸吉等の字なりしを、寫誤りて之と作るものか、十六に、家爾有之櫃爾鏤刺藏而  
師、とある歌も、上に曾乃也何等の言なければ、藏而寸といふこと常格なるを、偏格に而師といひ  
たるか、もしは寸伎等の字なりしを、師の草書より誤れるものにもあらむか、なほ余が歌詞三格例  
を披見て考べし

梅花。 吾者不令落。 青丹吉。 平城之人。 來管見之根。

平城之人は、之は在の誤なり、と云るによるべし、ナラナルヒトノとよむべし、○見之根は、見が

ためにと云意なり、既に委云り、○歌意かくれたるところなし

如是有者。 何如殖兼。 山振乃。 止時裳哭。 戀良苦念者。

如是有者は、義を得てコトナラバと訓べし、許等といふ言の義は、既七下に、委説り、(古今集に、  
かきくらしことはふらなむ春雨にぬれ衣きせて君をとゞめむ、後撰集に、ことならば折つくしてむ  
梅花吾待人の來ても見なくに、大和物語に、ことならばはれずもあらなむあき霧のまぎれに見えぬ  
君と思はむ、源氏物語帚木に、なよびかに女しと見れば、あまりなさけに引こめられて、とりなせ  
ばあだめく、是をはじめの難とすべし、ことが中に、なのめなるまじき人のうしろみのかたは、も  
のゝあはれしり過し、はかなきついでのならあり云々、とある、ことが中にも、如之中にて、如  
此中にと云意なり、常に某の期等、と期を濁りて唱ふるは、上より連ねいふ言便にて、本は清音の  
言なれば、許等云々と初にいふときは、清て唱ふること勿論なり、○山振乃云々は、山と云をうけ  
て、止時と云り、○歌意は、かねて見せむと深く思入し人の、花の咲る時に見にも來ずして、かや  
うに止ときもなく、ひたすら其人を戀しく思はるゝことをおもへば、この山振は、なにしにうゑけ  
む、中々に殖ざらましかば、かくのごとく物念ひはすまじきものを、となり、古今集に、やまぶき  
はあやななきそ花みむとうゑけむ君がこよひこなくに、とあるは、人の植しをいひ、今の歌は自  
ら植しなり

寄霜。



春去者。水草之上爾。置霜之。消乍毛我者。戀度鴨。

水草は、字の如く、水に生たる草なり、(契沖が、水草とかきたれども、眞草なりといへるは、おしあてなり、) ○歌意は、本句は序にて、魂も消失るばかりに思ひつゝ、さても苦しき事とは知ながら、も、止ことを得ずして、戀しく思ひつゝ、長き月日を送る事哉、となり

寄霞

春霞。山棚引。鬱。妹乎相見。後戀罷。

第一二句、霞山は上下に誤れるにて、春山霞棚引とありしなるべし、と中山嚴水云り、信にさもあるべし、○歌意、本句は序にて、親く相見たらば、さもあるべき事なるを、たゞはつゝおぼろにのみ妹を相見て、この後までも見たしや逢たしや、と久しく戀しく思はむか、となり

春霞。立爾之日從。至今日。吾戀不止。片念爾指天。

終句、舊本に本之繁家波とありて、一云片念爾指天、と註せり、今は一云とあるに従り、指天は、其事をうけはりて、他事なく物するときにいふ詞なり、○歌意は、春霞の立始し日より、今日まで久しき間、他事なく片思に戀しく思ふ心は、しばしもやまず、となり

左丹頰經。妹乎念登。霞立。春日毛晚爾。戀度可母。

春日毛晚爾は、本居氏、齊明天皇紀歌に、于之盧母俱例尼飯岐底舸庚舸武、と有俱例に同じく、心のはれぬことなり、といへり、○歌意は、紅顔のうるはしき妹を、戀しく思ふとて、くれぐれと心もくらみて、のどかなる長き春日をも、いたづらに暮しつゝ、時をおくる事哉、となり、(六帖には、うつくしき人を思ふとて載たり)

靈寸春。吾山之於爾。立霞。雖立雖座。君之隨意。

靈寸春は、枕詞なるべし、吾山とつゞきたる意は、未考得ず、○吾山は、本居氏は、吾は春の誤ならむ、と云り、さても枕詞よりのつゞきの意は、解えがたし、○雖立雖座は、タツトモウトモとよめるよろし、崇神天皇紀に、急居此云菟岐于、とあればなり、居は、爲宇惠と活く言なればなり、○歌意、本句は序にて、立居起臥をいはず、とにもかくにも、君が心まかせにせむ、となり

見渡者。春日之野邊爾。立霞。見卷之欲。君之容儀香。

歌意、本句は、霞の立るけしきの見まほしき、とつゞきたる序にて、かくれたるところなし

戀乍毛。今日者暮都。霞立。明日之春日乎。如何將晚。

歌意は、戀しく思ひながらにも、とかくして今日はくらしつるを、又明日の長き春日を、いかにしてくらさむぞ、となり、(六帖には、第三句、あかねさすとあり、)

寄雨



吾背子爾。戀而爲便莫。春雨之。零別不知。出而來可聞。

背は、妹の誤なるべし、と云る説によるべし、○戀而爲便莫は、あまりに戀しく思ひて、せむすべのなき故にの意なり、○零別不知は、雨のふるふらぬと云差別も知ず、心そらにて、と云なるべし、○歌意は、あまり妹を戀しく思ふ心に堪かねて、すべなさに、春雨のふるふらぬのわきをもしらず、家をいでて妹許來し哉、嗚呼さても辛勞しや、となり、(六帖に、第四句を、踏分しらでとせるは、甚く誤れり、)

今更。君者伊不往。春雨之。情乎人之。不知有名國。

君者伊不往は、君は吾字の誤なり、と云説によるべし、伊はそへ言なり、往は來と云意なり、今更に吾は來じとの謂なり、こゝは吾が方を内にし、妹が方を外にして、來と云べきを往と云るなり、さるはこゝは、妹を深く恨みたる意なるより、ことさらに、妹が方を外にしていへるなるべし、さて往と云べき處を來と云ひ、來と云べき處を往といへることは、みなそのさす方を、内にしたると、外にしたると、彼此の差別あるのみなり、此例は、かの倭爾者嗚而歎來良武、と云るにつきて、既く一卷に委説り、○春雨之情とは、此歌、上の歌と同人の作にて、上に春雨之零別不知、と云るにゆづりて、春雨のふるふらぬわきをもしらず、おもひに切りて、出てこし情の深切さを、と云らむ、○不知有名國は、しらざるこゝとなるをの意なり、戀しきことなるをと云意なるを、戀しけなくにといふと同例にて、古風の一の格なり、○歌意は、春雨のふるのふらぬのと云差別をもしらず、

思ひに堪かねて、出て來し情の深さを、妹は知らねば、來しかひもなし、今更に來ることを吾はせじ、と恨みたるなるべし、(本居氏説に、是も右同人の歌にて、これは道中にて、思ひかへして、よめるなるべし、春雨の降わきをもしらず、出ては來つれども、今より又いかに甚じくふるべきもしらねば、これより歸るべし、今更ゆかじ、となり、人のと云るは、雨のことは、人間のはかり知べきならねばの意なり、と云るは、理窟めきたる説なり)

春雨爾。衣甚。將通哉。七日四零者。七夜不來哉。

歌意は、契沖、細雨濕衣看不見、と云ばかりの春雨なれば、ぬれくおはすとも、衣のいたくぬれとほらむやは、ぬれとほらじを、君もしかばかりの雨にさはらむとならば、たとひ七日つゞきてふらば、七夜さはりて來じとやと、理をせめて云り、七日といひ七夜と云は、七は數のおほきを云り、第十一に、あふみの海おきつしらなみしらねどもいまりといはゞ七日こえなむ、此歌を併見べし、七日四の四は、助辭なりといへり、今按に、四の助辭に力あり、四はすべてその一すぢなることを、おもく思はする辭なり、(六帖に、本句を、春雨の心は君もしれるらむ、とせるは、誤なるべし、)

梅花。令散春雨。多零。客爾也君之。廬入西留良武。

多零は、(サハニフルとよみたれど、いかゞなり、)多は重字の誤なるべし、草書よく似たり、さらばシキテフルと訓べし、(略解に、多は痛字の誤にて、イタクフルなるべしと云るは、いみじきひがこ



となり、○歌意かくれたるところなし、此は、したしき人を旅にやりて、おもひやりてよめるなり

寄草

國栖等之。春菜將採。司馬乃野之。數君麻。思比日。

國栖等之は、クニスラガと舊本に訓る、是古稱なるべし、六帖にも、此歌、くにすらのとあり、夫木集にも、くにすらがと記せり、又同集に、くにすらが若菜つむべき時は來ぬ野澤の草もしたねさしつゝ、(クズと云は、やゝ後の唱ならむ)本居氏古事記傳に、吉野國菓、昔より久受と呼來れども、此記の例、若久受ならむには、國字は書まじきを、此にも他の古書にも、皆國字を作るを思ふに、上代には、久爾須といひけむを、やゝ後に、音便にて久受とはなれるなるべし、と云り、(又中山嚴水は、國栖等之、一本にクズヒトノと點す、又袖中抄、八雲御抄にも同じくよめり、依て思ふに、古本には、國栖の下、比字などありしが、今は脱たるなるべし、といへれど、いかゞなり)古事記神武天皇條に、到吉野河之河尻、時云々、亦遇生尾人、此人押分巖而出來、爾問汝者誰也、答曰、僕者國神名謂石押分之子、今聞天神御子幸行故參向耳、此者吉野國菓之祖、また應仁天皇條に、又吉野之國主等、瞻大雀命之所佩御刀、歌曰、云々、書紀には、國標部、(天武天皇卷)また國標人、(應神天皇卷)など見えたり、民部式に、凡吉野國栖永勿課役、など見ゆ、本居氏、今も吉野川に添て、南國栖村と云ありて、其あたり七村を總て國栖莊といふなり、南と云ば、昔は北國栖と云も有しにや、と云り、○司馬乃野は、シマノヌなり、(シメノ野にはあらず)夏箕宮瀧國栖西川と、吉野川の流れ回れる内に島といふべき地は多ければ、其中に島の野と名に負せたる處ありて、云るなるべし、十三に、島傳雖見不飽三吉野乃瀧動動落白浪、とある島は、地名にてはなけれども、其川に邊たる地を島といへるなれば、今も其川に邊たる處の野を、島野といへるをしるべし、さて此までは序にて志麻志婆と言を疊ねてつゞけなしたり、○歌意は、本句は序にて、たびく君を戀しく思ふこのごろぞ、となり

春草之。繁吾戀。大海。方往浪之。千重積。

春草之は、繁をいはむ料なり、○方往浪之は、往は依の誤なりと云説によりて、(ヘニヨルナミノ)と訓べし、これも千重積と云む序なり、○千重積は、戀の思のかぎりしられず、數多く幾重も積ぬとなり、○歌意かくれたるところなし

不。明。公乎相見而。菅根乃。長春日乎。孤悲渡鴨。

菅根乃は、長の枕詞なり、○悲字、舊本戀に誤れり、今は一本に従り、○歌意は、明に親く相見たらば、なほさもあるべき理なるに、たゞ、かすかに見たるばかりにて、長き春日を、日ねもす戀しく思ひてのみ、月日を送る事哉、となり

寄松

梅花。咲而落去者。吾妹乎。將來香不來香跡。吾待乃木曾。

歌意は、梅花の咲たる時には、よも見に來ぬことはあらじと、其をたのみに、ひとへに待るゝを、



其梅花の散失たらば、其跡は松木のみにて、見に来べき物もなければ、もし來ることもあらむか、今は來まじきかと、たしかにはたのますして待のみぞ、と云にや

寄雲ヨスクモニ

白檀弓シラマユミ。今春山爾イマハルヤマニ。去雲之ユククモノ。逝哉將別ユキヤワカレム。戀敷物乎コヒシモノナ。

白檀弓は、枕詞にて、張と云意につゞきたるなるべし、今の伊の言には關らぬなるべし、(射と云意にはあらず)○今春山爾云々は、春山に今行雲のと云意なるべし、今の言は、下に移して心得る例なり、○去雲之といふまでは、逝を云む料の序なり、○歌意は、かくばかり、戀しくおもはるゝものを、さしおきて、よそにわかれ行むか、となり

贈オクル 縹カヅラ

大夫之マストラノ。伏居嘆而フシキナゲキテ。造有ツクリタル。四垂柳之シダリヤナギノ。縹爲吾妹カヅラケワギモ。

四垂柳之、之は會字の極草より誤れるなるべし、シダリヤナギとなくてはいかゞ、八卷に、吾時早田之穗立造有縹會見乍師弩波世吾背、とある會に同じ、○歌意は、丈夫の伏ては嘆き居ては嘆き、色々心をつくして製りたる、しだり柳の縹ぞよ、おろそかに思はずして、髪に飾り給へ、吾妹子よ、となり

悲別カナシムワカレテ

朝戸出之アサトデノ。君之儀乎キミガスガダテ。曲不見而ヨクミズテ。長春日乎ナガキハルヒヲ。戀八九良三コヒヤクヲラム。

戸朝出は、契沖云、朝にわかれ歸る出立なり、○歌意は、朝に起出て、歸り給ふ夫君が容儀を、まだ夜のほのぐらきが故に、委曲には見ずして、今朝の君がわかれの容儀を熟見たらば、かくまではあらじと、けふ一日戀しく思ひて、長き春日をくらさむか、となり

問トヒコタヘノウタ 答

左に載る十首歌どもの中、初二首は、問答としもきはめがたければ、もしは亂れたるにもあらむ、又舊本問答終に、相不念將有兒故の歌を、別に載たれど、其はその次上の、相不念妹哉本名の歌の或本なるが、まぎれたることしるければ、本章を除きて、その上に小書せり

春山之ハルヤマノ。馬酔花之アシビノハナノ。不惡アシカラヌ。公爾波思惠也キニニハシエヤ。所因友好ヨセヌトモヨシ。

不惡は、八卷に、山毛世爾咲有馬酔木乃不惡君乎何時往而早將見、とあるに同じ、○思惠也は、縦やと云に近し、假に縦す辭なり、又此は、終に與之とあれば、たゞ歎息意に見むもあしからじ、○好は縦なり、○歌意は、本二句は序にて、もとより惡からぬ君なれば、よしやたとひ、吾身をいひよせぬともいとはじ、となり

石上イソノカミ。振乃神杉フルノカムスギ。神左備而カムササビテ。吾八更更アレヤサラサラ。戀爾相爾家留コヒニアヒニケル。

石上振乃神杉は、大和國山邊郡石上の布留社の地にある、神木の杉にて、既に委註り、(三卷に、石上振乃山有杉村乃、とあり、○神左備而は、上よりは、神杉の神々しう、物ふりたることに云つゝ



けて、下は吾身の老て、ふるめきたる意にいひ承たり、○吾八更更は、今又更に吾哉、と云意なり、八は疑の也なるべし、○歌意は、年老てあれば、今は戀と云くせもの、せめ來ることもさららにあらじ、と思ひゆるしてありしに、思はずも、今又更に、戀と云くせもの、吾身に責來けるにやあらむ、さらば、かくはかなき物思ひに、心を惱すことあるまじきものを、と云なるべし、十一に、石上振神杉神成戀我更為鴨、とあるは、末句の少異れるのみにて、全同歌なり、○此歌、次上の歌の答ともきこえず、また春の歌としもなし、まがひてこゝに入たるならむか、舊本こゝに、右一首、不有春歌、而猶以和哉載於茲次、とあり、もし答歌ならば、右の註のごとくならむ、されど答歌としもきはめがたし、いづれ註は後人の加筆ならむ

狹野方波。實爾雖不成。花耳。開而所見社。戀之名草爾。

狹野方は、此下に、沙額田乃野邊乃秋芽子、ともよめり、同所なるべし、十三に、師名立都久麻左野方云々、とよめるは、近江なり、別地か、○實爾雖不成は、事成就はせずともと云意を比へたるなり、實は、何にまれ草木の實なり、○花耳は、ハナノミモと訓べし、花は實にあらで、たゞうはべにうるはしきやうに云を比へ云り、○開而所見社は、咲て見えよかし、と云意なり、社は希望辭なり、○歌意は、よしや實になりて、事成就することなくとも、せめて戀情のなぐさめに、花のみなりとも、さきて見えよかし、といふなり

狹野方波。實爾成西乎。今更。春雨零而。花將咲八方。

歌意は、一たび逢そめたるうへは、實になりて、事成就せしと云ものなり、さるを花のみもさきて見えよとの給へども、今更雨に催されて花のさきたる如く、うはべをつくるひかざりて、見するやうのことをすべしやはとなり

梓弓。引津邊有。莫告藻之。花咲及二。不會君龜。

梓弓は、引の祝詞なり、○引津は、十五に、引津亭作歌あり、筑前なり、今と同所か、○歌意は、思始たるは久しき事なるに、引津邊のなのりその花の咲までに、未得あはぬ君かな、さても待久しや、となり

川上之。伊都藻之花之。何時何時。來座吾背子。時自異目八方。

歌意は、久しく絶て逢ぬ事と歎き賜へれども、吾夫子が此方に來座ぬ故にこそあれ、さればいつもいつも常止す繼て來座せよ、何時は來座べき時にあらず、と云こと有むやは、となり、○此歌四卷に、既出、

春雨之。不止零零。吾戀。人之目尙矣。不令相見。

零零は、零乍と云に同じ意なり、知乍と云意の所を、知知、知乍と云意の處を知知と云ると同例なり、(しかるを零零は、零乍の誤ぞと云説は、いみじきみだりごととなり、)○不令相見は、アヒミセナクニとよむべし、相見せぬことなるをと云意なり、○歌意は、春雨のをやみなく、打つよきて降つ



つ、その雨に障られて來座ずて、吾戀しく思ふ人の容儀をさへ、相見せぬことなるを、いかにしてか戀しく思はざらむ、となり

吾妹子爾。戀乍居者。春雨之。彼毛知如。不止零乍。

歌意は、雨に障られて得行ねば、吾妹子を戀しく思ひつゝ、涙の雨の止すふる心を、彼も知たる如く、おなじさまに止す降つゝ、いよく物思をまさらしむとなり、契沖云、春雨のかれも知ごとは、涙の雨のふるを、春雨もしりて、おなじやうにふるころなり、わがせこにわがこひをればわがやどの草さへおもひうれがれにけり、このころに似たり

相不念。妹哉本名。菅根之。長春日乎。念晚牟。

歌意は、互に心を通はして、相思もせぬ妹なるものを、むさくゝと戀しく思ひつゝ、この長き春日をくらすむか、となり

〔國本〕 相不念。將有兒故。玉緒。長春日乎。念晚久。』

將有兒故は、あるらむ兒なるものをの意なり、○歌意は、互に心を通はして、相思はするらむ兒なるものを、長き春日を戀しく思ひくらす事は、いたづらわざとなり、此一首、舊本此問答の終に、別歌として戴たれど、上の歌の或本なること著ければ、此間に收て、終なるは省きつるなり

春去者。先鳴鳥乃。鷺之。事先立之。君乎之將待。

本句は序なり、春はさまざまの鳥の鳴中にも、鶯はことに春をつぐる鳥なるが故に、先鳴鳥と云、言先立と云かけたり、○歌意は、相念はずとのたまへども、さらに此方より、思ひまゐらせぬにはあらず、されど先最初に、言先立て云出せし君が方より、事成就せむなれば、吾は一すぢに其時を待居むぞとなり、四卷に、事出之者誰言爾有鹿小山田之、苗代水乃中與杼爾四手、とある言出は、今の言先立と云に意同じ、神代紀に、如何婦人反先言乎、と見ゆ

夏雜歌

詠鳥

大夫丹。出立向。故郷之。神名備山爾。明來者。柘之左枝爾。暮去者。小松之若末爾。里人之。聞戀麻田。山彦乃。答響萬田。霍公鳥。都麻戀爲良思。左夜中爾鳴。

大夫丹、丹は乃の誤なるべし、マスラヲノとあるべし、マスラヲニとは、いかゞなればなり、さて出立は、男女にかぎるべからぬが如くなれども、男は日々外に出、女は内のみ隠居て、常に出る事なき故に、取分て大夫乃出立向、といへるにやあらむ、○出立向は、人の出立ば、やがて向はるゝ、神名備山といへるなり、こゝは山の自の出立には非ず、○故郷は、飛鳥の故京なり、○明來者云々、暮去者云々は、對へて云るのみなり、○聞戀麻田は、聞て愛るまでと云意なり、愛るを戀ると云る事、既くたびゝ出たり、○答響萬は、アヒトヨムマデと訓べし、(コタヘスルマデ、とよみては、つたなし)八卷に、山妣姑乃相響左右妻戀爾、鹿鳴山邊爾猶耳爲手、とあり、考合べ



し、木靈の應るまでと云なり

反歌

客爾爲而。妻戀爲良思。霍公鳥。神名備山爾。左夜深而鳴。

爲而は、其事をうけはりて、他事なく物する意のときに云詞なり、既くたびく出つ、○歌意は、神名備山に、夜更て、他事なく鳴なるほとゝぎすは、旅にて、その本郷にとどめおきたる妻を、戀しく思ひてなくならしとなり、契沖云、古今集にも、けさなきいまだ旅なるほとゝぎす、とよめり、旅ゆく人は、故郷にのこしおく妻をこひてなくによりて、ほとゝぎすも、旅にてやなくらむ、となり

〔右二首。古歌集中出。〕

霍公鳥。汝始音者。於吾欲得。五月之珠爾。交而將貫。

於吾欲得は、吾は、もしは花などの誤にはあらざるべきか、さらばハナニモガと訓べし、もとのままたては心ゆかず、○歌意は、霍公鳥よ、汝がめづらしく鳴その初音が、形ある花にてもがなあれかし、さらば五月の薬玉に貫交へて、玩ぶべきに、と云るならむ

朝霞。棚引野邊。足檜木乃。山霍公鳥。何時來將鳴。

歌意は、この霞のたなびく野邊に、山ほとゝぎすは、いつか來て鳴べきぞとなり、古今集に、わがやどの池の藤浪さきにけり山ほとゝぎすいつか來なむ、未付全同じ、○此歌は、春よみし歌と聞えたれば、春部に入べきなれど、霍公鳥を主としてよめる歌なるゆゑに、此間に載たるなるべし、下にいたりて、夏相間に、春之在者酢輕成野之霍公鳥、とある歌、又これに同じ

旦霞。八重山越而。喚孤鳥。吟八汝來。屋戸母不有九二。

旦霞は、八重を云むための枕詞なり、此下にも、かくつゞけよめり、○八重山は、彌重に多く重なる山を云、○吟八汝來は、按に、吟は喚呼等の字を誤寫にはあらざるか、さらばヨビヤナガクルとよむべし、○歌意は、彌重に多く重なる山を、辛うして越て來る喚子鳥よ、此處には汝が宿るべき家もなきものを、何しに、しか喚てや來るらむとなるべし、○此歌、春部に入べきを、まぎれて此間に入しなるべし

霍公鳥。鳴音聞哉。宇能花乃。開落岳爾。田草引媿嬌。

田草、略解云、源康定主の説に、草は葛の誤なりとあるぞよき、○歌意は、卯花のちりとぶ岳に、葛根を引取をとめ子よ、汝等も、あのほとゝぎすの鳴なる音を聞つるや、となり

月夜吉。鳴霍公鳥。欲見。吾草取有。見人毛欲得。

欲見吾草取有、本居氏、吾は今の誤にて、イマクサトレリなり、草取とは、凡て鳥の木の枝にとまり居ることなり、欲見は、ほとゝぎすが、月をみまくほりて、今木の枝にゐるを、來て見む人もが



ななり、十九に、ほととぎすきなきとよまば草とらむ花橘をやどにはうゑすて、とよめるも、ほととぎすの來てとまるべき、橘をうゑむと云なりといへり、中山嚴水云、此歌、大方は本居翁の説の如し、但し欲見は、霍公鳥が、月を見まくほりする意に説れたるはいかとなり、欲見は、ミマホレバとよむべし、見まくほりすればなり、鳴霍公鳥を見まほしと思ひて見やりたれば、草取て鳴居たるを見出したるなりと云り、その意ならばミガホレバとよむべし、(ミマホレバとよまむは、後世の詞づかひなり、凡て見まくほし、聞まくほしなど云べきを略きて、見まほし聞まほしと云類は、古言の用格にあらず、)さてこゝは、欲見者とありしを、もしは者字の脱たるにもあらむか、さて霍公鳥のすがたを見まくほりする歌、十八にも、霍公鳥を、登毛之備乎都久欲爾奈蘇倍會能可氣母見牟、八卷に、鳴霍公鳥見會吾來之、などあり、思合べし、〔頭註、哥袋西園寺、目に見れど草とる鷹のふるまひたかの草とる道も見えぬばかりに、などあり、これ〕○歌意は、月がよく照たる故に、この月影には、霍又木居に同じく、鷹のつかれて、草に落ちてやすむを云、○歌意は、月がよく照たる故に、この月影には、霍公鳥のすがたも見ゆべきなれば、いかにぞして、そのすがたを見まほしと思ひて、見やりたれば、今木の枝にとまりて鳴て居を、唯獨見むはくち惜ければ、いかで來て見む人もがなあれかし、となり

**藤浪之。散卷惜。霍公鳥。今城岳則。鳴而越奈利。**

今城岳は、大和國高市郡にあり、九卷に註す、○歌意は、この藤の花は、程なくちり失べきに、もし散失てあらむ跡に來たらば、いかにくち惜からむとて、霍公鳥の、今城の岳を今鳴て越るなりとなり

巨霧。八重山越而。霍公鳥。宇能花邊柄。鳴越來。

巨霧は、本居氏云、霧は霞の誤なり、○宇能花邊柄は、卯花の咲るあたりをと云が如し、柄は從と云に同じ、十一に、守山邊柄、同卷に、直道柄、十三に、自此巨勢道柄、同卷に、此山邊柄、十四に、安受倍可良、十七に、乎可備可良、などあり、又古今集に、浪音の今朝から殊にきこゆるは、又かのかたにいつからさきに渡りけむ、又浪の花おきからさきてちりくあり、拾遺集に、紅葉に衣の色はしみにけり、秋の山からめぐり來し間に、かげるふの日記に、去年から山こもりして侍るなる、枕冊子に、このたびやがて竹のうしろから舞出て云々、などあるも、みな從と云に同じ、又催馬樂本滋に、毛止之介支支比乃名加也萬牟加之與利牟加之加良名乃不利已奴波、伊萬乃與乃太女介不乃比乃太女、とあるにて、加良と與利とは、同意なるを知べし、また歩よりと云ことをも落窪物語に、かちからといへり、さてこゝの柄は輕くて、乎と云辭に通はしたり、○來は、草書の成を來と見て誤しものなり、ナリとよむべし、○歌意かくれたるところなし

木高者。會木不殖。霍公鳥。來鳴令響而。戀令益。

會は、此は俗に堅く、或は毛頭などいふ意なり、さてこの言は、初句の上につして心得べし、會木高く木を殖ることはせじといふ意なり、○歌意は、木高く木を殖ることは堅くせじ、いかにとなれば、木高く木を殖るときは、ほととぎすの其木に來棲て、常に鳴響て、人を戀しく思ふ心を、益らしむればなり、となり

難相。君爾逢有夜。霍公鳥。他時從者。今社鳴目。



他時從者は、アタシトキヨハとも、コトトキヨリハともよむべし、○歌意、かくれたるところなし  
木晚之。暮闇有爾。霍公鳥。何處乎家登。鳴渡良武。

有爾、舊本に、一云有者と註せり、ナレバにても、ナルニの意になれば、同じことなり、○武字、舊  
本哉に誤れり、契沖説に従て改つ、○歌意は、木闇く繁り合たる暮闇の夜なれば、物のあやめも見  
えわかぬに、ほとゝぎすは、何處をさして己が家として鳴わたるらむ、となり

霍公鳥。今朝之旦明爾。鳴都流波。君將聞可。朝宿疑將寐。

末句、キミキ、ケムカアサイカネケムと訓べし、(キミキクラムカアサイカヌラムとよみては、鳴都流  
波とあるにかなはず、)○歌意は、今朝ほのぼの明に霍公鳥の初音もらして鳴つるをば、君は聞けむ  
か、又は朝宿して聞ずにありけむか、となり

霍公鳥。花橋之。枝爾居而。鳴響者。花波散乍。

歌意、かくれたるところなし、此は聲の響に、花の散をいへるなり、花を居散しとも、又は羽觸に  
散すなどいへることも多し、みな同類なり

慨哉。四去霍公鳥。今社者。音之干蟹。來喧響目。

本二句は、八卷長歌にありて、そこに委註り、○歌意は、今こそ鳴べきをりなれば、音のかるい  
かりに、來鳴とよもすべきを、來鳴すあるは、慨々惡き醜霍公鳥なる哉と、なくべきをりに鳴ざるを、  
惡罵ていへるなり

今夜乃。於保束無荷。霍公鳥。喧奈流聲之。音乃遙左。

聲之音乃遙左とは、聲は啼聲につきていひ、音は風響につきて云るか、又た聲之遙左とて事足る  
を、調のために音といへるか、奥邊之方、或は木末之上などやうにいへること多ければなり、○歌  
意は、今夜のいと闇くおほくしくて、物のあやめも見えわかざれば、霍公鳥の陰だに見ゆべきに  
あらぬを、ましてそのもらして過る聲のはるかに遠さや、今少し間近く鳴たらば、たしかにそれと  
聞べきを、となり

五月山。宇能花月夜。霍公鳥。雖聞不飽。又鳴鳴。

五月山は、地名にあらず、たゞ五月ごろの山を云、古今集にも、五月山梢を高みほとゝぎすなく音  
そらなる戀もするかな、と見ゆ、○宇能花月夜は、卯花の月のしろく照たるを云なるべし、(契沖は、  
うの花のさかりなるが月夜の如く見ゆるをいへり、といへれど、いかゞ、後世には、しか心得て  
よめる歌おほかめれど、此歌なるは然にはあらじ、)○又鳴鳴は、いかで又もなけかしと希へるな  
り、○歌意は、五月ごろの山の卯花に、白く照たる月夜に、霍公鳥の鳴て過行なる聲の、聞どもあ  
かず面白きに、いかで又もかへり來てなけかし、となり

霍公鳥。來居裳鳴香。吾屋前乃。花橋乃。地二落六見牟。



來居裳鳴香は、キキモナカヌカと訓べし、いかで來居ても鳴かしの意なり、○落六見牟は、六は文字などの誤にて、チルモミムなるべし、此下に、吾屋戸之麻花押摩置露爾、手觸吾妹兒落卷毛將見、とあり、考合べし、(略解に、六見牟は、左右手の誤にて、ツチニチルマデニなるべしといへるは強解なり)○歌意は、霍公鳥は、いかで吾庭の花橋の枝に來居ても鳴かし、さらば羽觸や聲の響などに、その花のちるをも見べきにとなり

霍公鳥。厭時無。菖蒲。蕤將爲日。從此鳴度禮。

從此鳴度禮は、此處を鳴度れの意なり、集中に多き詞なり、○歌意は、霍公鳥の聲を、いつは聞じと厭ふ時なければ、常に聞まほしき中にも、菖蒲を繚に製りて、頭に飾らむ日は、わきて興あれば、をりをたがへず、此處を鳴て度れ、となり

山跡庭。啼而香將來。霍公鳥。汝鳴每。無人所念。

鳴而香將來は、啼て行らむかの意なるを、こゝは大和の方を内にして、來と云り、倭爾波鳴而與來良武呼兒鳥象乃中山呼會越奈流、とあるに同じ、○歌意は、あの霍公鳥は、大和の方に鳴て行ならむ歎、その聲を聞いて、大和の方には愛らむかしらず、我は汝鳴音を聞ごに、なくなりし人の上の、戀しくおもはるゝよとなり、此歌は、霍公鳥の音に感じて、なくなりし人をおもひてよめるなり

歌意は、卯花は、程なく散失べき様に見ゆれば、その散失なむことを、霍公鳥の深く惜て、或は野に出、或は山に入など、とにかくして鳴とよもすならむ、となり

橋之。林乎殖。霍公鳥。常爾冬及。住度金。

林乎殖は、ハヤシヲウエムと訓べし、(略解に、ハヤシヲウエツとよめるは誤なり、)○住度金は、住わたるが料にの意なり、度は、月日を経る謂なり、九卷に、詠霍公鳥歌の末にも、吾屋戸之花橋住度鳥と云り、(鳥は鳴字の畫の滅たるなるべし、)十九に、霍公鳥雖聞不足網取爾獲而奈都氣奈可禮受鳴金、とも見ゆ、○歌意は、霍公鳥の夏より冬まで來て棲て、月日を経りて、常にさらば鳴べきがために、橋の林を殖生し置むざとなり

雨霽之。雲爾副而。霍公鳥。指春日而。從此鳴度。

雨霽之は、霽字、舊本には臍と作り、今は拾穗本に従つ、アメハレンと訓べし、○雲爾副而は、雲に傍てと云が如し、雨のはれゆきし、なごりの雲にそひての謂なり、○歌意かくれたるところなし

物念登。不宿且開爾。霍公鳥。鳴而左度。爲便無左右二。

歌意は、さなきだに、物思ひしげくて、得寐入ずして、起明したる夜の朝開なるを、せむ方なきまで、いよく、物思をまさらせて、霍公鳥の鳴て飛度るよ、となり

吾衣。於君令服與登。霍公鳥。吾乎領。袖爾來居管。



吾乎領は、岡部氏、この歌、末句意得がたし、契沖云、常の鳥だに、袖に來居るものにあらぬうへに、ことにほととぎすは、人なれぬ鳥なれば、これは竿にかけてほせる衣などを云にや、さるにても、君にきせよとしらするといふころをば得ず、といへり、又こゝに高豊と云人、乎は干字かと云り、此二を合せて、乎は竿字として、義訓にホスとよみ、領は、衣一領と云を以て、是もキヌと訓べし、さらばワガホスキヌならむか、又末に、鳴毛の字を落せしかと云一説あり、それによらば、吾竿領袖爾來居管鳴毛、ならむか、猶考べしと云り、(以上岡部氏説、)中山嚴水、領は領の誤なるべし、ワレチウナヅキなるべし、吾乎は、我爾といふ意の古言なり、さて領は、うなづきてしらする意にて、霍公鳥の鳴とき頭の動くが、領くが如くなれば云るなり、さて袖は契沖云る如く、竿にかけて、ほせる衣なるべしと云り、(以上嚴水説、)ウナヅクは、中昔の物語に、往々見えたる詞なり、古言なるべし、源氏物語帚木に、さは侍らぬかといへば、中將うなづく、と見えたる類なり、○歌意は、吾衣を君に服せ奉れよと、吾に領しらせて、吾竿にかけてほしたる衣の袖に、來居つゝ鳴ならむといふか

本人。霍公鳥乎八。希將見。今哉汝來。戀乍居者。

本人は、契沖、むかし相しれる友をいひ、又昔の妻をも云ことなり、こゝはほととぎすの聲を、もとよきなれたれば、むかしの友とおもひて、かく云るなり、鳥獸草木までも、人とはよみならひたり、後撰集に、待人はたれならなくにほととぎす、おもひのほかになかばうらみむ、これほととぎすをさして、待人と云り、第十二に、遠つ人かりぢの池とつよけたるは、遠より來る鳥と云心に云り、第十七にも、遠つ人かりがきなかわと云り、源氏物語若菜下に、御猫どもあまたつどひはべりにけり、いづらこのみし人はと尋て、みつけたまへりともありと云り、○霍公鳥乎八は、やよほととぎすとよびかけたる意なり、乎八は八與と云むが如し、○歌意は、昔の友にてある、やよほととぎすよ、汝にあひたしと戀しく思ひつゝ居れば、待しかひありて、めづらしく今來りしや、といふならむか

如是許。雨之零爾。霍公鳥。宇之花山爾。猶香將鳴。

零爾は、フルニの伸りたるなり、(ラクの切ル、)降ことなるにの意なり、○宇之花山は、名處にあらず、卯花の咲たる山を云り、もみちしたる山を、紅葉の山と云に同じ、十七大伴池主長歌に、見和多勢婆宇能波奈夜麻乃保等登藝須云々、とも見えたり、○歌意は、霍公鳥は、かくばかり雨のつよくふれば、雨やどりなどして、大かたは隠居らむを、卯花の咲たる面白き山にて、雨のふることをもいとほで、なほ止ずに鳴らむか、となり

默然毛將有。時母鳴奈武。日晩乃。物念時爾。鳴管本名。

日晩乃は、蟬之と云意なり、○歌意は、事もなくて、たゞにあらむ時にもがな鳴かし、物念のしけき時に、鳴べき事にてはなきに、かゝる時に斟酌もなく、むさくくと鳴ていよく吾思をまさらしむるは心なな蟬ぞ、となり



詠榛。  
思子之。衣將摺爾。爾保比與。島之榛原。秋不立友。

爾保比與は、にほへかしと希ふなり、○島は、大和國高市郡にあり、五卷に、奈良遲那留志滿乃己太知、とよめり、七卷にも出たり、○歌意は、秋たよばさもあるべきを、いまだ夏の節なれば、色に出て、にほふべき時にはあらざれども、愛しく思ふ女の衣を染むがために、島の榛原は、今も色に出てにほへかしとなるべし

ヨメルハナナ  
詠花。

風散。花橋。袖受而。君御爲跡。思鶴鳴。

君御爲跡を、舊本に、爲君御跡と作るは混れたるなるべし、今改つ、○思鶴鳴は、シヌヒツルカモとよむべし、○歌意は、君が來座て愛べき花なれば、其花橋の風にちるををしみて、せめて袖に受入て置てだに見せむとて、君を慕ひつるかな、となり

香細寸。花橋乎。玉貫。將送妹者。三禮而毛有香。

香細寸は、薰のよきを云言なり、橋に多くよむことなり、○三禮は、病羸るゝを云、四卷下に出て委云り、○歌意は、馥しき橋花を、玉に貫まじへて、いつものごとく、吾に齎し示すべきに、さもなきは、おもふに其妹は、日者病羸であるにてもあらむか、といふならむ

霍公鳥。來鳴響。橋之。花散庭乎。將見人八孰。

歌意は、霍公鳥の來鳴とよもすにつれて、橋花のちる庭の興あるさまを、來て見む人や孰なるぞ、君こそ來て見べき其人なれとなり

吾屋前之。花橋者。落爾家里。悔時爾。相在君鳴。

歌意は、契沖云、たちばなのほひにこそ、いやしきやどもまぎれつれ、それさへ散過たるころ君がとへば、何のいふかひもなし、くやしき時にもきまじつるかなとなり

見渡者。向野邊乃。石竹之。落卷惜毛。雨莫零行年。

零行年は、本居氏云、行は所の誤にてフリソネなり、○歌意は、見わたせば、この向ひの野邊のおもしろき石竹の、雨ふらばやがて散失べきさまなるに、その散失べき事はさても惜や、いかで雨ふることなくて、あれかし、となるべし

雨間開而。國見毛將爲乎。故郷之。花橋者。散家牟可聞。

國見は、一卷三卷などにも出て、既くいへり、○故郷は、飛鳥の故京か、いづれ故京なるべし、○歌意は、雨の晴間もあらば、立出て國見をもせむ、それにつれて、飛鳥の故京の橋花をも見むとおもふ間に、雨のをやみなければ、空しくて打過る程に、故京の花橋はちり失にけむか、となり



野邊見者。瞿麥之花。咲家里。吾待秋者。近就良思母。

歌意かくれたるところなし、瞿麥は、夏の末より、秋かけてさくものなれば、かくいへり、後撰集に、なでしこの花ちりがたに成にけりわが待秋ぞちかくなるらし、似たる歌なり

吾妹子爾。相市乃花波。落不過。今咲有如。有與奴香聞。

吾妹子爾は、枕詞なり、妹に逢といひかけたなり、○有與奴香聞は、嗚呼いかで有かし、と希望ふ意なり、○歌意は、あふちの花は散失すして、いつも今目前に咲たる如く、嗚呼いかで常に有かしとなり

春日野之。藤者散去而。何物鳴。御狩人之。折而將挿頭。

散去而の而は、吉字などの誤か、吉と而と草書よく似たり、チリニキとあるべし、吉は、さきによりしことを、今かたるてにをはなり、○歌意は、春日野の藤花は散失たり、今はなにをか、御獵の人の折て挿頭むぞ、さてもさぶくしき野のさまになりけり、となり

不時。玉乎曾連有。宇能花乃。五月乎待者。可久有。

宇能花乃五月は、卯花の咲五月の意にて、鶯の春といふと同例なり、○歌意は、玉を貫とは、藥玉のことにて、其の五月にするわざなるを、これは五月を待ば、待久しからむとて、いまだ時ならねど、四月に玉をぞ貫る、となり

問 答

宇能花乃。咲落岳從。霍公鳥。鳴而沙渡。公者聞津八。

沙渡は、眞渡なり、五卷上、多爾具久能佐和多流伎波美、とある下に、既くいへり、へかげるふの日記のおくに、ほととぎす今ぞさわたる聲なるわがつけなくに人やきくらむ、○歌意かくれたるところなし

聞津八跡。君之問世流。霍公鳥。小竹野爾所沾而。從此鳴綿類。

問津八跡は、問賜へると云が如し、○小竹野爾所沾而（沾字、舊本治に誤、今は元曆本に従り、）は、しとくと沾漬りてと云意なり、此上にも見えたり○歌意これもかくれなし、右二首は、八卷に、巫部麻蘇娘と、家持卿と、雁の歌を贈答せるに似たり

譬 喻 歌

橘。花落里爾。通名者。山霍公鳥。將令響鳴。

歌意は、中山嚴水云、霍公鳥のめでなつかしむ、橘の花ちりまがふ里に、吾かよひなば、ほととぎすのねたく思ひて、鳴さわぎなむかと云意にて、多くの人の思ひよする女に我がよひなば、里もとどろにいひさわがむかと云に、たとへたり



萬葉集古義十卷之中

夏相聞

寄鳥

春之在者。醉輕成野之。霍公鳥。保等穗跡妹爾。不相來爾家里。

醉輕成野之は、契沖、スガルナル野ノと訓るにつきて云、すがるは俗に似我と云蜂なり、以翼鳴者、

と云たぐひなれば、なくをなると云り、成と云字をかきたるに、まどふべからず、さて野のほととぎ

すといはむために、其野をいふとて、春の時は、すがるの花になく野と云り、ほととぎすは、ほと

ほとと云むためなれば、次第にみな序なりと云り、(此説平穩なるに似たり)但し鳴意を奈流と云む

はいかゞなり、これによりて考るに、成は、古語に、久羅下那須、螢成、など多く云る成にて、如

の意なるべし、さて春之在者とあるを思ふに、霍公鳥の春のころ巢立て鳴聲は、かの螺羸に似たる

故に、螺羸如霍公鳥といふ意につゞきたるか、さて新撰萬葉にも、郭公鳴立春之山邊庭、杳直不輸

人哉住濫、とも見えたるを思ふに、かの鳥の、春のころ巢立鳴には、久都氏とも聞え、(並河天民が片割

記に、伊豫國の山里にては、ほととぎすを、こつて鳥と云よししるせり)又螺羸の音にも似たるな

らむか、其は聞なす人の耳により、少づゝは異なるべけれど、大やうは螺羸の音のやうなりとて、螺

羸如とは云るならむ、但し螺羸に似たりと云ことは、余も明知ねば、くはしく聞しれらむ人にも、

聞きて正すべく、余も又今より心をつけて聞て、なほ定て云べきにこそ、いかにまれ、此までは

保等保等と云むための序なり、さて春されば、螺羸如と云るは、其鳥の體をいへるにこそあれ、霍

公鳥は夏の季を主とする鳥なればとて、夏部には收たるなるべし、○歌意、本句は全序にて、殆ふ

き事、妹を得相見ずして、歸來むとしけりと、からくして逢るをよろこべるなり

五月山。花橋爾。霍公鳥。隱合時爾。逢有公鴨。

歌意、契沖は、橋にほととぎすのあひにあふとき、われも又君にあへりとよろこびてよめりと云り、

今按に、此歌も本句は序にて、さてほととぎすは、橋の陰に隠れて鳴よしにいひて、隱合を云む料

とせるのみか、さて人目をしのび隠るゝをりに、思はず君にあひて、思ふ心を語らふ事も得爲ず、

さても悔しやと云るか、十一に、皇祖乃神御門乎懼見等、侍從時爾相流公鴨、と云に似たり

霍公鳥。來鳴五月之。短夜毛。獨宿者。明不得毛。

歌意は、暮るかと思へば、早明るやうなる、極めて短かき五月の短夜をさへも、唯獨宿をすれば、

一すぢに人を戀しや戀しやと思ひて、たやすく明すことを得せず、さても明がたしとなり

寄蟬

日倉足者。時常雖鳴。物戀。手弱女我者。時不定哭。

物戀は、(物字舊本に我とあるは通がたし、元曆本に於と作て、一本物とあり、今は其に従つ、一

中之卷十義古集葉萬



卷に、旅爾之而物戀之伎爾、三卷に、客爲而物戀敷爾、などありて、物とは廣く云事なるを、こゝは人を戀しく思ふを云るなり、○不定哭の上、舊本時字なきは脱たるなるべし、と大神眞潮翁の云るは信にさる事なり、今は此説に従て補つ、六卷に、時不定鳴、此上に、時不終鳴などあり、○歌意は、蟬は時を定めてなげども、人を戀しく思ふ手弱き女身の吾は、時の定りもなしに、いつも泣てのみあるを、丈夫ならば、かくまで心よわくはあるまじきを、となり

寄草

人言者。夏野乃草之。繁友。妹與吾師。携宿者。

本句は、古今集に、里人の言は夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやも、とあり、○師字、舊本にはなし、今は元曆本に従つ、○携宿者、といひのこしたるは、よしやそれはさもあらばあれと云意を、含ませたるなり、小町歌に、世中はあすか河にもならばなれ君とわれとが申したえずば、とあるに似たり、○歌意は、妹と吾と、二人手をとりはして宿たらば、夏野の草の繁きが如く、人言は繁くいひさわぐとも、よしやそれはさもあらばあれ、いとひはすまじきを、いかにもして、一すぢに相宿せまほしく思ふ、このごろぞ、となり

迺者之。戀乃繁久。夏草乃。苜掃友。生布如。

繁久は、繁くあるやうはと云意なり、○生布如は、○ヒシクゴトシと訓べし、○歌意は、このごろの戀しく思ふ物思ひの、繁くあるやうは、たとへば夏野の草の刈掃へども、やがて其跡に重々に生繁るが如しとなり、十一に、吾背子爾吾戀良久者夏草之刈除十方生及如、大かた似たる歌なり

眞田葛延。夏野之繁。如是戀者。信吾命。常有目八方。

八方、元曆本には八面と作り、○歌意は、重々に繁く、かくの如く戀しく思ふからは、思に堪かねて死むより他はなし、嗚呼まことに吾命の常にながらへて生てあるべしやは、となり

吾耳哉。如此戀爲良武。垣津旗。丹頰合妹者。如何將有。

垣津旗は、丹頰合を云む料の枕詞なり、○丹頰合（舊本頰合を類令に誤、今は元曆本に従つ）は、ニツラフと訓べし、凡丹頰經、丹頰合など書るを、ニホヘルとよむは、いみじきひがことなり、頰はホとよむまじく、合經などはヘルと訓べからざるをや、○歌意は、われのみひとりかくばかり戀しく思ふらむか、紅顔かにうるはしきその妹は、いかにあらむ、わが戀しく思ふ如くに、吾を戀しく思ふらむか、いかさまわがこふる如くに、戀しく思ひはせじ、となり

寄花

片搓爾。絲叫曾吾搓。吾背兒之。花橘乎。將貫跡母日手。

歌意は、吾夫子が家の、うるはしき花橘の花を、玉に貫むと思ひて、敵對なしに、からくして、絲を片搓にのみ吾搓ぞとなり、契沖云、寄花詞なれば、此花橘は花を云り、母日手は思ひてなり、片搓と云るは、かた思ひのたとへなり、はなたちばなをぬくをば、事成にたとふるなり

鷺之。往來垣根乃。宇能花之。厭事有哉。君之不來座。



本句は、厭と云む料の序なり、鶯は夏かけてもすむものなれば云り、さて八卷に、ホトトギスナクアノ能宇乃花之、とて、末句全同歌あり、古今集雜下躬恒歌に、水のおもにおふる五月のうきくさのうきことあれやねをたえてこぬ、とも見ゆ、○厭事有哉は、我を厭ひて、うるさきものに思ふ事あればにや、と云意なり、さきの人の身に、憂ことのあればにやと云にはあらず、まがふべからず、○歌意は、吾を厭ひて、うるさきものに思ふ事あればにや、このごろはすべて君が問來坐ぬとなり

宇能花之。開登波無二。有人爾。戀也將渡。獨念爾指天。  
宇能花之は、開と云む料なり、無二と云まではは關らず、○開登波無二は、吾にあはむと思ふ心の、ひらけずしてある人になり、と岡部氏の云るが如し、さてこれは契沖も云る如く、咲とはなしにある、と云心につけて心得べし、有人は、或人と云義にはあらざればなり、○歌意は、未吾にはあはむと思ふ心の、ひらけずしてある人を片思に無益に、他事なく戀しく思ひて、月日を送らむか、となり

吾社葉。憎毛有目。吾屋前之。花橘乎。見爾波不來鳥屋。

歌意は、吾をばにくきものにおもほすらむなれば、常には來座ぬもことわりなり、よしや吾をこそにくくはおもほすらめ、わがやどの花にまで罪あるべきよしなれば、この花たちばなのさかりをば、見に來ますべしと思ひしを、其をだに見には來ますまじきとにや、さりとはあまりに情なしとなり、○契沖意、拾遺集伊勢が歌に、上の句今と全おなじうして、花見にだにも君がきまきまぬとあり、ともにやさしきうたなり、これらのうたを得てば、まことに雨のふるひならば、みのもかさもしとくにぬれて、まどひゆきぬべし

霍公鳥。來鳴動。崗部有。藤浪見者。君者不來登夜。

歌意は、ほととぎすさへ來鳴とよもして、いと興ある此岡邊の藤浪を、見には來ますまじとにや、となり

隱耳。戀者苦。瞿麥之。花爾開出與。朝旦將見。

隱耳は、コモリノミと訓べし、十六に、コモリノミコフレバクシヤマノ隱耳戀者辛苦山葉從、イデクルツキノアラハサバイカニ出來月之顯者如何、とあり、○歌意は、契沖、しのびてこふればくるしきに、なでしこのつぼめるが咲出ることく、いまはおしあらはして人にもしらせよ、なでしこのうるはしきを見るごとく、紅顔を日にく見むといふなり、朝旦といへるは、日ごとの意なり、といへり

外耳。見筒戀牟。紅乃。末採花乃。色不出友。

外耳は、ヨソノミニと訓べし、○筒字、舊本箇に誤れり、拾穂本に従つ、○末採花は、契沖、紅花は末よりさきをむるをつみとれば、末つむ花とはいふなりと云り、本居氏、末は、集中に宇禮とのみよめれば、ウレツムハナとよむべしといへり、さることなり、さて第三四句は、色に出といはむ料の序なり、○歌意は、色に出て、おしあらはして、人にしらせずとも、外目にのみ見つ、愛を



らむと云なるべし、古今集に、人しれずおもへばくるしくれなるのするつむ花の色に出なむ、とあるとは、表裏なり

寄露

夏草乃。露別衣。不著爾。我衣手乃。干時毛名寸。

露別衣は、契沖云、たゞ露をわけゆく衣なり、古今集に、山分衣とよめるとおなじころにて、かれはおこなひ人の衣と聞ゆれば、すこしかはれり、○不著爾は、ケセナクニと訓べし、著てあらぬことなるをと云むが如し、四卷に、吾背子之蓋世流衣之、十六に、伊呂雞(舊本雅に誤)世流管笠小笠云々、古事記中、卷倭建命御歌に、那賀祇勢流意須比能須蘇爾云々、美夜受比賣歌に、和賀祇勢流意須比能須蘇爾云々、などあり、○歌意は、夏草の露分衣を取着たらば、さもあるべきことなるを、其露分衣を着てもあらぬことなるを、何故に、吾袖の乾間もなく沾たるらむ、げにさりとはつよき涙ぞとなり

寄日

六月之。地副割而。照日爾毛。吾袖將乾哉。於君不相四手。

歌意は、君にあひたらば涙もとどまりて、おのづから乾もすべきなれど、君にあはずしては、他事なく戀しや戀しやと思へば、たとひ地さへ割裂て、つよく照六月の日影にほすとも、この涙にしみじく沾りたる吾袖は、乾はずまじとなり、(六帖には、終句、妹にあはずとあり)

秋雜歌

七夕

天漢。水底左閉而。照舟。竟舟人。妹等所見寸哉。

水底左閉而(底字、舊本にはなし、今は一本に従つ)は、ミナソコサヘニなり、○照舟は、ヒカルフネと訓べし、艤の美麗きをいへり、○妹等所見寸哉といへるは、妹と相見えきやと、問かけたる意にて、妹等は、妹と共にといふほどにきくべし、妹に所見えきやといへば、此方の容儀の、妹が目に見えきやとのみきこゆるを、妹等としもいへるは、此方の容儀は妹に見え、彼方の容儀は吾に見ゆる謂なるを思ふべし、○歌意、舟人は彦星、妹は棚機女なれば、天河の水底までひかるばかりに、装ひたる舟を泊し、その舟人の彦星は、棚機女の妹と相見えきやいかにと、かたへの人の問かけたる謂なるべし

久方之。天漢原丹。奴延鳥之。裏歎座津。乏諸手丹。

奴延鳥之は、枕詞なり、かくつゞくる謂は、既く一卷軍王歌に委説り、○裏歎とは、裏は表の對にて、裏に物することなり、歎は、程無あはむと長き息をつきて歎美よしなり、奈宜久とは、喜しき事にも、哀しき事にも、嗚呼と長き息をつく事なり、○乏諸手丹は、うらやましく思はるるまでにと云意なるべし(契沖、かゝるこひはたぐひすくなく、めづらしきまでにと云なり、と云るはいかゞ)○歌意は、外に居て見やる人の、うらやましく思はるゝまでに、天河原に出立て、彦星の來



まさむを、心に喜しく下待て、棚機女の裏に歎美座つるよ、と云ならむか

吾戀。嬌者知遠。住船之。過而應來哉。事毛告火。

知字、彌と作る本もあれど、舊本を宜とす、○事毛告火は、岡部氏云、火は、无か哭の誤なるべし、言も告無の意なり、○歌意、中山巖水、第一二の句はアガコヒヲツマハシレヲと訓べし、嬌は彦星を云、往船とは、たゞ天漢を漕行舟にて、彦星の舟にあらず、過而は、時過而の意なり、わが待つゝ戀ることを、彦星はよく知給ひぬるを、舟の過往ごとく時過て來ますべしやは、もし時過むとならば、事のよしを告來すべきに、しかくと言もつけ來すてあれば、時過て今更來座べきやうはなしといへるにて、かのこぎ行舟を見て、彦星の來り給ふにやと、つきそふ女どものいふに、こたふるさまなりといへり、今按に、此説の如くなら、ば往船之は、たゞ天漢の縁に、枕詞の如くに云るものともすべきか、なほ考べし

朱羅引。色妙子。數見者。人妻故。吾可戀奴。

朱羅引は、朱ら光の縮れるにて、紅顔を云なるべし、羅はそへ言なり、既に四卷に出づ、○色妙子は、十三にも、日本之黄楊乃小櫛乎抑刺、刺細子彼曾吾嬌、とあり、刺細は敷細の誤なれば、こも舊本にシキタへとよめるよろし、(イロタへとよむはわろし、)二卷に、色妙乃枕等卷而、とあるをも考合べし、色は重浪の重にて、妙は、微妙なる謂ならむ、義女を稱ていふなるべし、(袖中抄に、崇徳院御製、たへの子がよとのすがた見てしより、命は逃にかへてき、とあり、)人妻故、

故は、人妻なるものをの意なり、一卷に、紫草能爾保傲類妹乎爾苦久有者、人嬌故爾吾戀目八方、十二に、小竹之上爾來居而鳴鳥目平安見人妻嬌爾吾戀二來、これれ同體なり、○可戀奴は、コヒヌベシなり、奴字は、いかゞしき用様なれど、かくかけること集中前後に例あり、既にいへり、○歌意は、人妻なれば、いかに戀しく思ひても、益なき事とは思ひながら、紅顔の美女をたびく見れば、見る度に心うつりて、なほ止ことを得ずして、戀しく思ふべしとなるべし、(六帖に、此歌をいろたへの子のかすみれば、と載たるは誤なり、)さて此歌、七夕によめるものとしも聞えず、誤て此間に收たるにやあらむ

天漢。安渡丹。船浮而。秋立待等。妹告與具。

安渡は、安河の渡なり、古事記に、是以八百萬神、於天安河之河原神集々而云々、(書紀にも、天安河邊とあり、)古語拾遺に、天八端河原、とありて、名意は彌瀬河なるべし、○秋立待等は、岡部氏、アキタチマツトと訓はわろし、アキタツ待トとよむべし、秋の立を待の意なりと云り、本居氏、秋は、私の誤にて、アガタチマツトなりと云り、○妹告與具は、イモニツゲゴソにて、いかで妹につげよかしと希ふなり、(與具は、乞其の誤なりと略解に云れど、)十三にも、眞福在與具、(とあれば誤とは決めがたし、)其義は未思得ず、猶考べし、○歌意は、天の安河の渡に船を浮べて、吾立て今かくと待て居るよしを、いかで棚機女に告よかし、となり

從蒼天。往來吾等須良。汝故。天漢道。名積而叙來。



從蒼天は、大空をと云が如し、從は例の軽く乎といふに通へり、○歌意は、大空を飛廻りては、汝が何處に山來て、吾を迎ふと云事が、たどくしきによりて、飛行自在の吾さへも、汝が河門に出て、待つゝあるらむと思ふが思に、他所をばたどらずて、天河道を辛うして艱難み來しとなり  
八千戈。神自御世。乏嬬。人知爾來。告思者。

八千戈神は、大穴牟遲神のことなり、六卷にもよめり、既くいへり、○乏嬬（嬬字、拾穂本には儺と作り、）とは、年に一度ならでは、相見る事なければ、見る事の稀に乏しき妻と云なるべし、夫木集に、天河くらしかねたるともし妻わたりをいそぐぬさ手向らむ、とあり、さて略解云、嬬は、文選左太冲詩に、伉儷不安宅、張銑註に、伉儷謂妻也、とあり、儺儺同韻にて、古通用ひしならむと清水濱臣云り、〔頭註、大神ノ景井云、乏嬬は、白嬬の誤にはある〕嬬告思者は、繼而思へばにて、之は、その一すぢなるよしを思はする辭なり、〔頭註、古事記傳、苦思者、苦字、今本は〕○歌意は、神代より今に至るまで繼きて、織女を一すぢに戀しく思へば、人目を隠ばむとしのび得ず、吾戀妻なりと云ことを、世人皆よく知にけりと云ならむ

吾等戀。丹穂面。今夕母可。天漢原。石枕卷。

丹穂面は、紅顔を云、五卷にも、爾能保奈酒意母提乃字倍爾、とあり、さて十九に、御面謂之美於毛和と註したれば、面字オモワとよむこと見然なり、○今夕母可の母は、軽く添て歎息をさせたる辭なり、昨日母今日母などの母とは別なり、可は疑辭なり、○石枕は、石を枕とするを云、○此意は、吾一年を經りて戀しく思ひし紅顔の女と、天河原に石枕を共に纏て、嗚呼今夜相宿せむかとなり

己嬬。乏子等者。竟津。荒磯卷而寐。君待難。

己嬬（嬬字、拾穂本には儺と作り、）は、オノガツマと訓べし、岡部氏、嬬一本に嬬とあり、何れにてもあるべしと云り、さて嬬は借字にて、彦星を己夫の云ならむ、○乏子等者は、トモシムコラハと訓べし、さて乏子等とは、己が夫の彦星に逢ことを、稀に乏しめる子等と云にて、その子等は棚機女なり、○竟津は、ハテムツノと訓べし、竟津とは、彦星の舟の將竟天河の津と云なるべし、○歌意は、夫君を待に堪難にして、その夫君の彦星の將竟津の、荒磯をやがて枕にして、棚機女の宿と云るにや

天地等。別之時從。自儺。然叙手而在。金待吾者。

自儺（儺字、拾穂本には儺と作り、）契冲云、彦星になりて、たなばたを云なり、○然叙手而在は、天地はやく割判れしより、織女はおのが妻とさだまりて、かくぞ我手にあるなりと、これも契冲云り、今云、右の説の如く、然は如此といふ意に聞べし、（然と如此とは、彼と此との差ありて、もとより表裏の辭ながら、又相通はしてきく例あり、そのくはしき理は、既くいへり、彼の然と云は、此の如此、此の然と云は、彼の如此なる謂よりいふことなり、たゞ何となく心まかせに、通はし云るにはあらず、各々その前後の語勢の趣によることなり、と如べし、）○金待吾者とは、むかしよりさだ



まれることなれば、七日の夜はあはむと、まつなりと、これも同人云り、○歌意は、天地の割判れし時より、織女は自妻とさだまりて、如此我手にあるなれば、その相見む初秋の七夕を、吾は待そと云なるべし

彦星。嘆須嬬。事谷毛。告爾叙來鶴。見者苦彌。

彦星は、契沖云、ヒコホシハと訓べし、○嘆須嬬（嬬字、拾穂本には儼と作り、）は、ナゲカスイモニと訓べし、嘆く妹になり、とこれも契沖云り、今云、嬬は、ツマニとよみて然るべし、嘆須は、奈宜久の仲りたるにて、嘆き賜ふ妻にと云ほどの意なり、○爾字、舊本には余に誤れり、今は古寫本に従つ、○歌意は、つまこひに嘆き賜ふを、よそめに見ればくるしさに、そのなげき賜ふ織女に、物をなりとも告なぐなめむとてぞ、彦星は天河を渡りきつるとなるべし、これも彦星に擬てよめるなり

久方。天印等。水無河。隔而置之。神世之恨。

天印等は、此下長歌にも、天驗常とあり、○水無河（無の下、拾穂本には瀬字あり、）は、元曆本に、ミナシガハとよめり、八雲御抄にもしかよませ給へり、それによるべし、則天河の事なり、實に、水の無河のよしに云るなり、○歌意は、天河を天つ勝示隔に置いて、一年に一度ならでは、相見ることかなはぬやうに、定めたりし神代が、一すぢに憾めし、となり

妹傳言の言字、舊本になきは、脱たるなるべし、イモガツテゴトと訓べし、○速告與は、いかで速く告よかし、と云意なり、與字、コソとよみて、希望辭とすること、集中前後に例多し、○歌意は、たとひ夜霧に隠りて、いとど吾居あたりの、遠く隔てありとも、織女の傳言をば、いかで速く告よかしと、織女の使を待わびて、彦星のよめる謂なり

汝戀。妹命者。飽足爾。袖振所見都。及雲隱。

汝は、彦星をさして云、○飽足爾は、略解に、アキタリニとよみたれどもいかとなり、足は迄の誤なるべし、さらばアクマデニと訓べしと、中山嚴水がいひたるぞよき、○歌意は、汝彦星の戀しく思ひて待と云織女は、遠く雲隠るかぎり、此土より見る目に飽まで、袖舉て往さまの見えつるなり、されば今ぞ織女の相見え奉るならむと、此方より見やりて、おしはかりたる謂なるべし

夕星毛。往來天道。及何時鹿。仰而將待。月人壯。

夕星毛は、もしは毛は、之字などの誤にはあらざるか、毛とありては穩ならざればなり、されば姑ユフヅツノと訓つ、夕星は、二卷、五卷にありて既く云り、俗によひの明星と云是なり、○月人壯の下、子字を脱せり、と略解に云れど、十六に、飛鳥壯蚊、又、舍人壯裳、など見えたれば、猶もとのまゝにてもあらむ、○歌意は、夕星のかよふ夕の天を仰て、月の出來むを、いつまでか待つつ居むぞ、となるべし、中山嚴水云、月人壯は彦星の異名にやと、契沖が説るは誤ならむ、集中、月のことを、月人壯子とよみたれば、此歌は月を待歌なるが、まぎれて七夕の歌の中に入たるならむ



天漢。已向立而。戀等爾。事谷將告。嬖言及者。

已向立而は、舊訓に、イムカヒタチテとあるよろし、廿卷にも、已を伊の假字に多く用たるを思ふべし、此下に、天漢射向居而、とあるに同じく、伊はそへ言なり、又十八に、夜須能河波許牟可比太知且云々、とあるも、許は伊字の誤にて、イムカヒタチテなるべし、(岡部氏が、今のを十八なるをも、コムカヒと訓で、從此鳴渡など云從此の略言なり、と云るはあらず、)○戀等爾は、通難し、八卷に、玉切命向戀從者公之三船乃梶柄母我、とあるによりて考るに、等爾は、從者か自者かを誤れるなるべし、さらばコヒムヨハと訓べし、(岡部氏は、等は樂の誤なり、コフラクニと訓べし、といへり、字形は近ければ、さもあるべきがごとくなれど、さては歌意隠ならず)○嬖言及者(嬖字、拾穂本には儼と作り、言字、元曆本には奇と作り、)は、中山嚴水云、言を奇に作るによるに、奇は寄の誤にて、ツマヨスマデハなるべし、(按、儼の寄來る謂なれば、ツマヨルと云べき理なるに似たり、ツマヨスと云ては、主とあるものありて、其が令てよする義となれば、すこしいかゞなるやうなれど、妻余斯來世禰などもいひて、いづくにても妻ヨスといふが定にて、ツマヨルといへることなければ、なほツマヨスと訓べきなり、)○歌意は、七日の夕になりて、天河に向立て、空しく戀しく思はむよりは、嬖寄せ來るまでは、せめて使して、言をなりともつけやらむ、となり

水良玉。五百都集乎。解毛不見。吾者干可太奴。相日待爾。

水良玉は、白玉なり、水の拗音を直言に轉して、志の假字に用たり、○五百都集は、契沖云、此集十八家持の歌に、しらたまのいほつとどひをてにむすびおこせむあまはむかしくもあるか、とあり、ひとすぢの緒にて、五百箇の玉をぬきたるを、いほつとどひといふ、神代紀には、たぶさにまつふといひ、十八には、手に結びとよみたれば、たなばたの手玉にかざるなり、と云り、古事記に、八尺勾璉之五百津之美須麻流之珠、書紀に、御統と書て、此云美須麻流とあり、竊疏に、以絲貫穿總括之、とある、この統と集と同意味なり、○解毛不見は、解看ることをも得せずといふなるべし、手に纏たる玉を、再び解て試ることをする間のなきよしなり、○吾者干可太奴は、岡部氏云、干は在の脱畫なるべし、在可太奴にて、在難ぬといふなるべし、○歌意は、白玉の五百津集の手玉を、装ひ飾て、容して、今かくと彦星の來座てあはむ日を、立待によりて、その飾の手玉を、再び解て試むることをも得せず、心を安むる間もなくして待に、在にも在れず堪がたし、となるべし

天漢。水陰草。金風。靡見者。時來之。

水陰草は、岡部氏云、十二に、山河の水陰に生山草云々、と云を、一本に水陰とあり、しかればこゝも、陰は隠とありしなるべし、陰にても意は同じかるべし、然ればミコモリクサと訓べし、さて十二に、山草といひしかば、水中のことならで、水分をミクマリと云如く、水派などの地の草を云べし、故秋風になびくといへり、○靡見者は、ナビカフミレバと訓べし、○時來之は、岡部氏云、來の下に、良字脱たり、トキキタルラシと訓べし、○歌意は、天河の水派に生たる草の、秋風に吹れて靡くさまを見れば、彦星の相見に來座む時來るならし、となり



吾<sup>アガ</sup>等待<sup>マシ</sup>之。白<sup>アキ</sup>芽<sup>ハ</sup>子<sup>ギ</sup>開<sup>サ</sup>奴<sup>ヌ</sup>。今<sup>イマ</sup>谷<sup>ダニ</sup>毛<sup>モ</sup>。爾<sup>ニ</sup>寶<sup>ホ</sup>比<sup>ヒ</sup>爾<sup>ニ</sup>往<sup>ユカ</sup>奈<sup>ナ</sup>。越<sup>チ</sup>方<sup>カタ</sup>人<sup>ヒト</sup>邇<sup>トモ</sup>。

白<sup>アキ</sup>芽<sup>ハ</sup>子<sup>ギ</sup>は、秋<sup>アキ</sup>芽<sup>ハ</sup>子<sup>ギ</sup>なり、かく書るは、白は西方秋色なるが故なり、と契冲云り、此下にも白風とあり、○爾<sup>ニ</sup>寶<sup>ホ</sup>比<sup>ヒ</sup>爾<sup>ニ</sup>往<sup>ユカ</sup>奈<sup>ナ</sup>は、染<sup>ニ</sup>に往<sup>ユ</sup>む、さらば急<sup>イ</sup>くといそぎたる意なり、爾<sup>ニ</sup>寶<sup>ホ</sup>布<sup>フ</sup>は、染<sup>ソ</sup>ると云むが如し、奈<sup>ナ</sup>は牟<sup>ム</sup>を急<sup>イ</sup>く云るなり、さてこゝは、織女に相觸<sup>ナ</sup>て、媚<sup>メ</sup>きに往<sup>ユ</sup>むと云意を帶たるなるべし、○越<sup>チ</sup>方<sup>カタ</sup>人は、織女なり、○歌意は、見れば吾待<sup>ガ</sup>し秋はぎ咲たり、常に往まほしけれども、秋ならでは往ことのかなはざれば、今なりとも急<sup>イ</sup>く往<sup>ユ</sup>て、そのはぎの色に染<sup>ソ</sup>らむ、言<sup>コト</sup>にこそ芽子に染<sup>ソ</sup>らむといへ、實はそのはぎに入<sup>リ</sup>交<sup>リ</sup>て、色に染る如くに、織女に往<sup>ユ</sup>て相觸<sup>ム</sup>む、と云るなるべし

吾<sup>ワ</sup>世<sup>セ</sup>子<sup>コ</sup>爾<sup>ニ</sup>。裏<sup>ウラ</sup>戀<sup>コヒ</sup>居<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>。天<sup>アマ</sup>河<sup>ガハ</sup>。夜<sup>ヨ</sup>船<sup>ネ</sup>榜<sup>ボウ</sup>動<sup>ユム</sup>。梶<sup>カヂ</sup>音<sup>ネ</sup>所<sup>ト</sup>聞<sup>ク</sup>。

吾<sup>ワ</sup>世<sup>セ</sup>子<sup>コ</sup>は、彦<sup>ヒコ</sup>星<sup>ホシ</sup>なり、○裏<sup>ウラ</sup>戀<sup>コヒ</sup>は、下<sup>シタ</sup>戀<sup>コヒ</sup>と云に同じ、下<sup>シタ</sup>心<sup>ココロ</sup>に裏<sup>シ</sup>て、戀<sup>コヒ</sup>しく思<sup>シ</sup>ふ意なり、○歌意かくれたるところなし、織女<sup>オリメ</sup>の意に擬<sup>ヒ</sup>へたるなり

眞<sup>マ</sup>氣<sup>ケ</sup>長<sup>チカ</sup>。戀<sup>コヒ</sup>心<sup>ココロ</sup>自<sup>ラ</sup>。白<sup>アキ</sup>風<sup>カゼ</sup>。妹<sup>イモ</sup>音<sup>ネ</sup>所<sup>ト</sup>聽<sup>ク</sup>。紉<sup>ヒモ</sup>解<sup>トキ</sup>往<sup>キ</sup>名<sup>ナ</sup>。

眞<sup>マ</sup>氣<sup>ケ</sup>長<sup>チカ</sup>は、眞<sup>マ</sup>來<sup>キ</sup>經<sup>ヘ</sup>長<sup>チカ</sup>にて、月日長くと云意なり、既<sup>ス</sup>く註<sup>シ</sup>り、○紉<sup>ヒモ</sup>解<sup>トキ</sup>往<sup>キ</sup>名<sup>ナ</sup>は、往<sup>キ</sup>は待<sup>マ</sup>字<sup>ジ</sup>の誤<sup>ト</sup>にてマタナなり、と本居氏の云る、そは此下に、天<sup>アマ</sup>漢<sup>ガハ</sup>川<sup>カハ</sup>門<sup>カド</sup>立<sup>タ</sup>吾<sup>ワ</sup>戀<sup>コヒ</sup>之<sup>シ</sup>君<sup>キミ</sup>來<sup>キ</sup>奈<sup>ナ</sup>里<sup>リ</sup>紉<sup>ヒモ</sup>解<sup>トキ</sup>待<sup>マ</sup>、とあると同じければ、さも有ぬべきことながら、又思ふに、十二に、雨<sup>アメ</sup>毛<sup>モ</sup>零<sup>シ</sup>夜<sup>ヨ</sup>毛<sup>モ</sup>更<sup>シ</sup>深<sup>シ</sup>利<sup>リ</sup>今<sup>イマ</sup>更<sup>シ</sup>、君<sup>キミ</sup>將<sup>マサ</sup>行<sup>ユク</sup>哉<sup>ヤ</sup>紉<sup>ヒモ</sup>解<sup>トキ</sup>設<sup>セ</sup>名<sup>ナ</sup>、と

と書るをも合考<sup>カウ</sup>べし、又八巻にも、天<sup>アマ</sup>漢<sup>ガハ</sup>相<sup>サウ</sup>向<sup>コウ</sup>立<sup>リ</sup>而<sup>シテ</sup>吾<sup>ワ</sup>戀<sup>コヒ</sup>之<sup>シ</sup>君<sup>キミ</sup>來<sup>キ</sup>奈<sup>ナ</sup>里<sup>リ</sup>紉<sup>ヒモ</sup>解<sup>トキ</sup>設<sup>セ</sup>奈<sup>ナ</sup>、とあり、名<sup>ナ</sup>は牟<sup>ム</sup>を急<sup>イ</sup>く云るなり、○歌意は、他人は未<sup>ミ</sup>さともしらじを、吾<sup>ワ</sup>心<sup>ココロ</sup>裏<sup>シ</sup>より戀<sup>コヒ</sup>しく思<sup>シ</sup>ひて、今か今かと待<sup>マ</sup>につれて、織女<sup>オリメ</sup>の來<sup>キ</sup>る音<sup>ネ</sup>が秋<sup>アキ</sup>風<sup>カゼ</sup>に傍<sup>ワタリ</sup>て、速<sup>スミ</sup>に吾<sup>ワ</sup>には聞<sup>ク</sup>ゆるなり、さらば急<sup>イ</sup>く、そのいそぎして、紉<sup>ヒモ</sup>解<sup>トキ</sup>設<sup>セ</sup>けて待<sup>マ</sup>む、となり

戀<sup>コヒ</sup>敷<sup>シ</sup>者<sup>ハ</sup>。氣<sup>ケ</sup>長<sup>チカ</sup>物<sup>モノ</sup>乎<sup>ナ</sup>。今<sup>イマ</sup>谷<sup>ダニ</sup>。乏<sup>トモシム</sup>牟<sup>ム</sup>可<sup>ベシヤ</sup>哉<sup>ヤ</sup>。可<sup>ア</sup>相<sup>サウ</sup>夜<sup>ヨ</sup>谷<sup>ダニ</sup>。

戀<sup>コヒ</sup>敷<sup>シ</sup>者<sup>ハ</sup>は、戀<sup>コヒ</sup>しかるはといふが如し、○歌意は、戀<sup>コヒ</sup>しく思<sup>シ</sup>ひたることは、年月日長くてありしものを、逢<sup>ア</sup>べき今<sup>イマ</sup>夜<sup>ヨ</sup>なれば、乏<sup>トモシム</sup>しむべきに非<sup>ズ</sup>ず、今なりとも、心<sup>ココロ</sup>足<sup>タラシ</sup>に速<sup>スミ</sup>く相<sup>サウ</sup>見<sup>ミ</sup>む、となるべし、谷<sup>ダニ</sup>の言<sup>コト</sup>二<sup>ニ</sup>ありていかゞ、此下に、戀<sup>コヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>者<sup>ハ</sup>氣<sup>ケ</sup>長<sup>チカ</sup>物<sup>モノ</sup>乎<sup>ナ</sup>今<sup>イマ</sup>夜<sup>ヨ</sup>谷<sup>ダニ</sup>令<sup>シ</sup>乏<sup>トモシム</sup>應<sup>オウ</sup>哉<sup>ヤ</sup>可<sup>ベシヤ</sup>相<sup>サウ</sup>物<sup>モノ</sup>乎<sup>ナ</sup>、とあるは、今の歌の重出たるものときこゆ、彼<sup>カ</sup>方<sup>カタ</sup>理<sup>リ</sup>かなへるか

天<sup>アマ</sup>漢<sup>ガハ</sup>。去<sup>コゾ</sup>歲<sup>ノ</sup>渡<sup>ワタリ</sup>伐<sup>デ</sup>。遷<sup>ウツ</sup>者<sup>ハ</sup>。河<sup>カハ</sup>瀨<sup>セ</sup>於<sup>ニ</sup>踏<sup>フム</sup>。夜<sup>ヨ</sup>深<sup>シ</sup>去<sup>ク</sup>來<sup>キ</sup>。

去<sup>ク</sup>歲<sup>サイ</sup>渡<sup>ワタリ</sup>伐<sup>デ</sup>、これ<sup>コ</sup>を<sup>コ</sup>ゾ<sup>ノ</sup>ワ<sup>タ</sup>リ<sup>バ</sup>とよみて、渡<sup>ワタリ</sup>場<sup>バ</sup>の意とする事なれど、おぼつかなし、場<sup>バ</sup>を、古<sup>コ</sup>と云しことなし、古<sup>コ</sup>は爾<sup>ニ</sup>波<sup>ハ</sup>とのみいひたればなり、故<sup>コト</sup>考<sup>カウ</sup>に、こは伐<sup>バ</sup>は代<sup>ダイ</sup>字<sup>ジ</sup>の誤<sup>ト</sup>にて、ワ<sup>ワ</sup>タ<sup>タ</sup>リ<sup>デ</sup>な<sup>ナ</sup>らむ、代<sup>ダイ</sup>を<sup>テ</sup>とよむことは、既<sup>ス</sup>く云るが如し、ワ<sup>ワ</sup>タ<sup>タ</sup>リ<sup>デ</sup>は、應<sup>オウ</sup>仁<sup>ニ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>カウ</sup>紀<sup>キ</sup>歌<sup>カ</sup>に、知<sup>チ</sup>波<sup>ハ</sup>椰<sup>ヤ</sup>臂<sup>ヒ</sup>等<sup>トウ</sup>于<sup>ニ</sup>泥<sup>ニ</sup>能<sup>ネ</sup>和<sup>ワ</sup>多<sup>タ</sup>利<sup>リ</sup>珥<sup>ニ</sup>和<sup>ワ</sup>多<sup>タ</sup>利<sup>リ</sup>涅<sup>ニ</sup>珥<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>々<sup>々</sup>、とあるに同じく、渡<sup>ワタリ</sup>出<sup>デ</sup>にて、即<sup>ス</sup>渡<sup>ワタリ</sup>の水<sup>ミヅ</sup>門<sup>カド</sup>を云詞なり、○歌意は、去年<sup>クノトシ</sup>の秋<sup>アキ</sup>渡<sup>ワタリ</sup>りし天<sup>アマ</sup>河<sup>ガハ</sup>の渡<sup>ワタリ</sup>出<sup>デ</sup>が、遷<sup>ウツ</sup>ひ易<sup>カ</sup>りて異<sup>イ</sup>處<sup>トコロ</sup>になりたれば、そこかこゝかたとどりて踏<sup>フム</sup>惑<sup>ダク</sup>ふ間に夜<sup>ヨ</sup>ぞ更<sup>シ</sup>にける、となり、古今集に、天<sup>アマ</sup>河<sup>ガハ</sup>淺<sup>シ</sup>瀨<sup>セ</sup>白<sup>シロ</sup>浪<sup>ナミ</sup>たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける、とあり



自古。舉而之服。不顧。天河津爾。年序經去來。

歌意は、織女が布おらむとて、往古より機にはあげおきたれども、彦星をこひしく思ふ心の切なる故に、天河津にのみ立出て、其機物をかへりみずして、年ぞ經にける、となり

天漢。夜船榜而。雖明。將相等念夜。袖易受將有。

袖易受將有は、契沖、有の下に哉字を落せりとみゆといへり、ソデカヘズアラメヤと訓べし、○歌意は、天河に夜船を漕て、そここゝとたどるほどに、たとひ夜は明ゆくとも、かねて今夜は相見むとおもへる夜なれば、織女と袖をかはさずしてあらめやは、かにかくに袖はかはさむぞ、と云るなり

遙嫖等。手枕易。寐夜。雞音莫動。明者雖明。

嫖字、(古寫本には嫖、拾穂本には嫖と作り、)妻と通ふ義は見えざれども、古はツマと訓しにこそ、○歌意は、遠方に隔りて居る織女と、手枕易して相宿したる今夜は、たとひ夜は明はすとも、雞は明るを告て、鳴ことなかれ、となり

相見久。歎雖不足。稻目。明去來理。舟出爲牟嬭。

稻目は明の枕詞なり、此は稻目は、稻之群と云なるべし、目とは、集中に小竹之目とよめる目に同じくて、群の意なり、牟禮切米、(鳥魚などの群を、目と云ることも例多し)さて明とかゝるは、熟らむと云意にいひかけたるなるべし、稻の熟するをあからむと云は古言にて、皇極天皇紀に、九穀登熟、天智天皇紀に、一宿之間稻生而穗、其且重穎而熟、などあり、○嫖字、拾穂本には儻と作り、○歌意は、相見て語ふことの飽足はせねども、夜が明ゆきにたれば、ためらふべきに非ず、いざ舟發して歸らむ妹よ、と別を告いへるなるべし、(六帖に、あひ見まく秋たゝすともしのゝめの明果にけり舟出せむかは、とあるは、かたぐ誤りたり、)

左尼始而。何太毛不在者。白袴。帶可乞哉。戀毛不遏者。

不在者は、字の意の如し、次の不遏者は、不盡にの意にて異なり、○不遏者、遏字、拾穂本には竭と作り、元曆本には過と作て、スギネバとよめり、いづれにてもあらむ、不遏者は、盡ぬにの意、不遏者は、過去ぬにの意なり、この言の事既くいへり、○歌意は、相宿そめて未何程の間もあらねば、なほ戀しく思ふ心の盡はてもせぬに、その白妙の帯を乞べしやは、となり、彦星の帯を解て、織女の取おきたるを、それとりて給はれと、別に臨て、彦星の乞ふるまゝに織女によめるなり

萬世。携手居而。相見鞞。念可過。戀爾有莫國。

爾字、舊本に奈と作るは誤なり、元曆本に従つ、○歌意は、萬世に手を携へ居て相見るとも、思ひ盡べき戀にあらぬことなるを、たゞ一夜のみにて別るゝはくちをし、となり、三卷に、明日香川川余藤不去立霧久念應過孤悲爾不有國、今に似たり

萬世。可照月毛。雲隱。苦物叙。將相登雖念。



歌意は、萬世に永く久しく照べき月なれば、たゞ一夜の賞にあらず、されど其も、しばし雲隠て見えぬは苦しきものぞ、吾等が中もその如く、萬世に永く久しく相見むとは思ども、年にたゞ一夜の逢瀬なれば、別に臨ては、かの月の雲がくれたるを見る如くに、せむ方なく心もくれて、苦しきものぞ、と云ならむ、契沖云、此はいづれの星につきていふともなし

白雲。五百遍隠。雖遠。夜不去將見。妹當者。

夜不去は、ヨヒサラズと訓べし、此下にも、初夜不去、とあり、毎夜の意なり、○歌意は、別れて後は、五百重の雲に隔り隠れて遠くはあれども、戀しく思ふ棚機女のあたりなれば、せめての心やりに、見えずとも夜毎に見やらむ、となり

爲我登。織女之。其屋戸爾。織白布。織豆兼鴨。

屋外は、家のことなり、他處にいへるは、おほくは屋外にて、屋の外なり、このこと既に云り、○織白布は、オレルシロタへと訓べし、○織豆兼鴨は、織は縫の誤なるべし、さらば又ヒテケムカモと訓べし、此下に、足玉母手珠毛由良爾織旗乎公之御衣爾縫將堪可聞、又、古織義之八多乎此暮衣縫而君待吾乎、などあるを、考合へし、○歌意は、吾に服せむが料にと、織女の其屋戸にて織る白布をば、このごろ縫て衣に製りけむか、さてもきかまほしや、となり

君不相。久時。織服。白袴衣。垢附麻豆爾。

歌意は、彦星の君に著せむ料にと、織たるはた物の白布衣の、舊びて垢つくまでに、久しき時より、君にあはずであるよ、と織女のいへる意にや

天漢。梶音聞。孫星與。織女。今夕相霜。

孫星は、彦星なり、和名抄に、爾雅云、子之子爲孫、和名無万古、一名比古、とあるを借るなり、○歌意かくれたるところなし、此土の人のおもひやりてよめるさまなり

秋去者。河霧立。天川。河向居而。戀夜多。

立字、舊本になきは脱たるなり、今は古寫本に従つ、○河向居而は、元曆本には、河而向居と作り、(それによらば、カハニムカヒキと訓べし)なほ舊本に従べし、○歌意は、秋になれば、天河に向ひ居て、戀しく思ふ夜の數ぞ多き、となり、第二句は、たゞ秋の景色をいへるのみなり、後撰集に、秋くれば川ぎりわたる天河かはかみ見つ、こふる日のおほき、とあるは、此歌を少し換たるなり、(略解に、此後撰集の歌によるに、今の歌も、河霧渡とありつらむが、渡字落たるなるべしと云るは、ひがことなり、立渡るといはずして、たゞ霧渡といはむは、古語のさまに非るをや、)

吉哉。雖不直。奴延鳥。浦嘆居。告子鴨。

雖不直は、直に不逢とも意なり、○奴延鳥は、裏敷の枕詞なり、上に見ゆ、○告子鴨は、子は使の童にて、かくと告ゆかむ使もがなあれかしの意なり、(略解に、子鴨は、子にもがもの意にて、



子は、妹をさすといへるは、いみじき誤なり、○歌意は、直に逢ことはかなはずとも、縦やせめては、かくばかり、裏に敷き居ると云ことを、嗚呼往て告む使の童もがなあれかし、となり  
一年遡。七夕耳。相人之。戀毛不遇者。佐宵曾明爾來。

戀毛不遇者（遇字、拾穂本には竭、元曆本には過と作り、）は、上にも云如く、戀も不遇にの意なり、○終句、舊本には、夜深往久毛と作て、一云不盡者佐宵曾明爾來、と註り、今は一云の勝りたるに従つ、○歌意は、一年にたゞ七日の夕のみに相見人の、戀しく思ひ積來し、その思ひの未遇もはてぬに、はや夜ぞ明にける、となり

天漢。安川原。定而。神競者。磨待無。辰年作之。

此歌、説どもあれど、通難し、（略解に、一説を出して云く、而は西字の誤、競は鏡字の誤にて、ヤスノカハラニサダメニシカミノカバミハトグマタナクニと訓て、これは月を神代の鏡に見なして、此鏡は磨ことをまたずして、いつもくもらぬと云なり、と云り、然れども甚しき強解なり、亦その如くにては、七夕歌とせむこともおぼつかなし、）これによりて、今強て按に、神競は、競字、舊本の訓に従て、ツドヒと訓むか、競字は競集る義をめぐらして、ツドヒと訓せたるならむ、つどふは集ることなればなり、さて磨待は禁時の誤にて、第三句以下は、サダマリテカミノツドヒハイムトキナキヲと訓むか、○歌意は、神代より天安河に神の競ひ集り給ふことは、いつと定りて禁さくる時なきものを、かく七夕とのみ定りて、他時にあふことのならぬが恨めし、と云ならむか、

考べし、○庚辰年は、天武天皇白鳳九年なり

〔右㊦㊧㊨。柿本朝臣人麿歌集出。〕

棚機之。五百機立而。織布之。秋去衣。孰取見。

五百機立而は、多くの機を立ての意なり、多くの機を、萬機千機など云類なり、神代紀下に、高皇産靈尊女子栲幡千姫萬幡姫命云々、（上の姫字は、幡の誤ならむ、）と見ゆ、（元可法師集に、織女のいははた立ておるがうへにかさねて猶や衣かさまし、）○秋去衣は、本居氏、秋去は、和布の字の誤にて、ニキタヘコロモならむ、と云り、○歌意は、たなばたつ女の、多くの機を立て、勞きて織たる布の和たへ衣は、彥星ならで孰か取見て服むぞ、と云るなるべし、七卷に、今年去新島守之麻衣肩乃間亂者阿誰取見、とあるは、妻あらねば、孰か取見て補つらむ、と云にて、意は反對なり

年有而。今香將卷。烏玉之。夜霧隱。遠妻手乎。

歌意は、一年有々て戀しく思ひし、遠方にある織女の手を、夜霧隠りに、密々に今相纏て寝らむか、となり、此土の人より、想ひやりていへるなり、一五三四二と句を次第で意得べし

吾待之。秋者來沼。妹與吾。何事在會。紉不解在牟。

在會は、有可と云むが如し、誰可と云べき處を誰會と云と同例なり、○歌意は、吾待々し秋は來りぬるものを、何事の障あればにや、紉解て相宿せずあるらむ、となり



年之戀。今夜盡而。明日從者。如常哉。吾戀居牟。

歌意は、一年中の戀情を今夜盡して、又明日より、來し方の如く、戀しく思ひつゝ居むか、となり

不合者。氣長物乎。天漢。隔又哉。吾戀將居。

氣長は、來經長にて、上にも出、○歌意は、相見ずしてあるは、年月日の長き間なるものを、今夜あひても、心だらひにかたらふことも得せずして、ほどなく別れたらば、又天河を隔に置いて、一年の間戀しく思ひつゝ居むか、となり

戀家口。氣長物乎。可合有。夕谷君之。不來益有良武。

夕谷の下に、何事の障あればにや、といふ意を、假に加へて聞べし、古今集に、久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散らむ、といへるも、何故にやしづ心なく云々、といふ意となると同類なり、例多し、○歌意は、戀しく思ふ事は、年月日の長き間なれば、あふべき今夜は、早く來座べきものなるを、何事の障あればにや、今夜さへも君が早く來座するらむ、となり、上に、戀敷者氣長物乎云々、とあるに似たり、もとは彼と同歌なるを、少し詞の異なるによりて、重出たるなるべし

牽牛與。織女。今夜相。天漢門爾。波立勿謹。

歌意は、彥星とたなばたつ女と、今夜あふなれば、天の河門に、ゆめく浪荒く興て、舟の出入を障ふることなかれ、となり

秋風。吹漂蕩。白雲者。織女之。天津領巾毳。

歌意は、秋風の吹たよはする白雲と見ゆるは、まことの雲にはあらで、織女の天つ領巾にてあらむか、さてもめづらしや、となり

數裳。相不見君矣。天漢。舟出速爲。夜不深間。

君矣は、君なるものをの意なり、○歌意は、たびくあふ事のあらばこそあれ、一年に一度ならでは、あふこともかなはぬ君なるものを、今夜は夜の更ぬ間に、速く天河を舟出して來座せ、となり

秋風之。清夕。天漢。舟榜度。月人壯子。

清夕は、風音のそよくとそよめき立夕と云なるべし、佐夜は、會與と云に同じ、既く云り、○歌意かくれたるところなし、これも月を詠る歌なるが、天漢をよめる故に、まがひてこゝに入しならむ

天漢。霧立度。牽牛之。楫音所聞。夜深往。

歌意は、夜の更行ば、彥星が舟を出して漕往と見えて、その榜楫のはじきに、天河の水が水霧立て、楫音が聞ゆ、となり



君舟。今撈來見之。天漢。霧立度。此川瀨。

歌意は、彦星の君が舟、今漕て此方に來るらし、その故は天、河の此見やる河瀨に霧が立わたるよ、その霧は、君が舟の榜櫂のはじきによりて、水が水霧立たるものと思はるればなり、となり

秋風爾。河浪起。暫。八十舟津。三舟停。

暫は、シマシクハとも、シマラクハともよむべし、○八十舟津は、安之舟津にて、安は安河なるべし、○歌意は、秋風の吹につれて、河浪が高く起ぬるなり、この荒浪を凌ぎて、強て漕行むは危し、安河の舟津に暫御舟をとどめて、浪風の静らむを待賜へ、となり

天漢。川聲清之。牽牛之。秋榜船之。浪蹠香。

川字、元曆本には河と作り、下なるも同じ、○秋榜船は、本居氏、秋は速の誤か、次下に、早榜船之賀伊乃散鴨、とあり、といへり、○歌意は、天河の河音さやく聞ゆるなり、これは牽牛の、急ぎて漕行船に觸て、浪音の動き立て、かくきこゆるならむか、となり

天漢。川門立。吾戀之。君來奈里。叙解待。

來は、キマスと訓べし、座か益などの字の脱たるにもあらむ、又省きて書る處も多ければ、もとの

し君が、今來座が見ゆるなり、さらば紐解て待む、となり、八卷山上憶良、天漢相向立而（一云向河、）吾戀之君來益奈利紐解設奈、右養老八年七月七日、應令作之、とある歌のこゝに重出たるなり、○舊本に、一云天川河向立、と註り、いづれにてもよろし

天漢。川門座而。年月。戀來君。今夜會可母。

歌意は、天河の湊に出居て、年月長く戀しく思來し君に、今夜あへる哉、さてもうれしや、となり  
明日從者。吾玉床乎。打拂。公常不宿。孤可母寐。

玉床は、床を美て云るなり、二卷に、家來而吾家乎見者玉床之外向來妹木枕、とあるに同じ、○打拂は、宿と云にかけて意得べし、不宿と云までにはかゝはず、○歌意は、今夜は吾玉床を打拂ひて相宿したれど、明夜よりは君來座ねば、誰爲にかは、玉床を打拂べきなれば、其まゝにすておきて獨宿をすべきか、さてものこりおほや、となるべし

天原。往射跡。白檀。挽而隱在。月人壯子。

往射跡は、岡部氏は、ユクユクイムトとよみたれど、いかゞ、中山嚴水、往は注の誤にや、さらばサシテヤイルトとよむべし、といへり、○歌意は、弦月を弓に見なして、天原をさして射るとてや、月人男の白眞弓を引て、山端に隠せるならむ、と云るにや、月人男とは、やがて月を云ことゝきこゆめれど、もと月夜見を治る人をいふ稱なれば、弦月を弓に見なし、さてそれを治る人の取て



射るさまにいへるなるべし、かくてこれも、たゞ弦月の山端にかくるゝを、かくよみなせるが、混れて七夕の中に入しにや

此夕。零來雨者。男星之。早榜船之。賀伊乃散鴨。

歌意は、此夕、俄に降來雨と見ゆるは、雨にはあらで、彥星の急て船をはやくこぐとて、その船の榜に欄る、天河の水の散て落來るならむか、さても俄なる雨や、となり、契沖云、續古今集には下旬を、とわたる舟のかいのしづくかと改て、赤人の歌とせり、古今集ならびに伊勢物語に、わがうへにつゆぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづくか、とある、似たる作なり

天漢。八十瀬霧合。男星之。時待船。今榜良之。

八十瀬霧合は、八十と多くの瀬々に、霧立覆へり、と云なり、この八十は、安河の安にはあらず、霧合は、キラヘリなり、○時待船とは、その船出すべき時刻を待船、と云なり、○歌意は、彥星の時待船は、その時を待得て、今漕わたるにてあるらし、其船の榜楫のはじきに、天河の水がみなぎり立て、あの八十と多くある瀬々に、霧立覆へりと見ゆればなり、と云なるべし

風吹而。河浪起。引船丹。度裳來。夜不降間爾。

夜不降間爾は、ヨノフケヌトニともよまるべし、○歌意は、風荒く吹て、河浪高く興ぬれば、船漕

綱手繩を挽せて、その繩をたのみて、難なく渡り來賜へ、と云るなるべし

天河。遠度者。無友。公之舟出者。年爾社候。

歌意は、遠渡のあるならば、なほさもあるべきを、間近き渡にてあれば、たびくあふ事なるべきに、昔より一年に一度ならでは、あふ事のかなはぬさだまりにて、彥星の君が舟出を、一年中遠々にこそまで、となり、此歌後撰集にも六帖にも載て、第二三句、遠き渡りにあらねどもとせり

天河。打橋度。妹之家道。不止通。時不待友。

打橋度は、ウチハシワタセと訓べし、打橋をわたせよ、と云意なり、打橋は轉橋にて、假に渡す橋なり、二卷、四卷、七卷などにも見ゆ、既く二卷に註り、○歌意は、天河に轉橋を渡せよ、さらばその橋をわたりて、秋の時を待すとも、止す棚機女の家道に通ひ行て、常に相見むぞ、となり

月累。吾思妹。會夜者。今之七夕。續巨勢奴鴨。

會夜者は、アヘルヨハとよむべし、○今之七夕とは、今は、又と云に通へり、十七に、伊毛我伊弊爾伊久理能母里乃藤花伊麻許牟春毛都禰加久之見牟、土佐日記に、一歌に事の飽ねば今一、などあるに同じ、之は、その一すぢなることを、おもく思はする助辭なり、七夕は、數多の夜の謂にて、必しも七に限りたることには非ず、七夕と書るによりて、七日の夜の事と思混べからず、此上に、七日四零者七夜不來哉、とあるに同じ、又九卷に、及七日家爾毛不來而、又、吾去者七日不過、十一



に、七日越來、十九に、七世申禰、十三に、久有者今七日許、十七に、等保久安良婆奈奴可乃宇知波須疑米也母、などある皆同じ、又五卷に、麻都良我波奈勢能與騰波、七卷に、明日香川七瀬之不行爾、十三に、河瀬乎七湍渡而、十六に、珠乃七條、又、吾身一爾七重花佐久、などある七も、數の多きをいへるにて同じ、○歌意は、一年の月を重ねて、戀しく思ひし妹に、たま〜あへる今夜の、早明なむ事のくち惜ければ、今又今夜に、七と數多くの夜を繼て、このまま開すにてもなあれかし、となり

年丹装。吾舟榜。天河。風者吹友。浪立勿忌。

年丹装は、一年の間待々て、舟を艤ふ謂なり、廿卷に、奈爾波都爾余會比余會比巨氣布能日夜伊田且麻可良武美流波波奈之爾、又都乃久爾乃宇美能奈枝佐爾布奈餘會比多志涅毛等伎爾阿母我米母我母、此下にも、船装をよめり、○歌意は、一年待々て、艤したる舟を、たま〜今夜出して漕行むとおもふぞ、天河にたとひ風は吹とも、浪荒く起て、ゆめ〜障る事なかれ、となり

天河。浪者立友。吾舟者。率榜出。夜之不深間爾。

欲意かくれたるところなし

直今夜。相有兒等爾。事問母。未爲而。左夜會明二來。

り、○歌意これもかくれなし、逢たる夜のあかず明易きをいへり  
天河。白浪高。吾戀。公之舟出者。今爲下。

歌意これもかくれなし、かい楫にふるゝ浪の音の高きにて、彥星の舟出をしれるさまなり

機。蹋木持往而。天河。打橋度。公之來爲。

蹋木持往而は、フミキモチユキテと訓べし、蹋木は、はたおるとき、尻うちかくる板なり、と契沖云り、和名抄に、辨色立成云、機蹠(万禰岐)蹠踏也、とあり、これも同物か、(但し今万禰岐と稱ものは、機)の上方にありて、一昂一低するさまの、手を以て人を招くことくなるゆゑに云、といへり、然れば蹋木とは別ならむか、○歌意これもかくれなし

天漢。霧立上。棚幡乃。雲衣能。飄袖鳴。

歌意は、見れば天河に霧が立上るよ、あれはまことの霧にはあらで、棚機女の雲衣のひるがへる袖にてもあるか、さてもめづらしや、となり

古。織義之八多乎。此暮。衣縫而。君待吾乎。

古は、既往の時にと云むが如し、○義之を、テシの假字に用ふること、既くいへり、○歌意は、はやくの時に織て置し絹布を、此夕君に服むと衣に縫て、今か今かと君を待吾なるものを、何とて



はやく來座ざるらむ、となり

足玉母。手珠毛由良爾。織旗乎。公之御衣爾。縫將堪可聞。

足玉手珠は、古の婦女のなべての装にて、ことに機織には觸あひて、音のあるを拍子とせしこと、神代紀に、手玉玲瓏織紐之少女是誰之子耶、とあると、今の歌にて、そのさま思ひやるべし、さてその玉を手足の裝飾とせしことは、なほ古事記に、天照大御神云々、亦於左右御手、各纏持八尺勾璫之五百律之美須麻流之珠、而云々、書紀仁德天皇卷、四十年、爰皇后奏言、云々、莫取皇女所賚之足玉手玉、云々、此集三卷に、泊瀬越女我手二纏在玉者云々、十一に、新室蹈靜子之手玉鳴裳、十三に、海部處女等手爾卷流玉毛湯良羅爾云々、など見えたり、頭註、のてたにもゆらにひくいとくるれば人をき(ま敷)たぬよぞ、○由良爾は、古事記に、伊邪那岐命云々、其御頸珠之玉緒母由良邇取由良迦志而云々、また奴那登母々由良爾、とあるを、書紀には、瓊宮瓊々、此云奴儻等母々由羅爾、とあり、(瓊々も玲瓏も、玉聲と字書に見ゆ、玲瓏は上に引り、)又職員令集解に、饒速日命降自天時、天神授瑞寶十種、息津鏡一、部津鏡一、八握劍一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品々物比禮一、教導若有二病所者、合茲十寶、一三三四五六七八九十云而布瑠部、由良由良止布瑠部、如比爲者、死人返生矣、此集十三に、小鈴文由良爾、又同卷に、上に引如く玉毛由良羅爾、などある皆同じ、又古事記袁詔天皇大御歌に、奴且由良久母夜、此集廿卷に、由良久多麻能乎、とよめるも、同じ言の活用たるものなり、(遊仙窟に、鏘々をユラユラとよめり、此字も鏘々と意同じ)さて右の集申なるは、母はみなな言解なるを、古事記と

紀なるとの一の母の詞は、語辭にはあらずて、眞の意なり、眞を轉して、母と云ふとも己考あり、一卷に云り、○御衣は、古事記上卷八千矛神御歌に、久路伎斯詔美遠云々、書紀推古天皇卷に、衣裳をミケシと訓り、此集十四に、伎美我美詔志、伊勢物語に、是や此天の羽衣宜しこそ君が美詔志に奉りけれ、などあり、名義は、本居氏、太刀は佩物なる故に御佩と云、弓は執物なる故に御執と云如く、衣は着物なる故に御着と云なり、著を古言に詔流と云り、と云り、按に、佩を波可之と伸云ときは、佩賜ひと云意、執を等良之と伸云ときは、執賜ひと云意になると同じく、着を詔之と伸云ときは着賜ひと云意になりて、みな敬ひて云詞なり、詔之は、伎と縮るにて知べし、波可之は波伎と縮り、等良之は等利と縮るに同じ、○歌意は、足玉も手玉も瓊々にゆらめかして、勞き織たる絹布を、夫君が御衣に、巧に縫て服せむと思ふに、もし今夜のいそぎに堪ずして、君が來座むまでに得縫竟すあらむか、さてもいかで早く縫竟む、となり

擇月日。逢義之有者。別乃。惜有君者。明日副裳欲得。

擇月日は、七月七日ならでは逢まじければ、月日を擇と云るなり、○別乃、乃は久字の誤なるべし、ワカレマクとよむべし、別るゝ事の云意なり、○歌意は、月日を擇て、たましく逢たる君なれば、別るゝ事の極めて惜くあるに、嗚呼いかで明日までも、此方に留り座てがなあれかし、となり

天漢。渡瀬深彌。泛船而。棹來君之。楫之音所聞。

渡瀬深彌は、渡瀬が深き故に、歩わたり得せずして、船を浮ぶる意のつゞけなるべし、○歌意かく



れたるところなし

天原。振放見者。天漢。霧立渡。公者來良志。

歌意は、天原を振仰て、夫君が來座むを遠く望み待居るに、あの天河に霧の立わたるは、君が漕ます舟の榜楫のはじきに、水がみなぎり立るものと見ゆれば、今は君が來座にてあるらし、となり  
天漢。渡瀬毎。幣奉。情者君乎。幸來座跡。

渡字、舊本になきは脱たるならむ、第二三句ワタリセゴトニヌサマツルとよむべし、(舊本のまゝにて、セゴトニヌサヲタテマツルとよみては、いと拙し)十二に、吾妹子夢見來倭路度瀬別手向吾爲、とあるを相照して、必渡字あるべきをしるべし、故今補つ、(七卷にも、從此川船可行雖在渡瀬別守人有、とあり)○幸來座跡は、彥星の幸くて通ひ來ませと、と云なり、○歌意は、天河の渡瀬毎に、盡に幣帛を獻りて、ねもころに祈り白す情は、他の故にあらず、夫君が平安くて、いづもかはらず、此方に通ひ來ませとてぞ、となり

久方之。天河津爾。舟泛而。君待夜等者。不明毛有寐鹿。

不明毛有寐鹿は、明ずもがなあれかしと希ふなり、既に委いへり、○歌意かくれたるところなし  
天河。足沾漣。君之手毛。未枕者。夜之深去良久。

足沾漣は、十一に、念餘者丹穂鳥足沾來人見鴨、とあり、河を渡りしいたづきを云り、○未枕者は、未まかぬにの意なり、○歌意は、天河を足ぬれつゝ、辛うして勞き渡り來て、君が手をとりて未纏もせぬに、はや夜の更ぬる事となり、君は妹とあらまほし

渡守。船度世乎跡。呼音之。不至者疑。梶之聲不爲。

渡守は、十八長歌に、和多理母理、とあるによりてよむべし、皇極天皇紀、渡子をワタシモリとよめるは、やゝ後の唱へのまゝに、假字付せりと見ゆ、和名抄、涉人云々、日本紀に云、渡子和太之毛利、一云和太利毛利、とあり、○度世乎は、度世叫々と呼聲なり、集中に、叫字をヲの假字に用たるは、其意なり、叫呼也、と字書に見えたり、七卷に、氏河乎船渡呼跡雖喚不所聞有之楫音毛不爲、とあるに同じ、○至は、聲の此より彼へとよくをいふ、古事記に、下照比賣之哭聲、與風響到天云々、藥師寺佛足石讚歌に、美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊多利、此下に、左男牡鹿之妻整登鳴音之將至極、云々などあり、○歌意は、渡守よ船度せ叫々と呼聲の、彼方に至り届きて聞えねばか、楫の音の爲ぬならむ、嗚呼かくまで呼聲の、きこえぬことはあるまじきを、となり

真氣長。河向立。有之袖。今夜卷。跡念之吉沙。

歌意は、月日間長く、天河に向ひ立て、待つゝありし袖を、今夜夫君を待得て、纏れて相宿せむと思ふ心のたのしさ、かぎりなし、となり



天漢。渡湍每。思乍。來之雲知師。逢有久念者。

歌意は、かくあへることを思へば、天河のわたり瀬毎に、嗚呼戀しや戀しやと物念をしつゝ、辛うして渡り來しかひもありけり、となり

人左倍也。見不繼將有。牽牛之。孀喚舟之。近附往乎。

第一二句は、人さへ見繼ずあらむやはの意なり、○歌意は、中山嚴水云、ひこほしの妻迎舟の近づくを、織女はいふもさらなり、よそ人さへ、あからめもせず、見つどかずあらむやは、となり、○舊本、一云見乍有良武、と註り、本文よろし

天漢。瀬乎早鴨。烏珠之。夜者闌爾乍。不合牽牛。

歌意かくれたるところなし、瀬が急きゆゑに渡りかねて、夜のふくるまで、彥星の來座てあはぬならむ、となり

渡守。舟早渡世。一年爾。二遍往來。君爾有勿久爾。

歌意は、一年に二度とかよひきます君にてはなきことなるを、ためらはずに船を急ぐわたせ、渡守よ、となり、(六帖には、二度きます、とせり)

玉葛は、不絶の枕詞なり、○歌意は、幾年経ても、ちぎりの絶はせぬものながら、相宿する事は、たゞ一年に一夜ばかりぞ、となり、後選集に、第三句を、あら玉のとして載たり、古今集に、としごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずぞすくなかりける

戀日者。氣長物乎。今夜谷。令乏應哉。可相物乎。

歌意は、月日間長く戀しく思ひて、稍あふべき今夜を待得たるものを、今夜さへ乏しむべきにあらず、今夜なりとも、心足ひに速く相見む、となり、上に、戀敷者氣長物乎今夜谷 乏卒可哉相可夜谷、とあるに、少か詞の異なるによりて、重出たるなり、今の歌理かなへり、既くいへり

織女之。今夜相奈婆。如常。明日乎阻而。年者將長。

歌意は、織女の今夜逢て別れなば、又明日を隔にして、今來む年の今夜まであふべからねば、一年の月日長く、來し方の如く戀しく思ひつゝ、あらむぞとなり、上に、年之戀今夜盡而云々、とあるに似たり

天漢。棚橋渡。織女之。伊渡左牟爾。棚橋渡。

棚橋渡は、タナハシワタセとよむべし、棚橋は、契冲云、橋をかけたるは棚のごとくなれば、棚橋と云か、○伊渡左牟爾は、伊はそへ言、渡左牟は、渡らむを伸云たるにて、渡り賜はむと云如し、こゝは渡り給はむ料に、といふ意なり、○歌意は、棚機女の渡り給はむ料に、天河に棚橋を渡せ、



となり、この歌は、織女のわたるさまによみなしたりとみの  
天漢。河門八十有。何爾可。君之三船乎。吾待將居。

河門八十有は、上にも、八十瀬とよめり、河門の數多きを云、十三に、近江之海泊八十有、ともあり、○歌意は、天河の湊は、八十と數多くあれば、何の湊に、夫君が御船の泊賜はむもしるべからず、されば何處にてか、御船を待居るべきぞ、となり、七卷に、近江之海泊者八十何爾加君之舟泊草結兼、とあるは、大方似たる歌なり

秋風乃。吹西日從。天漢。河瀬爾出立。待登告許曾。

河瀬爾出立は、河字、舊本には落たり、カハセニデタチとよむべし、○歌意は、秋風の吹始し日より今日まで、天河の河瀬に出立て待て居ると、いかで告よかし、となり、便ある人などに乞よしなり、古今集に、秋風の吹にし日よりひさかたのあまのがはらにたぬ日はなし、似たる歌なり

天漢。去年之渡瀨。有二家里。君將來。道乃不知久。

有二家里は、略解云、有を荒に借たるものとせむはいぶかし、絶の草書より誤て、タエニケリならむ、○歌意は、天河の去年の渡瀨は、絶廢りて處異りたり、されば何の處をわたりて、君が來座む、その道のしられぬ事となり

天漢。端瀬爾白浪。雖高。直渡來。待者若三。

雖高は、タカケドモと訓べし、高けれどもの意なり、○歌意は、天河の瀬毎瀬毎に浪高く起て、わたるに艱難はありつれども、此方にて來座むを待居むは、待遠にて苦しからむとて、その河瀬を歩渡りして來ぬるぞ、となり、これは彦星の妻迎舟を遣て、織女を待に堪がたくて、自渡り來しといへるにや、後撰集に、あまのがはせのしらなみたかけれどたぐわたりきぬまつにくるしみ、として載たり

牽牛之。嬌喚舟之。引綱乃。將絕跡君乎。吾念勿國。

引綱は、綱手なり、和名抄に、唐韵云、牽絞挽船繩也、訓豆奈天、とあり、○吾下、一本に久字あるは衍文か、又は之の誤か、○歌意は、本句は、目にふるゝものもて序としたるにて、いつまでも君とちぎりの絶むと、わが思ひはせぬことなるを、末長くたのもしくおぼし賜へ、と彦星に告るなるべし、十四に、多爾世婆美彌年爾波比多流多麻可豆良多延武能已許呂和我母波奈久爾、とあるに、末句大かた同じ

渡守。舟出爲將出。今夜耳。相見而後者。不相物可毛。

舟出爲將出は、下の出字、異本には去とあり、それも誤にて、來なるべし、フナデシテコムと訓べし、○歌意かくれたるところなし

吾隱有。檝棹無而。渡守。舟將借八方。須臾者有待。



借字、舊本に借と作るは誤なり、今は元曆本、古寫本、拾穂本等に從つ、○歌意は、楫棹をわが隠しおき、れ、船ありてもその益なし、されば渡守も漕べきすべなければ、舟をかすべしやは、借まじきなれば、嗚呼しばらく此方にありて、まち給へ彦星よ、と織女のいふなり、古今集に、

久方のあまのがはらのわたしもりきみわたりなばかぢかくしてよ  
乾坤之。初時從。天漢。射向居而。一年丹。兩遍不遭。妻戀爾。物念人。天漢。安乃川原乃。有通。出乃渡丹。具穂船乃。船裝。眞梶繁拔。旗荒本。葉裳具世丹。秋風乃。吹來夕爾。天川。白浪。落沸。速湍。涉。稚草乃。妻手枕。迹。大船乃。思憑而。榜來等六。其夫乃子我。荒珠乃。年緒長。思來之。戀將盡。七月。七日之夕者。吾毛悲鳥。

射向居而は、此上にも、已向立而、とあり、射はそへ言なり、○物念人は、彦星をさす、○有通は、有有つ、通ふと云意なり、集中に多き詞なり、○出乃渡は、岡部氏、出出は、歳の一宇を誤れりしなり、といへり、トシノワタリとよむべし、上にも年之度とよめり、一年に一度の渡と云意なるべし、○具穂船は、本居氏は、其穂船の誤ならむ、といへり、又按に、具は意の誤にて、ホブネにてあらむか、具意草書相似たり、○船裝は、廿卷にも、都乃久爾乃字美能奈伎爾布奈餘會比多志涅毛等伎爾阿母我米母我母、とあり、上にもいへり、○旗荒本は、木を本に誤りたるにて、ハタス、キなるべし、荒はス、ともよむべければなり、(略解に、荒は荻の誤か、或は籬木の誤ならむ、と云るは、甘心がたし、)○末葉裳具世丹は、末字、舊本になまはたせるべし、七卷に

も、水門葦末葉誰手折、とあるを、合思べし、具は、本居氏の、其の誤ならむと云るぞ宜しき、ウラハモソヨニと訓べし、十二に、布妙之枕毛衣世二歎鶴鴨、新撰萬葉下卷に、夏之夜之松葉牟會與丹吹風者五十人連歎雨之音丹異成、などあり、末葉もそよくとそよめき動して、風の吹よしなり、會與は風の音なり、○稚草乃は、妻の枕詞なり、既くいへり、○妻手枕迹は、(ツマガテマカムトとよまむは、甚拙し、)手は平字の誤なるべし、ツマラマカムトと訓べし、妻は織女をいへり、○大船乃は、思憑の枕詞なり、二卷に出て既く委説り、○其夫乃子は、彦星をさせり、○七月は、布美月と稱こと、岡部氏の考に、穂含月なり、と云る、是はさもあるべし、(凡て月云の名ども、昔よりくさく、説あれど、おほくはあたらす、)○吾毛悲鳥(鳥一本に焉と作り、)は、鳥は、焉と通用たること既く云り、(名和抄裝束部烏帽註に、俗訛鳥爲焉、今按、鳥焉或通、見三文選註玉篇等、)とあり、(星合のそらをおもひやれば、人の心もたゞならず、嗚呼吾さへも憐しや、と云なり

反歌。

狛錦。叙解易之。天人乃。妻問夕叙。吾裳將偲。

狛錦は、高麗錦なり、和名抄に、本朝式云、有暈縹錦高麗錦軟錦兩面錦等之名也、とあり、○叙解易之は、妻も夫も互に紐をとくよしなり、交合さまなり、書紀允恭天皇御歌に、佐瑛羅餓多邇之根能臂毛弘等根舍氣帝阿萬降泥受邇多儂比等用能未、とあり、○天人は、彦星を云、十八に、安萬射可流比奈能夜都故爾安米比度之可久古非須良波伊家流思留事安里、と云る、安米人は、皇都人を云るにて、言は同くして、意異れり、○歌意は、高麗錦の紐を互に解かはして、天人の妻問す



ると云今夜ぞよ、吾も慕ひて天原を見やらむ、となり

彦星之。川瀬渡。左小舟乃。得行而將泊。河津石所念。

左小舟とは、左は眞に通ひて、眞小舟と云が如し、○得行而將泊は、行て泊ることを得むと云意なり、今世には口づかぬこと、ちすれど、これ古の物いひざまなるべし、十一に、面忘太邇毛得爲也登手握而雖打不塞戀之奴、とあるも、得爲也は、爲ることを得むか、と云意なり、十二に、玉勝間安倍島山之暮露旅宿得爲也長此夜乎、とあるも、爲ることを得むやは、と云意なり、(しかるを、この十一なると、十二なるとの得爲也を、エスヤと訓はいかゞなり、爲をスと云ふときは、現在のうへのことになるを、現在のうへに得云々とは、古くもいはざりしこと、おもへばなり、セム、セムと訓ときは、未然らぬことを、兼て云詞となりて、爲ることを得むと云ふことを、エセム、爲ることを得むやはと云ことをエセムヤとは云しとおぼえたればなり)○歌意は、彦星の天の河瀬を漕渡る眞小船の、彼方の湊に行至りて泊ることを得むその河の湊のやうが一すぢにおもはるゝ、となり

天地跡。別之時從。久方乃。天驗常。巨大王。天之河原爾。璞。月累而。妹爾相。時候跡。立待爾。吾衣手爾。秋風之。吹反者。立坐。多土伎乎不知。村肝。心不。知欲比。解衣。思亂而。何時跡。吾待今夜。此川。行瀨長。有欲得鴨。

天。驗常は、上に、久方。天。印等水無河隔而置之神世之恨、とあり、一年に一度ならでは、逢事を得まじき天津勝示と、天漢をその隔に定め置たるよしなり、○巨大王は、巨は定の誤としてサダメテシと本居氏のよめるよろし、○時候跡は、トキサモラフトと訓べし、時節をうかゞひ居とて、と云なり、○吹反者は、フキシカヘレバと訓べし、幾度もく袖に風の吹來るを云、(袖を吹翻すと云にはあらず)○立坐は、夕チテキルと訓べし、○村肝は、心の枕詞なり 既く出、○不欲は、不  
知欲比とありしが、知比の字を落せる事しるし、さらば、イサヨヒと訓べし、(略解に、欲は歡の誤にて、不歡はサブシクならむと云れど、うけがたし、集中に、サブシキと云に、不樂不恰などは多く書たれども、不歡と書るは見えざればなり、そのうへこゝは、サブシクと云べき處にあらず)七卷に、山末爾不知夜經月乎、とあるを、考合べし、但しこれは字訓のみなるを、欲比と字音を雜へ用ひむ事、いかゞと思ふ人もあるべけれど、同卷に、不知與歷ともあれば、少しも妨なし、さてこゝは、三卷赤人歌に、雲居奈須心射左欲比、とあるに同じく、心の浮れて定らず、散亂れたるをいへり、○解衣は、これも枕詞なり、解たる衣はみだるゝものなれば、かくつゞけたり、○行長有得鴨は、既く契沖もうたがひおきたる如く、脱字誤字あるべきにつきて、(岡部氏考に、行行良良爾有不得鴨、とありて、ユクラユクラニアリカテムカモなりけむを、古の重字の書例をしらぬもの、さかしらにゝゝを誤とし、良爾を長となせしにや、こはなほ考べきことぞ、と云り、此説も甘心がたし、)まづ中山嚴水が、行の下に、瀬字ありしが脱たるにやと云る、これは實にさもあるべきことなり、(但し其説に、得の下に、而之の二字などありしを、又落せるにて、行瀨長有得而之鴨と訓べきか、といへるは心ゆかず、)さてよく思ひめぐらすに、得の上に、欲字の脱たるなるべし、さらば欲得は、コソと希ふ處に多く用ひたれば、ユクセノナガクアリコセヌカモと訓べきことな



り、故瀨欲の二字を姑補入つるなり

反歌。

妹爾相。時片待跡。久方乃。天之漢原爾。月叙經來。

歌意は、妹にあふ時を、ひとへに、片かけ待とて、天河原に多くの月をぞ經にける、となり

詠花。

竿志鹿之。心相念。秋芽子之。鐘禮零丹。落僧惜毛。

竿志鹿之、心相念とは、契沖、芽子をば鹿の妻と云ば、相思と云、と云り、今按に、鹿は芽子の啖比に鳴、芽子は鹿の鳴比に啖て、互に心を通はしたる如く見ゆる故に、相念と云るなるべし、○秋芽子之は、秋芽子がと云如し、○落僧惜毛は、僧は信字の誤寫なるべし、チラクシチシモと訓べし、（本居氏の、僧は漢の誤にて、チラクならむと云るは用がたし、又略解に、僧は俱の誤なりと云るは、非なり、俱字を假字に用たること、集中に例なきをや、）○歌意は、鹿の心を通はして、入立むつれて鳴、この面白き芽子の花が、霽雨に降みだされて散行事の、嗚呼さても一すぢに惜や、となり、契沖云、しぐれは大むね九月中旬より、十月中旬におよぼほどにふるを云り、芽子は八月中旬まではあることまれなるに、しぐれにちるとよめるは、和名抄に、霽雨小雨也、之久禮、かくの如くあれば、しぐれは小雨の名なるを、いつとなく、秋冬のあはひに、ふりみふらすみさだめなきを、わきて名付たるを、人麻呂の比は猶ひろくて、小雨をしぐれと云るなるべし

夕去。野邊秋芽子。末若。露枯。金待難。

露枯は、契沖、ツユニカレツ、と訓べし、やはらかなる葉に、あまりにいたく露のおきて、置からすなり、と云り、本居氏の、枯は沾の誤にて、ツユニカレツ、なるべし、といへるは強解なり、○金待難は、芽子は秋の最中かけて盛に開なれば、己さかりの最中を待がたし、と云る意なるべし、しかする時は、此歌、秋の初つ方によめるものとすべし、又夏の末によめるものとせば、たゞひろく秋を云りと見て難なし、さて芽子は秋の景物なる故に、夏よみたりとしても、秋部に入たること、何ぞ疑はむ、篇次に拘るには及ばず、○歌意は、夕になれば、まだうら若くやはらかなる芽子の葉に、あまりにいたく露の置いて、置枯しつゝ、己が盛に開比の最中を、待得難し、となり

〔右二首。柿本朝臣人麿之詩集出。〕

眞葛原。名引秋風。吹毎。阿太乃大野之。芽子花散。

名引秋風は、令靡秋風なり、ナビカスを切ればナビクとなれば、反切にも叶へり、廿卷、家持卿歌に、秋風乃須惠布伎奈婢久波疑能花登毛爾加射左受安比加和加禮牟、この奈婢久も、令靡の意なり、合考べし、○阿太乃大野は、和名抄に、大和國宇知郡阿陀、陀讀可濁讀とある地の野なり、大はその廣く寛なるを云、大海、オホウミなどの大に同じ、○歌意かくれたるところなし、（金葉集に、眞葛延阿太の大野の白露を吹なはらひそ秋の初風、）

鴈鳴之。來喧牟日及。見乍將有。此芽子原爾。雨勿零根。



歌意は、鴈が來鳴ば、鴈に心をうつしてなぐさむべきなれど、其鴈の來鳴ぬ間は、ひとへに見愛つ  
つあらむ、と思ふこの芽子原に、雨ふりて花をちらすことなけれ、となり、此下にも、秋芽子者於鴈  
不相常言有者香音乎聞而者花爾散去流、と見ゆ、大むね芽子は、七月の末より咲て、八月下旬ばか  
りにうつろひはて、鴈は速くは八月中旬すぎ、遅くは九月になりて渡るものなれば、かくよめり、  
故八卷に、九月之其始鴈乃云々、とあり

奥山爾。往云男鹿之。初夜不去。妻問芽子之。散久惜裳。

第一二句は、鹿はもはら奥山に住ものなればいへるなり、古今集にも、奥山に紅葉ふみ分なく鹿の  
とよめり、○初夜不去は、毎夜にの意なり、夕不去、朝不去などの例なり、○歌意は、奥山に常に  
住と云なる鹿の出來て、夜毎夜毎に入立むつれて妻問する、この面白き芽子の散失むことの、さて  
も惜や、となり

白露乃。置卷惜。秋芽子乎。折耳折而。置哉枯。

折耳折而は、而は、六字、或は無字などの誤なるべし、ヲリノミヲラムと訓べし、○置哉枯は、其  
まゝに置て枯しめむやは枯しめじ、と云こゝろなり、十八橋の歌に、於根且可良之美、とあるも、木  
に置て令枯といへるなり、考合べし、○歌意は、かく露のあまりに多く置ては、その露にいたみ  
て枯むと思へば、惜き故に、其まゝに置て枯しめじ、いで折のみ折て、心たらひに愛むぞ、となり、  
(略解に、舊本の誤字あることを考すして、露にしをれ枯るを惜て、折て置て枯さむと云なり、と云

るはいかゞ、折置て枯さむは、何の興やはある、且置の辭も相應はず、上に引十八の歌をも考合す  
べし、)

秋田莉。借廬之宿。爾穗經及。咲有秋芽子。雖見不飽香聞。

借廬は、假に造りたる廬なり、和名抄云、毛詩云、農人作廬以便田事、和名伊保、○歌意は、秋田  
を刈爲に造りたる借廬の宿の、花の色に光り映くまでさきたる芽子の、見れども見れどもあきたら  
ず、さてもうるはしき哉、となり、後撰集に、本句、秋田のかりほの庵のにはふまで、として載たり

吾衣。摺有者不在。高松之。野邊行之香者。芽子之摺類曾。

行之者は、契沖が、之の下に、香可等の字落たるかと云るは、さもあるべし、(略解に、之は去の誤  
なりと云るは、従がたし、三卷にも、焼津邊吾去鹿齒とある例をも思ふべし、)○芽子之摺類曾とは、  
行觸に觸て、衣の芽子花の色に、摺染れるぞ、となり、○歌意は、ことさらに設けて、吾衣を摺る  
にはあらず、高圓の野邊を行しかば、その芽子の花に行觸て、自然に染れるぞ、となり、下にも、  
事更爾衣者不摺佳人部爲咲野之芽子爾丹穗日而將居、催馬樂に、衣かへせむや、わがきぬは野原し  
のはら萩が花ずり、などあり、(新古今集に、頼政、かり衣われとはすらじ露しげき野原のはぎの花  
にまかせて、今の歌によれるに似たり、)

此暮。秋風吹奴。白露爾。荒爭芽子之。明日將咲見。



荒争とは、花のやゝ開出むとする間に、露の重く置亂れて、咲せじとするに似たれば云るなり、中山嚴水は、白露のうるはしきに、劣らじと争ふ意なるべし、と云り、さても通ゆ。此下に、白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞、ともあり、○歌意は、此夕秋風のすゞしく吹ぬるなり、露の重く置亂れて、咲せじとするに、争ひて咲むとするその芽子の、明日は咲出むを見むぞとなり、又は露のうるはしき色に、劣らじと争ふはぎの花の、と云にもあるべし

秋風。冷成奴。馬並而。去來於野行奈。芽子花見爾。

歌意かくれたるところなし

朝杲。朝露負。咲雖云。暮陰社。咲益家禮。

朝杲は、(杲字の音をカホに借る例、既にこれかれあり)木樅にて、品物解に委云り、さてこの花、朝にもはら開よしもて、朝貌と名付たるは、例の一方によれるものにして、夕にも多くさくものなればかくよめり、(夫木集に、樺花、朝貌の名にこそ立れ夕露に咲そふ花の色もありけり)〔頭註、源氏物語朝貌、かれたる花どもの中に、朝貌のこれかれにほひまつはれて、あるかなきかにさきて、匂ひもことにかはれるを折せ給ひて、奉れ賜ふ云、これは牽牛花也、此以前にも、牽牛をあさ貌と云ることあらむ〕○歌意は、朝貌は必朝露を負て開物の如く、人はいへど、暮陰にこそ、朝よりはまさりて咲なれ、となり

春去者。霞隱。不所見有師。秋芽子咲。折而將挿頭。

歌意かくれたるところなし

沙額田乃。能邊乃秋芽子。時有者。今盛有。折而將挿頭。

沙額田は、上に、狭野方と書り、同處なるべし、○時有者は、トキシアレバとよむべし、シはその時を得たることを、一すぢにおもく思はせる助辭なり、○歌意は、沙額田の野の芽子の、いつか咲むと待遠にのみ思ひしに、時至りたれば、今盛に咲たり、いざ折てかざしにせむ、となり

事更爾。衣者不摺。佳人部爲。咲野之芽子爾。丹穗日而將居。

佳人部爲は、枕詞なり、咲とつゞきたり、○咲野は、大和の佐紀の野なり、既に委云り、○歌意は、殊更に設けて、衣はすらじ、佐紀野の芽子原に入交りて、花の色に衣の染まで、染りて居むぞ、となり

秋風者。急之吹來。芽子花。落卷惜三。競竟。

急之吹來は、之を、古寫本には々と作れど、それも非なり、久字の誤ならむ、と云説に従べし、ハヤクフキキヌと訓べし、荒く吹來りたるよしなり、○競竟は、(舊訓に、オホロオホロニとあるは、いふにたらず)甚疑はし、契沖、試にアラソヒハテツとよみたれど、いかゞなり、岡部氏は、競立見ならむといへるに、姑從てよみつ、猶考べし、○歌意は、秋風は疾く荒て吹來ぬるなり、かくては芽子の花も散ぬべきなれば、その散ぬべき事の惜さに、風にあらそひて、立出て花を見愛む、と



にや

我屋前之。芽子之若末長。秋風之。吹南時爾。將開跡思手。

若末長は、契沖の、ウレナガシとよめるぞ、甚宜しき、○手字、舊本に乎と作るはわろし、今は元曆本に従つ、○歌意は、秋風は、程無興べきを、其吹なむ時に至らば、急く咲むと思ひて、吾やどの芽子の末長く立のびて、其豫をしたるよ、となり

人皆者。芽子乎秋云。縦吾等者。乎花之末乎。秋跡者將言。

歌意は、契沖云、皆人は秋萩とて、秋の草の中には萩をのみ云り、よしさもあらばあれ、我はをばなを、秋の草には第一の物と云む、となり、これは心ありて、よく秋の草をしれる人のよめるなり、清少納言に、秋の草とて、さまざまかきて後にいはく、これにすゝきをいれぬ、いとあやしと人いふめり、秋の野のおしなべたるをかしさは、すゝきにこそあれ、ほさきのすはうにいとこきが、朝ぎりにぬれて打なびきたるは、さばかりの物やはある、秋のはてぞいとみどころなき、いろくみだれ咲たりし花の、かたもなく散たるのみ、冬の末までかしらいとしろく、おほどれたる名をもしらで、むかし思ひ出がほになびきて、かひろきたてる、人にこそ、いみじうにためれ、よそふることありて、それこそあはれともおもふべけれ、とかける、このころを、此歌は一首にこめてみゆるにや

玉梓。公之使乃。手折來有。此秋芽子者。雖見不飽鹿裳。

來有は、來家留の約りたるなり、(キケの切ケとなる)○歌意は、君が使の折て持來ける、この芽子の花は、その折し使さへも、そのうるはしき人の使ぞと思へば、いよくなつかしく、見れども見れどもあきたらず、さてもめでたく思はるゝ哉、となり

吾屋前爾。開有秋芽子。常有者。我待人爾。令見猿物乎。

常有者は、ツネシアラバとよみて、常にあらばと云意となるなり、シは、その常ならぬものゝ常にあらばと一すぢに思ふ心を、おもくきかせたる助辭なり、○猿字、舊本猿に誤れり、拾穂本に従つ、○歌意かくれたるところなし

手寸十名相。殖之名知久。出見者。屋前之早芽子。咲爾家類香聞。

手寸十名相、これに兩説あるべし、まづ一、舊本の從にて釋べし、手寸は、集中に、髮多久、また七卷に、通女等之織機上乎眞櫛用搔上栲島、などある多久と同言なるべし、さてこの多久てふ言の意を、熟考るに、總束るやうのことを云言にて、即今世に物を束ね寄るを、多久須禰流と云と同じかるべし、(然るを略解に、手寸はたぐりを約めたるにて、たぐり備へなり、と云るは、いかにぞや、たぐる意の多具は、集中にも、駒多具などある多具にて、繩緒などの類にいふことにこそあれ、芽子などにいふべきにあらず、そのうへ多久、多具は、清濁の差別さへあるをも思ふべし、)十名相は、十は具足へるを云言なり、佛足石碑讚歌に、彌蘇知阿麻利布多都乃加多知夜蘇久佐等會太禮留比等乃布彌志阿止止己呂、とあるは、釋迦を備足れる人と云るにて、この會は、今の十に同じ、名相は、



占をするを占奈比、賂をするを賂奈比、商を商奈比、荷を荷奈比、咒を咒奈比、仇を仇奈比、賂を賭奈比、など云ごとく、活かぬ言を、活かすときに添る辭なり、かゝれば、芽子を、間繁く總寄て殖しを云りと聞えたり、其二には、仙覺が註釋を見るに、この歌第一二句、古點にはテモスマニウエシモシルクとあり、いさゝか相叶はず、いまよみかへて、タキノナヘウエシナシルクとす、と云り、此に依て思ば、仙覺より前は、テモスマニと訓來れりしを、字に就て訓を改めしなり、夫木集に、てもすまにうゑしもしるくいでてみればやどの初はぎ咲にけるかも、とあるにても、仙覺より前は、かくよめるを知べし、テモスマニとする時は、理やすらかにて、甚宜し、八卷に、戲奴之爲吾手母須麻爾春野爾拔流芽花會御食而肥座、同卷に、手母須麻爾殖之芽子爾也還者雖見不飽情將盡、などあるにも、よく相照てきこゆるなり、然れども舊本の字のまゝにては、しか訓べきやうなく、多く誤字あらむとおもはるゝにつきて、このこと門人南部嚴男にかたりしに、嚴男、さらば手文寸麻仁なりけむを、例の打とけ書たるに、文麻仁を十名相に誤寫し、さて轉倒して、舊本の如くなるなるべし、寸は、集中多くは訓を取てキの假字に用たれど、十一に、小簾之寸鷄吉と見えなれば、スの假字に用ひたりとせむに、妨あらじ、と云り、猶考べし、(字を助けて説ときは、前に云るぞ然るべき、詞のかたにて云ときは、後の説ぞけにしかるべき)見む人用捨すべし、○殖之名知久は、名は毛字の誤なり、ウエシモシルクと訓べし、右に云如く、古き點にはしかありしと見ゆ、元曆本にもかくよめり、○早芽子は、ワサハギと訓べし、殊に先立て咲芽子を云り、早田、早穂、早飯、早瓜など云類なるべし、(但し古事記傳に、早田、早穂など云は、早稻田、早稻穂の意にて、和佐と云

穠早熟禾、和世阿和とも見えたるをや、されば和佐は稻に限ることなく、凡て先立て開實るを、和佐某と云り、とおぼゆ、但和世と云は稻にのみ限り、和佐と云は、某と限れることなく、ひろく何にもいふ稱ならむとおぼえたり、さるは、和世は、和世氏の約りたる言と思はるればなり、さてその氏は、稻を云ことなるべし、袖中抄に、早田の稻を和世と云、中田の稻を那可氏と云、晚田の稻を於久氏と云よし見えて、今俗もさる事なり、されば、その那可氏、於久氏の氏は、稻を云こととおぼゆれば、和世は和世氏の約れる言ならむとはいへるなり、しからば字鏡の和世阿和は、世は、佐の誤か、又通、云るにもあらむ、しかるを古事記傳に、和世を、和佐と云は、下に言をつらねて云ときの例にて、稻を伊那某と云が如し、と云る、理はさることながら、なほうけがたし、〔頭註、内膳式に、〕○歌意は、心を盡し勞きて、殖育し、かひもありて、庭に立出て見れば、世に殊に先立て、芽子の咲にける哉、さても見事の花や、となり

吾屋外爾。殖生有。秋芽子乎。誰標刺。吾爾不知所。

歌意は、はじめより、わが勞きて、吾庭に殖育したる芽子なれば、其花も吾物にして見べき事なるに、吾に知せず、ひそかに標結て、自物に領て見るは、そも誰なるぞ、さはあるまじき事なるを、と咎めたるなり、これは譬喩なるべし、女を芽子によそへたり

手取者。袖并丹覆。美人部師。此白露爾。散卷惜。

袖并丹覆は、袖まで染ふと云意なり、色に染をにほふといへる例、集中に多し、覆字は、オホフの



訓を略て借り、○歌意は、手に折取て見れば、袖までその色に染るほど、盛に咲たるこの女郎花の、露にしをれて散失む事の、さても惜や、となり

白露爾。荒爭金手。咲芽子。散惜兼。雨莫零根。

歌意は、露は花を咲せむとし、花はいなまだ咲じとあらそふに、つひにあらそひ得ずして咲たる、この見事なる芽子の散失なば、いかに惜からむ、雨ふりて、その花をちらすことなけれ、いでその雨よ、となり

媿嬌等。行相乃速稻乎。苜時。成來下。芽子花咲。

媿嬌等は、ヲトメドモと訓べし、行合の早稻を、媿嬌等が苜時にと云意なり、此一句をば、第三句の上へうつしてきくべし、これをヲトメラニと訓て、女に行逢ふ意のつゞけとするはわろし、○行相乃速稻は、契沖、立田山に行相の坂と云所あり、そこにある田の稻なり、と顯昭いへり、第九に、いゆきあひの坂のふもとに云々、とよめる處なり、むろのはやわせ、ふるの早田、かつしかわせなど云たぐひに、顯昭は心得られたるなるべし、或説には、行合のわせと云は、夏田をうる時、苗のたらざれば、おなじ苗にあらぬを植つぐなり、これを行合の稻と云と民間に申す、とかけり、民間にさへ、さやうにいひならはしたらば、これを正説とすべきにや、と云り、(行相を、地名とする説もすて難し、然名におへる地あればなり、又三代實錄に、貞觀十二年三月五日、對馬島云々行相、とある行相も、地名によれる神名か、略解に、夏と秋と行あふころ、みる早稻を、行相の

せとはいふなり、といへるは推度なり、○歌意は、この芽子の花の咲るにて思へば、行合の早稻を、をとめ等が刈收時に、今はなりにけるらし、さても見事にさける花ぞ、となり、(現存六帖に、秋はぎはうつろひぬらしをとめこが行あひのわせもまだからぬ間に、これは今の歌によりてよめり、)

朝霧之。棚引小野之。芽子花。今哉散濫。未厭爾。

歌意は、朝霧のたなびきて、風景の面白き野の芽子花は、毎日々々に行て見てさへ、いまだあきたらず、なつかしくおもふことなるを、今は盛も過たれば、今日この頃は、散失らむか、いざ今日も、はやくゆきて見む、となり

戀之久者。形見爾爲與登。吾背子我。殖之秋芽子。花咲爾家里。

戀之久者は、戀しく思はゞといふ意なり、此は夫の遠き處にあるか、或は旅に行などしたるに、遣居たる女のよめるならむ、○歌意は、吾遠く別れ行によりて、吾を戀しくおもはゞ、其時に吾形見に見よとて、吾夫が殖置し芽子の花咲にけり、その形見の花を見るにも、なぐさみはせず、いよいよ戀しき心がまさるよ、となり

秋芽子。戀不盡跡。雖念。思惠也安多良思。又將相八方。

本句は、芽子に、さのみ心を盡すまじとはおもへども、と云なり、賞愛のあまりに、雨風などに付ても、さまざまに心をなやますが、戀を盡すなり、○思惠也安多良思とは、この思惠也は、縦やと



云に近し、假に縦す意の辭なり、さて此詞は、第二句の上にもぐらして、意得べし、縦や、戀を不盡と云意なり、安多良思は、惜悵などの字を用たる、其意なり、古事記に、天照大御神者、登賀米受而告云々、離三田之阿埋溝者、地矣阿多良斯登許會我那勢之命、爲此云々、また大雀天皇御歌に、阿多良須賀波良、書紀雄略天皇卷歌に、阿拖羅陀俱彌羅夜、又、阿拖羅斯根偉羅能陀俱彌云々、阿拖羅須彌羅、など見えたり、○又將相八方は、又盛に相むやは、得あはじの意なり、○歌意は、芽子に縦や、さのみ心を盡してなやますまじ、とは思へども、又もこの盛に得あはじとおもへば、止事を得ずして、なほ心をつくして惜まるゝぞ、となり

秋風者。日異吹奴。高圓之。野邊之秋芽子。散卷惜裳。

歌意は、秋風は日毎々々にたのます吹ぬるなり、かくては花もちらずには得堪まじきなれば、かの高圓の野の芽子の散失む事の、さても惜や、となり

大夫之。心者無而。秋芽子之。戀耳八方。奈積而有南。

無而は、舊訓にナシニとあるぞ宜しき、(ナクテとよみてはいたくおとれり)而は、此上にも、水底左閉而、また然叙手而在、などニの假字に用ひたり、○奈積而有南は、苦惱て將有と云なり、○歌意は、何にも障りあへぬ、したゝかななる大丈夫と思ひしかひもなく、女々しくおめくと、秋芽子の戀にのみ苦み惱みて、丈夫の心もなしにありなむやは、あゝさはあるまじきことなるを、となり

曾毛の毛は、軽く添たる助辭なり、○歌意は、吾待々し秋は既に來りぬ、されどもなほあかぬことは、吾待々て戀しく思ひし芽子の花ぞ、未咲ざりける、となり

欲見。吾待戀之。秋芽子者。枝毛思美三荷。花開二家里。

思美三荷は、常に繁うにといふが如し、○歌意かくれたるところなし

春日野之。芽子落者。朝東。風爾副而。此間爾落來根。

朝東風は、アサゴチノカゼとよみて、そのチは則風なり、さて東風の風とつゞくるは、荒風の風ともいふと同例なり、○歌意は、春日野の芽子の、もし風に堪ずて散失なむことは、一すぢに惜くはあれど、すべきやうなし、よしや散失なば、他所に行ことなけれ、その散ぬる花も、必朝東風と共に、吾方に散きたれよ、となり

秋芽子者。於鴈不相常。言有者香。音乎聞而者。花爾散去流。

歌意は、契沖云、たとへば人の中をたがふとき、又もあはじといひたることを、たがへぬやうに、秋萩は、鴈にあはじといひければにや、鴈の聲するころは、かならず花のちる、となり、花にちりぬるは、あだ花と云ことあれば、あだにちりぬると云こゝろなり、上にも、かりがねのきなむ日まで見つゝあらむこのはぎはらに雨なふりそね、鴈は八月の末より、大むね渡り來れば、萩のうつろひはつるころなり、○舊本第三句の下に、一云言有香聞、と註せり、いづれにてもしからむ







秋田。吾蒹婆可能。過去者。鴈之喧所聞。冬方設而。

蒹婆可カは、今の俗言にていはゞ、蒹カ場合といはむが如し、此言、四卷、十六卷等にも出、既く委註り、○歌意は、秋の田を吾蒹時節の過往ぬれば、早冬の節を片方に設けて、初鴈の音が聞ゆるよ、となり

葦邊在。荻之葉左夜藝。秋風之。吹來苗丹。鴈鳴渡。

荻フは、品物解に云、○左夜藝は、音のさやくとさやめきさわぐを云り、此言も既く委註り、小竹之葉者三山毛清爾亂友の、清の言を活かしたるなり、○舊本に、一云秋風爾鴈音所聞今四來霜、とあるは、本末と、のはず、○歌意かくれたるところなし

押照。難波穿江之。葦邊者。鴈宿有疑。霜乃零爾。

押照オシは、難波の枕詞なり、既く出つ、○宿有疑はネタルラシと訓べし、○零爾は、フルニの伸りたる詞なり、(ラクの切ル)かく伸云は、その物の緩なるを云なり、緩なるは、その物の絶間なく、引つゞきて物するよしにて、こゝは、絶間なくふることなるを、と云むが如し、○歌意は、夜々絶間なく、引つゞきて霜の降ことなるを、なほ堪忍びて、難波堀江の葦原には、鴈が宿たるらし、いかに寒くわびしからむ、となり

歌意は、秋風の吹につれて、山飛越て、行鴈の聲が、次第に遠くなり行よ、今は雲居のあなたに、雲隠ゆくなりし、となり

朝爾往。鴈之鳴音者。吾如。物念可毛。聲之悲。

朝アサは、ツトとよみて早朝を云、言意いかならむ、いまだ考得ず、(初時の略ぞといふは従がたし、)○歌意は、早朝になきつゝ行鴈は、吾と同じ様に物思をすればにや、あの如く聲の身にしみて悲しくあるらむ、さてもあはれなる聲ぞ、となり

多頭我鳴之。今朝鳴奈倍爾。鴈鳴者。何處指香。雲隱良武。

武字、舊本には哉に誤れり、今は元曆本、拾穂本等に従つ、○歌意かくれたるところなし

野干玉之。夜度鴈者。鬱。幾夜乎歷而鹿。己名乎告。

鬱オホは、覺束なくと云意にて、心あてのなくと云程のことなり、○己名乎告は、鴈の鳴聲は、かりかりと聞ゆれば云り、後撰集に、行かへりこゝもかしこも旅なれやくる秋ごにかりとなく、又、秋ごにくれど歸ればたのまぬを聲にたてつゝかりとのみなく、又、ひたすらにわが思はなくにおのれさへかりととのみ啼わたるらむ、これらみな、なく聲のしか聞ゆるによりてよめるなり、○歌意は、夜中に飛渡りて鳴なる鴈は、何の心あてありての事にもあるまじきに、幾夜をか經つゝ、かりと己が名を名告ることぞ、と問かくるよしなり



璞。年之經往者。阿跡念登。夜渡吾乎。問人哉誰。

阿跡思は、誘ひ率ふを云言にて、集中に多し、○歌意は、これは鴈になりて、答のこゝろをよめるなり、年の経ゆけば、親しかりしも疎くなりなど、ありしにかはるならひなれば、それがうれたさに、心がはりのせざらむため、己が友を誘ひ率ふとて、夜中に己が名を告つゝ、飛わたる吾なるものを、不審げに問給ふ其人は誰なるぞ、となり、(この二首の歌、古來の註者等、説さまあしくて甚まぎらはし)

詠二鹿鳴。

比日之。秋朝開爾。霧隱。妻呼雄鹿之。音之亮左。

亮左は、契沖が、サヤケサとよめるぞ宜しき、仁徳天皇紀に、寥亮をサヤカナリとよめり、○歌意かくれたるところなし

左男牡鹿之。妻整登。鳴音之。將至極。靡芽子原。

妻整は、本居氏の、呼立る意なり、と云るが如し、二卷に、御軍士乎安騰毛比賜、齊流鼓之音者、三卷に、網引爲跡網子調、流海人之呼聲、十九に、物乃布能八十友之雄乎撫賜等登能倍賜、廿卷に、安之我知流難波能美津爾、大船爾末加伊之自奴伎、安佐奈藝爾可故等登能倍、由布思保爾可遷比伎乎里、安騰母比日許藝、由久伎美波、又、奈爾波都爾、手字氣須惠、夜蘇加奴伎可古登、能倍

且、安佐婢良伎和波己藝、津奴等、などあり、(略解に、整は將求二字の誤にて、ツマツマカムトなるべし、といへるは、わろし)○將至極は、聲の聞え届かむ地の限、と云なり、佛足石碑歌に、美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊多利、云々、○靡芽子原は、妻よぶ聲をさへぎることなく、行いたらしめむ爲に、靡けよ、と云るなり、七卷に、妹所等我通路細竹爲酢寸我、通、靡細竹原、○歌意は、牡鹿の妻を呼立るとて、鳴音の至り届かむ限は、其聲を遮り隔ることなく、芽子原も靡き伏てあれよ、となり

於君戀。裏觸居者。敷野之。秋芽子凌。左牡鹿鳴裳。

於君戀は、君を戀と云むが如し、○裏觸は、恍惚として、憂ひうなだるゝよしなり、○敷野は、和名抄に、大和國城上(之岐之加美)郡、城下(之岐乃之毛)郡、とある處の野なるべし、(本居氏は、もしは、此はアシキ野なるが、アの字の脱たるにもあるべし、蘆城こゝかしこに見えて、八卷には、蘆城野とよみて、芽子をよめり、といへり)○歌意は、君を戀しく思ひて、恍惚と憂ひうなだれをれば、折しも敷野の秋はぎを、踏分凌ぎて、牡鹿の鳴よ、さてもあはれなる聲や、彼も妻を呼立るにてあるらし、あの聲をきけば、いよゝ物思が益るぞ、となり、六帖に、いもにわがうら戀をればあしびきの山下とよみ鹿ぞなくなる

鴈來。芽子者散跡。左小牡鹿之。鳴成音毛。裏觸丹來。

芽子者散跡は、はぎの花は、已く散ぬとて、となり、跡は等底の意の跡なり、○歌意は、時過て已



く鴈は來りぬ、はぎの花は散失ぬとて、鹿の鳴音も、恍惚と物思はしげに、憂ひうなだれてあるよ、となり、芽子は鹿の妻問よし云て、故に親しむよしなれば、鴈の來て芽子の花散ぬとて、鹿の鳴音もうらぶるゝ、と云るなり、鴈にことに用はなけれども、時候のうつるを云むために云るのみなり  
秋芽子之。戀裳不盡者。左小鹿之。聲伊續伊繼。戀許曾益焉。

戀裳不盡者は、芽子の散て、未ほども經ざれば、その花を戀しく思ふ心も、未盡終ぬにと云意なり、この戀は、上に、大夫之心者無而秋芽子之戀耳八方、とあるに同じく、芽子を戀慕ふよしなり、終句の戀は、世人の妻戀にて別なり、不盡者は、盡ぬにの意にて、上にあまた出たり、○聲伊續伊繼は、芽子の散に、鹿の聲の繼て鳴なり、伊は二ながらそへ言なり、(略解に、下の伊は衍文かと云れど、さにはあらじ、伊のそへ言をおきて、八言に云る例多し、又朝ナ朝ナを、アサナサナと云例なり、と云るはたがへり、伊はそへ言、朝ナをサナと云は、連便によりて本言をはぶけるにこそあれ、)○歌意は、秋芽子のちりてほどもへねば、その芽子を戀しく思ふ心も、未盡はてぬに、鹿の聲がつぎて聞ゆる故に、妻戀しく思ふ心が催されて、常もある物思ひこそいよくまさるなれ、はぎの花を戀しく思ふ心の未盡終ぬに、又重々に如此ある事の、さてもくるしや、となり

山近。家哉可居。左小牡鹿乃。音乎聞乍。宿不勝鳴。

歌意は、鹿の鳴音を聞つゝ、感を催されて、終夜寐入むとすれど、得寐入ぬ哉、さてもくるしや、されば、山近きわたりに、家居して住べき事かは、いなや、此後山近き處に住むは爲じ、となり、古

今集に、山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなく音に目をさましつゝ、思合すべし  
山邊爾。射去薩雄者。雖大有。山爾文野爾文。沙小牡鹿鳴母。  
射は、そへ言なり、○歌意は、山邊に入立て、窺ふ獵人の多くあれば、密び隠れて、音も出さずしであるべきことなるに、然とも知ぬなるべし、山の方にも野の方にも、おびたゞしく鹿の鳴よ、さてもあはれの事や、彼等はほどもなく、獵人に獲らるべきに、となり

足日木笑。山從來世波。左小鹿之。妻呼音。聞益物乎。

來世波は、來りせばと云が如し、○鹿の上、元曆本には牡字あり、○歌意は、山の方に廻りて、此處に通る來りせば、鹿の鳴音を聞てあらましもものを、人の語るを聞ば、彼山にておもしろく鹿の鳴しと云を、その山を經らずして來しことの、今更に悔し、となり

山邊庭。薩雄乃爾良比。恐跡。小牡鹿鳴成。妻乃眼乎欲焉。

山邊庭は、庭とは、他の地に對へて云詞なり、山邊には然れども、他地は然らずとの意をもたせたるなり、○爾良比は、うかゞふことなり、○歌意は、山邊には獵人の入立て、窺ふことのおそろしければ、其を恐れ逃隠れてあるべきことなれど、猶妻の戀しく思はるゝに、堪かねて鹿の鳴なり、彼等はほどもなく、獵人に獲られなむといとほし、あはれ他の地にて鳴ば、然はあるまじきを、となり

秋芽子之。散去見。爵三。妻戀爲良思。棹牡鹿鳴母。



鬱三は、契沖、鬱は、鹿のこゝろの鬱陶して、むすほほれふさがるなり、といへり、此は心のむすほほれさぶくしき故に、○歌意は、己が妻になすらへし、はぎの花の散失ぬるを惜みて、心のむ鹿の鳴よ、さてもあはれの聲や、となり

山遠。京爾之有者。狹小牡鹿之。妻呼音者。乏毛有香。

京爾之有者とは、京は、本居氏、ミサトと訓べし、ミヤコといふは、廣くわたれる名なれども、其中に、皇大宮に關らで、たゞ京の内のこと云にはミサトと云り、十六に、京兆爾出而將訴、これも京兆をミヤコと訓るはわろし、和名抄に、左右京職、美佐止豆加佐、と見ゆ、書紀にも、京をミサトと訓る所あり、孝徳天皇紀に、凡京、每坊置長、などあるを以て、ミヤコといふとのけぢめをしるべし、といへり、之は助辭にて、そのさだかにしかりとする意のとき、爾之とつゞくるなり、○歌意は、鹿の聲の聞まほしく思へど、山の方に遠き京内にてあるなれば、鹿の聲は、めづらしく少なく乏しくもある哉、山の方に行て、鹿の鳴聲を聞たらば、いかばかりか秋の感を催さむ、となり

秋芽子之。散過去者。左小牡鹿者。和備鳴將爲名。不見者乏見。

不見者乏見（下の見字、舊本には焉と作り、活字本に鳥とあるは、鳥の誤なるべし、今は一本に従つ、）は、乏しき故に見見者、と云意なるべし、○歌意は、今こそあれ、ほどなく散失べきに、もしはぎの花の散失たらば、いかに戀しく思ふとも、その花の残り少に乏しくあるべき故に、その花を見て、親るべきよしのなければ、わびしく思ひて、鹿は忙鳴せむなあ、と歎息きたるなり

秋芽子之。咲有野邊者。左小牡鹿會。露乎別乍。孀問四家類。

歌意かくれたるところなし  
奈何牡鹿之。和備鳴爲成。蓋毛。秋野之芽子也。繁將落。

歌意は、なそも牡鹿の、わびしげにわび鳴をすることぞ、もしや秋野の芽子の繁くちるによりて、それを惜み歎て鳴ならむ、となり、初に疑ひて、後にそのあるやうを、推度りたるなり

秋芽子之。開有野邊。左牡鹿者。落卷惜見。鳴去物乎。

歌意は、はぎの咲てある野邊に出て、その花の散失なむ事の惜さに、鹿の鳴ぬるものを、このおもしろき野の景色を愛に、いかでわが思ふ人の來座ざりけむ、となり

足日本乃。山之跡陰爾。鳴鹿之。聲聞爲八方。山田守醉兒。

跡陰は、八卷刀理宣令歌にも見えて、既く其處に云り、○聞爲八方は、聞哉方の伸りたるにて、聞賜ふ哉と云むが如し、方は歎息辭なり、○守醉兒は、守子の伸りたるにて、守賜ふ兒といはむがごとし、○歌意は、假慮に居て、秋の山田を守り賜ふ其人よ、いざ物申さむ、今其山のたを陰に來て、



鳴鹿の聲を聞賜ふ哉、嗚呼さても、あはれなる聲にてありしを、となり

詠 蟬

暮影。來鳴日晚之。幾許。毎日聞跡。不足音可聞。

暮影は、夕陽のかけらふほどをいふ、○歌意かくれたるところなし

詠 蟋蟀

秋風之。寒吹奈倍。吾屋前之。淺茅之本爾。蟋蟀鳴毛。

歌意かくれなし

影草乃。生有屋外之。暮陰爾。鳴蟋蟀者。雖聞不足可聞。

影草は、山の陰、石の陰などに生たるをいふなるべし、○歌意これもかくれなし

庭草爾。村雨落而。蟋蟀之。鳴音聞者。秋付爾家里。

庭草は、草名にはあらず、庭に生たるくさをいふ、○歌意これも、かくれなし、(六帖に、庭草に村雨ふりて日ぐらしの啼聲聞ば秋は來にけり、とて載たり)

詠 蝦

吉野乃。石本不遑。鳴河津。諾文鳴來。河平。靜。

歌意は、吉野川の石本を立はなれずして、頻りに鳴、蝦は、この川のすぐれて淨き故に、げにもそのやうに鳴なるは、ことわりにてありけり、となり

神名火之。山下動。去水丹。川津鳴成。秋登將云鳥屋。

神名火は、集中に、高市郡にも、平群郡にもよめり、此は何郡にや、但し山下動去水、と云るは、神名火河にて、即八卷に、河津鳴甘南備河、とよめると、同處なるべし、其は一説に、平群郡にありとも云り、○歌意は、神名火山の、とよるとよると鳴ひゞくまで流るゝ水に、音をあはせて、しきりに蝦がなくなり、秋の來りしと云ことを、人に告知せむとてにや、然なくならし、となり、蝦は秋もはら鳴故に、かくよめり

草枕。客爾物念。吾聞者。夕片設而。鳴川津可聞。

夕片設は、夕をかたへに設るをいふ、集中に多き詞なり、○歌意は、旅にありて、家路戀しく思はるゝに、何ぞ慰む事もがたと吾立聞ば、なぐさみは爲すして、いよく物思はしく、夕をかたへに設て、しきりに鳴蝦哉、さてもあはれの催さるゝ聲ぞ、となり

瀬呼速見。落當知足。白浪爾。川津鳴奈里。朝夕每。

歌意は、流るゝ瀬の急きが故に、河中の磐に逆卷水の、落て激りたる白浪に聲あはせて、朝夕となく蝦鳴なり、となり



上瀬爾。河津妻呼。暮去者。衣手寒三。妻將枕跡香。

歌意は、蝦を人のうへに准へて、暮になれば衣手の寒さに、妻を娶むとてか、此川の上瀬に、蝦の妻を呼てなくならむ、といへるなり

詠鳥。

妹手乎。取石池之。浪間從。鳥音異鳴。秋過良之。

妹手乎は、枕詞なり、手を取とつゞけたり、○取石池は、續紀に、聖武天皇云々、行還至和泉國取石頓宮とあり、これなるべし、姓氏錄に、取石造、和泉國諸蕃の下に出たり、契沖、和泉國和泉郡にまかりける道に、池の堤を道にてすぎ侍る所ありき、其池の名を、人の登呂須の池となむ申侍りし、と云り、○浪間從は、浪間にと云が如し、從は爾に通ふ、○鳥音異鳴は、鳥が音を異に鳴なり、○歌意は、取石池の浪間に來居て鳴鳥の、音を鳴異たるは、秋過て寒くなれる故ならし、となり

秋野之。草花我末。鳴百舌鳥。音聞濫香。片間吾妹。

草花を、ヲバナとよむこと、既に委論へり、○百舌鳥、舊本に舌百鳥と作るは、さかさまになれるなるべし、○片間は、片侍の誤ならむ、と本居氏云り、○歌意は、この面白き秋野の、尾花が末に居て鳴、百舌鳥の音を聞らむか、吾偏りてひとへに侍居る吾妹や、となり

詠露。

冷芽子丹。置白露。朝朝。珠斗曾見流。置白露。

冷は、義を以て秋と云に書り、十一にも冷風とあり、○歌意かくれたるところなし

暮立之。雨落毎。春日野之。尾花之上乃。白露所念。

暮立之雨は、暮方に打そゞぎふるを云ば、暮に起と云意にて、かくいふならむ、さて古はこゝの如く、暮立之雨とのみ云て、後世の如く、たゞに暮立とばかり云て、雨のことゝすることはなかりしか、はた古よりさることありしか、集中には、暮立をよめる歌、たゞ此一首のみなれば、きはめてはしりがたし、○雨落毎の下に、舊本、一云打零者、と註り、いづれにてもしかるべし、○歌意は、いとゞ露おきまさりて、春日野の尾花が上のけはひ、いかに見所あらむと、夕起の雨のふるごとくに、おしはかりおもはるゝとなり、此歌十六に重出で、今一首ありて、左に註して、右詞二首、小鯛王宴居之日、取琴登時、必先吟詠此歌也、其小鯛王者、更名置始、多久美、斯人也、と見えたり、此王の作と云にはあらで、古歌を吟られしなるべし、さてそこには、舊本註の如第二句を雨打零者とあり、又上を末といへり、(六帖にも、第二句を雨打ふれば、第四句は、尾花が上の、として載たり、)

秋芽子之。枝毛十尾丹。露霜置。寒毛時者。成爾家類可聞。



十尾は、多和和と云に同じ、既に委云り、○歌意は、はぎの枝も、たをくくとたわむばかりに、露霜の繁く置て、嗚呼、さても、寒く冷やかなる時になりける哉、となり

白露與。秋芽子者。戀亂。別事難。吾情可聞。

戀亂は、戀とは、賞愛しむ意なり、亂とは、彼にも此にも心のかゝりて、一方ならず賞愛まるゝにより、いへり、○歌意は、契沖云、戀亂とは、をとをむなの中の戀に、心のみだるゝごときを云にあらず、露と萩とは、いづれかまさると問む人に、露もおもしろく萩もをかしければ、左右に心ひかれて、いづれをいかにともいひがたく侍る、とこたふるやうによめるなり

吾屋戸之。麻花押塵。置露爾。手觸吾妹兒。落卷毛將見。

手觸は、手を觸よの意なり、○歌意は、吾妹兒よ、吾庭の尾花を見に來座して、其花に手をだに觸てよ、さらば押塵かして置露の、はらくとちらむさまをなりとも見べきに、となり

白露乎。取者可消。去來子等。露爾爭而。芽子之遊將爲。

露爾爭而は、露の落むに、争ひ先だちての意なり、○芽子之遊は、芽子の咲たる野に出て、あそぶを云、芳萱宴など云が如し、○歌意は、露はおもしろけれども、其を玉などの如く手に取ば、やがて消失ぬべし、いざゞ子等よ、露のちらむに争ひ先だちて、はぎの遊をせむ、となり、契沖云、此歌は、古今集に、萩の露玉にぬかむとればけぬよしむ人は枝ながらみよ、と云歌の心なり

秋田莉。借廬乎作。吾居者。衣手寒。露置爾家留。

露下會字、舊本には落たり、新古今集にも、此歌を載て、つゆぞおきにける、とあり、○歌意かくれたるところなし、秋田守賤が借廬のわびしきさま、まことにあはれなり、後撰集に、天智天皇御製、秋の田のかりほのいほのとまをあらみわがころもてはつゆにぬれつゝ、(天智天皇の御製とするは、ひがこといふもさらなり)とあるは、今の歌を唱へ換たるか

日來之。秋風寒。芽子之花。令散白露。置爾來下。

歌意かくれたるところなし

秋田莉。若手搖奈利。白露者。置穗田無跡。告爾來良思。

若手搖奈利、(若字、拾穂本には苦と作り、)契沖、若字は苦なるべし、和名抄云、爾雅註云、苦(和名度萬)編菅茅以覆屋也、とあり、と云り、本居氏は、衣手淫奈利の誤なるべし、といへり、けにも苦としても苦手といはむこといかなり、○歌意は、契沖、田をかるると、いほりを作たる、その戸口に苦をたれて風などをふせぐを、苦手と云るなるべし、うごくとは、風にふれてうごくを、田をみなかりはてつれば、わがおくべき所なし、と露が告に來たるやうにいひなせり、露の深き時は、苦よりしづくの落る音などのするをも、うごくとは云べし、曾丹集に、いづこへによなく露のおけとてかいなばを人のいそぎかるらむ、これは今の歌をふみてよめりとみゆ、と云り、さらば秋



田を刈料の、廬の苦手揺なりと云意なるべし、衣手淫奈利の誤とする時は、理さだかなるか、吾秋田を刈衣手が沾ぬなり、しか田を刈盡しては、吾置べき穂田なしと、吾に告に来ぬらし、といふなり、○舊本に、一云告爾來良思母、とあり、告に来けるらしもの約れるなるべし

詠山

春者毛要。夏者緑丹。紅之。綵色爾所見。秋山可聞。

綵色爾所見は、マダラニミユルとよむべきか、綵は字書に、五綵備也、とも、繪繪、とも見ゆ、七卷に、不時斑衣服欲香、同卷に、今造斑衣服而就、又十四に、萬太良夫須麻、などあり、又七卷に、綵色衣、十二に、紫綵衣之、などあるをも、マダラと訓むに妨なし、さてこゝは、紅葉の青葉まじりに見ゆるをよめるなり、○歌意は、春は芽の萌出、夏は緑に繁榮て、いつも見處あるが中にも、やゝ紅に色づきわたりて、まだ青葉なるが中に雜り、斑に見ゆるは、ことにすぐれておもしろき秋山哉、となるべし、此歌、まづ春夏のおもしろかりけることをいひて、さて秋の紅葉を賞てよめり、九卷に、山代久世乃鷺坂自神代春者張乍秋者散來、六卷に、如是爲乍遊飲與草木尙春者生管秋者落去、拾遺集に、春はもえ秋はこがるゝかまど山霞も霧も煙とぞ見る、皆似たる所ある故に引つ

萬葉集古義十卷之下

詠三黃葉

妻隱。矢野神山。露霜爾。爾寶比始。散卷惜。

妻隱は、枕詞なり、○矢野神山は、和名抄に、伊豫國喜多郡矢野、とある、そこか、又同抄に出雲國神門郡八野、備後國甲努郡矢野、播磨國赤穂郡八野、なども見ゆ、この内にもあるべし、俊賴朝臣歌に、つまかくす矢野の山なるかへの木のつれなき戀にわれもとしへぬ、とあるも、この神山と同處ならむ、(つまごもるといふべきを、つまかくすとよまれたるは、今の歌を、もとひがよみしたるによられたるものなり、)○爾寶比は、色に染りたるを云、次歌に、染始、また下に、應染毛など書るを、思合べし、○歌意は、矢野神山の、露霜の色に染られて紅葉したり、さてもおもしろや、あのおもしろき木葉の、ほどなく散失なむと思ふ事の、いかにも惜や、となり

朝露爾。染始。秋山爾。鐘禮莫零。在渡金。

染始は、ニホヒソメタルと訓べし、(ソメハジメタルと訓るは、甚わろし、)○鐘字、元曆本には鐘と作り、○在渡金は、在渡るがためにの意なり、在渡とは、有々渡にて、秋のみにあらず、冬までもちらすあるをいふ、○歌意かくれたるところなし、黄葉は、霖雨によく散ものなれば、零ことなかれと禁めたるなり



〔右二首。柿本朝臣人麿之詩集出。〕

九月乃。鐘禮乃雨丹。沾通。春日之山者。色付丹來。

鐘字、元曆本には鐘と作り、○沾通は、山裏まで徹りて、沾るを云、○歌意かくれなし

雁鳴之。寒朝開之。露有之。春日山乎。令黃物者。

令黃物者は、モミタスモノハと訓るよろし、(元曆本には、ニホハスモノハとよめり、)後撰集にも、

雁鳴て寒き朝の露ならし龍田の山を毛美多須毛能波、とてあげたり、モミタスは、モミチサスの切りたるなり、(チサの切夕)十五に、毛母布禰乃波都流對馬能安佐治山志具禮能安米爾毛美多比爾家里、と自ら黄葉したるを云り、毛美多比は、毛美知と約れり、(タヒの切チ)○歌意は、春日山の木葉を、もみちさするものは、雁音の寒く鳴てわたる、朝開の露のしわざにてあるならし、となり

比日之。曉露丹。吾屋前之。芽子乃下葉者。色付爾家里。

歌意かくれたるところなし

雁鳴者。今者來鳴沼。吾待之。黄葉早繼。待者辛苦母。

鳴字、元曆本には音とかけり、○黄葉早繼は、雁の來鳴につぎて、早く黄葉せよの意なり、○歌意は、今は其時節に正しく至りて、雁音は既に來鳴ぬるなり、吾待々し黄葉は、その雁に繼て早く色

付よ、待ば待遠にて、甚苦くおもはるゝなり、さても早くもみちせよかし、となり

秋山乎。謹人懸勿。忘西。其黄葉乃。所思君。

歌意は、秋の山の景を、ゆめく言葉に云出して、われにきかすな人よ、その秋の山を云出せば、黄葉をこひしく思ふ心の、やうく忘られたるが、又おどろかされて、戀しく思ふにたへぬことなるをといふにて、黄葉の賞を甚しく云るなるべし、まことに忘れたるにはあらねども、けさう人などを、程へてしばし思ひのうすらぐと、同じこゝろばえにいへるなるべし

大坂乎。吾越來者。二上爾。黄葉流。志具禮零乍。

大坂は、大和國葛上郡に有、和名抄に見ゆ、神名帳には、葛下郡大坂山口神社、とあり、(本居氏云、葛上葛下と郡の異なるは、塚近ければぞ、別には非ず)此地の事、古事記、書紀に、往々出たり、○黄葉流は、黄葉の散をいへり、ちりながらふるなどもよめり、此言意は既に委いへり、豎横にわたりて云言なり、水に流と云は横なり、雨雪などの零を流と云は豎なり、今の流は豎なり、○歌意かくれたるところなし、見るやうなり

秋去者。置白露爾。吾門乃。淺茅河浦葉。色付爾家里。

歌意かくれなし

妹之袖。卷來乃山之。朝露爾。仁寶布黄葉之。散卷惜裳。



妹之袖は、枕詞なり、袖を纏とかゝれり、○卷來乃山は、本居氏は、來乃は、牟久の誤なるべし、と云り、(余がいとわかゝりしほど、冠辭考の説を破りて、來乃は牟九の誤にて、マキムクヤマのなるべしといへりしに、後に略解を見れば、本居氏説と符合へり、)或は卷六來とありしを、字を誤り轉倒たるにもあるべし、いづれにしても、大和の纏向山なり、○歌意は、朝露の色に染りて、うるはしき纏向山の黄葉の、ほどなく散失なむ事の、さても惜や、となり

黄葉之。丹穂日者繁。然鞞。妻梨木乎。手折可佐寒。

妻梨は、一種あるにはあらで、妻の無てふ意に云かけたるのみにて、松を、君松、孀松など云る類にて、たゞ梨を妻梨といへるなり、○歌意は、さまざまの木にうるはしき色のみちはしげけれども、わきて梨の木の黄色のすぐれたるを、折てかささむ、となり、梨黄葉は、十九、十月之具禮能常可云々、の歌の左に、右一首少納言大伴宿禰家持、當時曠梨黄葉、作此詞也、とあり

露霜乃。寒夕之。秋風丹。黄葉爾來毛。妻梨之木者。

乃字、舊本聞とあるは誤、今は拾穂本、古寫一本等に従つ、○歌意は、秋風の寒き夕の露霜の色に染りて、梨の木はもみちしにけり、さてもうるはしや、となり

吾門之。淺茅色就。吉魚張能。浪柴乃野之。黄葉散良新。

に、猪飼山、在城上郡吉隱村上方、其野曰浪芝野、とあり、○歌意は、吾家の門の淺茅が色づくよ、これにておもへば、吉名張の浪柴の野の黄葉が、今はちり飛ならし、となり、下に、八田乃野之淺茅色付有乳山峯之沫雪寒零良之、歌の趣よく似たり、又此下の歌、考合へし

鴈之鳴乎。聞鶴奈倍爾。高松之。野上之草曾。色付爾家留。

歌、意かくれたるところなし

吾背兒我。白細衣。往觸者。應染毛。黄變山可聞。

歌、意は、吾夫子が白布衣の、往觸に觸あたりなば、早その色に、わざとそむるとなけれど、染りぬべくも、もみちたる山哉、さてく見事なるけしきぞ、となり

秋風之。日異吹者。水莖能。岡之木葉毛。色付爾家里。

日異は、日に來經にて、日に日に、日毎になどいはむが如し、○水莖能は、枕詞なり、○岡は、いづくにもあれ、たゞ山の岡にて、名所にあらざるか、本居氏は、前後みな大和の地名をよめる歌の中なれば、高市郡飛鳥の岡を、今も岡と云、岡寺といふもあれば、此處ならむか、といへり、○歌、意かくれたるところなし

鴈鳴乃。來鳴之共。韓衣。裁田之山者。黄始有。



釋衣は枕詞なり、○歌意かくれなし

鴈之鳴。聲聞苗荷。明日從者。借香能山者。黃始南。

歌意かくれなし

四具禮能雨。無間之零者。眞木葉毛。爭不勝而。色付爾家里。

眞木は、集中の例みな檜なり、既に委註り、さて檜杉などは、黄色するものにはあらざれども、霰雨霜などの甚くふるときは、中に色の變るもあれば、よめるなるべし、(契沖が、この眞木は、唯木のことをいへりとせるは用ふべからず)○歌意は、霰雨の、時なく間なくしけく零ば、眞木の常葉木はいかなる事にあふとも、いな色は變らじと争へど、争ひ勝得ずして、やゝ色づきにけり、となり

灼然。四具禮乃雨者。零勿國。大城山者。色付爾家里。

灼然は、いとく、白く分明に、誰が目にも其としらるゝをいふ言なり、(毛詩に、王公伊濯)○大城山は、元曆本、古寫本等に註して、謂大城者、在筑前國御笠郡之大野山頂、號曰大城者也、とあり、拾穂本にも同じさまに註せり、○歌意は、いとく、白く分明に、誰が目にも其としらるゝばかり、つよくしぐれの雨はふらぬものを、はや大城山は色付にけり、となり、古今集秋下に、神無月しぐれもいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり、思合べし

風吹者。黃葉散乍。少雲。吾松原。清在莫國。

少雲(少字、舊本には小と作り、今は元曆本に従ふ)は、十五に、多婢等伊倍婆許等爾會夜須伎須久奈久毛云々、十八に、可久之天母安比見流毛能乎須久奈久母云々、などあり、○吾松原は、本居氏、吾は君の誤なるべし、と云り、君を待といひつゞけたるのみにて、たゞ松原なり、○歌意は、風の吹につれて、よそのもみちをも、こゝにふきよせなどして、松原の少し不淨といふにてはなく、そこらくきよからぬことなるを、といへるなり

物念。隱座而。今日見者。春日山者。色就爾家里。

隱座而は、たれこめて春のゆくへもしらぬまに、などいへる意なり、○歌意かくれたるところなし

九月。白露負而。足日木乃。山之將黃變。見幕下吉。

歌意は、九月の白露を負持て、その露に染りて、山の木葉の色づかむを見む事の、一寸ぢにおもしろからむとなり

妹許跡。馬鞍置而。射駒山。擊越來者。紅葉散筒。

第二二句は、序にて、馬に鞍置てのりて、妹が許へ行といふ意につゞけたり、○射駒山は、大和國



平群郡、河内國河内郡に跨距れる大山なり、十二にも、二十にも見えたり、○擊越來者は、のれる馬に鞭打て、越來ればといふなり、○歌意は、射駒山を馬にて越來れば、紅葉の散飛つゝ、さてもおもしろや、となり

黄葉爲。時爾成良之。月人。楓枝乃。色付見者。

月人は、月人壯子とも多くいひたれば、たゞ月を、月人とも云べきことぞと、人皆心得をるめれど、おぼつかなし、今按に、これは月内とありけむを、内字の口の畫の滅て、人となれるにやあらむ、されば、ツキヌチノとよむべし、四卷にも見えたり、○歌意は、古今集に、久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ、とよめるに同じく、秋のたけゆくまゝに、月光のてりまさるを、黄葉に見なして云るならむ、月内桂枝は、和名抄に、兼名苑云、月中有河、河水上有桂樹、高五百丈、とあるからごとなり

里異。霜者置良之。高松。野山司之。色付見者。

里異は、本居氏、里は、且の誤にて、アサニケニなるべし、と云り、信にさもあるべし、○高松は、すなはち高圓なり、松は訓轉の借字なり、○野山司は、野の司、山の司の意なるべし、○高松高土を云り、四卷に、岸司、十七、二十に、野司とよめり、○歌意は、高圓の野の司も、山の司も、残りなく色づくを見れば、朝ごと日ごとに、霜はふるならし、となり

秋芽子乃。下葉赤。荒玉乃。月之歷去者。風疾鴨。

歌意は、秋立て月日の歴ぬれば、風が甚く寒さに、露霜のつゞきて降ばにや、はぎの下葉のもみちしぬらむ、さてもふけゆく秋のけしきや、となり

眞十鏡。見名淵山者。今日鴨。白露置而。黄葉將散。

眞十鏡は、枕詞なり、鏡を見とかゝれり、○見名淵山は、大和の南淵山なり、○今日鴨は、今日哉にて、二の母は、歎を含めたる助辭なり、此詞集中に多し、○歌意かくれたるところなし、(夫木集に、くもれとや影見る花のますかゞみ南淵山にちる櫻哉、)

吾屋戸之。浅茅色付。吉魚張之。夏身之上爾。四具禮零疑。

夏身之上とは、夏身は、吉隠の内にある地名なるべし、上は、其地の邊をいふことなり、○疑は、ラシと訓べし、(略解に、カモとよめるは甚非なり、)○歌意は、吾庭の浅茅が色づくよ、これにて見れば、吉名張の夏身の地に、しぐれのさかりに降にてあるらし、となり、此上に、吉名張能浪柴乃野之、とよめる歌によく似たり

鴈鳴之。寒鳴従。水莖之。岡乃葛葉者。色付爾來。







しきぞ、となり

古郷之。始黄葉乎。手折以而。今日曾吾來。不見人之爲。

手折以而（而字、元曆本、拾穂本等にはなし、）は、タヲリモチテと訓べし、○吾來は、アガコシとも、アガケルとも訓べし、○歌意は、見ね人に見すべき爲に、故郷の始黄葉を折て、わざく今日ぞ吾來し、となり

君之家乃。黄葉早。落之者。四具禮乃雨爾。所沾良之母。

第二三句、舊本に、之黄葉早者落、とあるは、いたくみだれたるものなり、今は異本に従つ、○歌意は、君家の黄葉の、兼て思ひしよりもはやく散失にしは、しぐれの雨に沾て、いたみそこなひしゆゑならし、さても惜や、となり

一年。二遍不行。秋山乎。情爾不飽。過之鶴鴨。

二遍不行は、我二度秋山に行ぬ、と云にはあらず、一年に二度秋の經行ぬを云り、二度來らぬ秋と云ほどの意なり、四卷に、穴蟬乃代也毛二行、七卷に、世間者信二代者不往有之過妹爾不相念者、九卷詠仙人形歌に、常之倍爾夏冬往哉、云々、など見えたる行も、今の歌の行に同じ、考合べし、○過之鶴鴨は、あかずして過しつること哉、と歎息たるなり、○歌意は、一年に二度來る秋

る事哉、嗚呼さてもくやしや、となり

詠ニ水田。

和名抄に、漢語抄云、水田、古奈太田填也、

足曳之。山田佃子。不秀友。繩谷延與。守登知金。

歌意は、山田を作る人よ、穗に出たらばいふまでもなし、よしまだ穗に出ずとも、守人ありと知て、猪鹿などの恐てよりこざるがために、繩をなりともはへよ、と云るか、七卷に譬喩歌、石上振之早田乎雖不秀、繩谷延與守乍將居、とあると、大かた同じければ、今のも譬喩歌か

左小牡鹿之。妻喚山之。岳邊在。早田者不茹。霜者雖零。

歌意は、早田は、大かた七月末にかかるものなるを、鹿の其稻葉の蔭をたよりかくれて、妻問するがあらはなる故に、よし時過て霜はふるとも、かれがために刈でおかばやと云るなり、實に稻を刈ずして、おくべきにあらざれども、鹿の妻問をあはれむ情の切なるより、ふと思ふまゝを打出て云るのみなり、○此歌、新古今集には、妻問山、また霜はおくともとあらためて、人麻呂の歌とす、（六帖には、妻まつ山の、と改めたり、）

我門爾。禁田乎見者。沙穗内之。秋芽子爲酢寸。所念鴨。



歌意は、吾家の門にて、禁田のけしきを見れば、佐保の内の、はぎや芒のさかりなるさまの、おもひやらるゝ哉、となり、田を守る頃は、芽子も芒もさかりなれば、おもひやりてよめるなり

詠河。

暮不去。河蝦鳴成。三和河之。清瀬音乎。聞師吉毛。

歌意は、夕毎に蝦の鳴なる三輪河の瀬の音の、清きを聞事の、さても一すぢにおもしろや、となり

詠月。

天海。月船浮。桂梶。懸而撈所見。月人壯子。

歌意は、大空のみどりにひろきを海になぞらへ、月を船に見たて、月中の桂を楫に見なし、さてその楫を貫懸て、月人壯子と云人の、漕行よしにいへるなり、七卷に、天海丹雲浪立月船星之林丹撈隱所見、懷風藻、文武天皇御製月詩に、月舟移霧渚、楓楫泛霞濱、楚辭九歌にも、桂權兮蘭槳、とあり

此夜等者。沙夜深去良之。鴈鳴乃。所聞空從。月立度。

歌意は、鴈音の聞ゆる空に、月の立登りて經わたるを見れば、此夜はいたく深ぬらし、となり、九卷に、佐宵中等夜女、深去良斯鴈音所聞空月渡見、とあり

歌意かくれたるところなし、此は酒宴などの興に依て、芽子をかざせる人のあるを見て、よめるなるべし

無心。秋月夜之。物念跡。寐不所宿。照乍本名。

月夜之は、月がと云ごとし、○歌意は、物思をするとして、寐入れぬ夜なるを、心なき月のむざくと照つゝ、いよく感催さしめて、思をまさしむるよ、となり、此歌、三四一二五と句を次第で聞べし

不念爾。四具禮乃雨者。零有跡。天雲霽而。月夜清鳥。

霽字、元曆本には晴と作り、○鳥字、拾穂本には焉と作り、○歌意は、しぐれの雨のふりたれば、空が心よくはるゝ事は、よもあらじとおもひしに、思はずも、天雲清く晴去て、今夜の月光さやけし、となり、契沖、天雲霽而とは、時雨によりて、中々に雲の皆はれつくすなり、諺に云、雨ふりて土かたまるなり、といへり、其意もあるべきか、此歌、二二三四五と句を次第で聞べし

芽子之花。開乃乎再入緒。見代跡可聞。月夜之清。戀益良國。

開乃乎再入は、再は鳥の誤なり、と云り、春山のさきのををりなどもよめり、○歌意は、芽子の花のわよくとしげくさかりに咲たるを、夜さへ見よとてか、月の清くてらむ、嗚呼吾は、中々に物戀しく思ふ心のまさることなるに、然とも知ずして、いよくあはれを催さしむるよ、となり



白路乎。玉作有。九月。在明之月夜。雖見不飽可聞。

歌意かくれたるところなし、見るやうなり

詠風。

戀乍裳。稻葉搔別。家居者。乏不有。秋之暮風。

歌意は、秋は來ぬれど、猶殘暑のたへがたさに、稻葉かきわけて、風を戀しく思ひつゝ、田ぶせにをれば、乏しからず、夕風の吹來るぞ、となり、(六帖に、戀つゝも稻葉かき分家居せばともしくもあらじ秋の夕風、とあるは、いさゝかわろし、)

芽子花。咲有野邊。日晚之乃。鳴奈流共。秋風吹。

歌意かくれたるところなし

秋山之。木葉文未。赤者。今旦吹風者。霜毛置應久。

未赤者は、イマダモミチネバと訓べし、未もみちぬにの意なり、○今旦、舊本には今日と作り、今は元曆本、拾穂本等に從、○霜毛置應久は、霜も置く冷なり、と云意を含めたり、(略解に、久は之の誤なるべし、といへるは非ず、)○歌意かくれなし

本居氏云、芳は、茸字を寫しひがめたるなり、これは松茸をよめるなり、といへり、拾遺集物名にも松茸あり、夫木集に、松が根の茸かり行ば紅葉を袖にこぎいるゝ山おろしの風

高松之。此峯迫爾。笠立而。盈盛有。秋香乃吉者。

峯迫爾は、峯も迫きまでにの意なり、○笠立而は、和名抄にも、爾雅註云、菌有木菌、土菌、石菌、和名皆多介云々、狀如人著笠者也、とみえて、まことに松茸は、笠によく似たるものにて、香もことにふかきものなり、○歌意かくれなし

詠雨。

一日。千重敷布。我戀。妹當。爲暮零禮見。

零禮見は、略解に、禮は所の誤にて、フルミユなるべし、といへり、○歌意は、たゞ一日の間にも、千重しく〜に戀しく思へども、人目をはかりて、行て共に居ることも協はぬ、その妹が家のあたりに霽雨のふるが見ゆ、いかに妹がわびしくさぶ〜しくて、獨はいと堪がたくやあるらむ、とおもひやらるゝなり

〔右一首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

秋田苺。客乃廬入爾。四具禮零。我袖沾。千人無二。

客乃廬入は、即田廬なり、契沖、かりそめにをる所をば、みな客と云べし、下にも、たづがねの



聞ゆる田井にいほりしてわれたびなりといもにつげこそ、とよめり、といへり、家を出て假に宿るをば、皆多妣といへり、○歌意かくれたるところなし、田を刈入て守る田廬に霽雨のふりて、乾收る妻も居ず、衣の濕てわびしきさま、まことにあはれなり

玉手次。不懸時無。吾戀。此具禮志零者。沾乍毛將行。

玉手次は、枕詞なり、纏を懸とかゝれり、○不懸時無は、かけて思はぬ時なきの意なり、古今集に、ちはやぶるかものやしろのゆふ手次一日も君をかけぬ日はなし、とあるに同じ、○吾戀は、アガコヒヲと訓べし、吾戀なるものをの謂なり、○零字、舊本者に誤、今は拾穂本、活字本、古寫一本等に從つ、○歌意は、一日もかけて思はぬ時なき吾戀情なるものを、たとひ霽雨は降とも、濕ながらも行むぞ、しぐれなどに障られて、思ひとゞまるべき、淺き心には非ざるものを、となり

黃葉乎。令落四具禮能。零苗爾。夜副衣寒。一之宿者。

夜副衣寒は、千賀眞恒がもたりし本に、フスマモサムシとよめり、拾穂本にも異本にも、しかよめるよしするせり、これ古訓なるべし、これに從べきか、(舊訓のまゝに、ヨサヘソサムキとよみては、サへの詞平穩ならず、)○歌意かくれたる所なし

詠霜。

天飛也。雁之翅乃。覆羽之。何處漏香。霜之零異牟。

天飛也は、集中に、高飛鳥と云ると同じことにて、鷹はことに天を高く飛故に、多く此詞をいふ、古今集にも、白雲にはね打かはしとぶかりのとよめり、也は、天知也、高知也などの也なり、○翅字、舊本に翹、元曆本に翹、と作るは、共に誤なるべし、今は拾穂本に從つ、○覆羽は、あまたの鷹の羽をひろけたるを云意なり、と契沖云り、○歌意は、天を高く飛渡る、あまたの鷹の翅をひろけなれば、其に障られて、霜は得降まじき理なるに、其覆羽の何處を漏てか、霜の如此おびたしく降けむ、となり

秋相聞

これは、以下凡七十三首歌の總標なり

相聞。

此二字、舊本にはなし、目錄にはかくあり、總標に秋の相聞とあるは、をはりの譬喩歌一首までを總たれば、今の五首の題詞、別に擧ずしては、足はぬことなり

金山。舌日下。鳴鳥。音聞。何嘆。

金山は、五行を四時に配るに、金は秋にあたる故に、集中に、金風、金野などもあり、既に云へり、○舌日下は、紅葉之下と云むが如し、舌日は、紅葉のかゞやく色を云なること、二卷、秋山下部留妹とある歌に、委説るが如し、○歌意、本句は、序にて、音を云む料のみなり、おもふ人に、



直に逢見ることなくとも、聲をなりとも聞ば、何かはかくまで歎くことのあらむ、となり  
誰彼。我莫問。九月。露沾乍。君待吾。

歌意は、彼はそも誰なるぞと、不審りて吾を問事なけれ、露に濕るゝをいとはずして、おもふ人を待て居る吾なるぞ、となり

秋夜。霧發渡。夙夙。夢見。妹形矣。

第一二句は、於保々之久といはむ料の序なり、夜霧の立覆ひて鬱つなる意のつゞきなり、○夙夙は、略解云、凡々の誤にて、オホムシクなるべし、○歌意は、夢になりとも、さだかに相見たらば、しばし慰むべき事もあるべきに、さだかに見る事も得爲すして、たゞほのかにばかりぞ、妹がすがたを夢に見つる、となり

秋野。尾花末。生靡。心妹。依鳴。

第一二句は、靡をいはむ料の序なり、つゞけの意明なり、○生靡は、略解云、生は打の誤にて、ウチナビキなるべし、○歌意は、ひたむきに打靡きて、心は妹に依にける哉、今はたゞ餘の事なく、一すぢにさても戀しく思はるゝ事ぞ、となり

秋山。霜零覆。木葉落。歲雖行。我忘八。

歌意は、年の更れば餘の事は、いつとなく忘らるゝ習なるに、たとひこの秋の山が、月日經て冬に至り、霜降覆ひ木葉散はて、後、歳もくれ往て春に更りたりとも、思ふ人の事の忘れられむやは、忘るゝよしはあらじ、となり

〔右五首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

寄水田。

住吉之。岸乎田爾墾。蒔稻。乃而及蒔。不相公鴨。

田爾墾は、墾とは、新治の治にて、岸を田に開墾たるを云、○乃字は、本居氏、秀の誤なり、と云り、さらば第三四句は、マキシイネヒデテカルマデとよむべし、○歌意は、住吉の岸を、新に田に開墾、其田に蒔種し稻の、穗に出て刈取るまで、得逢ぬ君哉、さても久しく遠離れる事や、となり、(拾遺集戀三に、すみのえのきしを田にほりまくいねのかりほすまでもあはぬ君かも、とて、人麻呂の歌とせるは、誤なり、)

鈿後。玉纏田井爾。及何時可。妹乎不相見。家戀將居。

鈿後は、枕詞なり、まづ鈿後と云に、二種あり、七卷に、鈿後鞘納野邇葛引吾妹云々、とあるは、劍鋒にて、俗にいふ切鋒なり、鋒を志利といふは、鏃を夜佐岐とも、夜志利ともいふに同じ、(和名抄に、鏃訓夜佐岐、俗云夜之利と見えたり、俗といへるは、かへりていかゞなり)此に鈿後と云るは、鞘後を云、かく身のかぎりにも、鞘のうへにも、おほやうに皆志利といふは、古風なり、



さてその鞘後に、古は玉を纏飾りし故に、玉纏田といひつゞけしなり、衣服令に、金銀装横刀と見え、それよりも上代には、人身より始て、調度の類にも、玉もて飾りしこと多ければ、鞘後はさらなりけむ、(から國にも、史記春申君傳に、趙使欲<sup>レ</sup>夸<sup>レ</sup>楚、爲<sup>三</sup>珠璣簪、刀劍、室以<sup>三</sup>珠玉<sup>一</sup>飾<sup>レ</sup>之、といふこと見えたり)又集中に、玉纏の眞楫とよみたるをも思ふべし、○玉纏田井とは稻種を蒔田と云なるべし、(稻種を玉といふことは、一説あるによれり、其事既く云り)田井はたゞ田のことなり、井の言に意なし、雲を雲井と云に同じ、さて稻種を蒔は、春末のことこそあれ、此歌秋相聞なればいかゞなれど、上の歌に、住吉之岸乎田爾鑿蒔稻、とよみ、此下に、春霞多奈引田居爾應付而秋田刈左右令思良久、とある如く、春稻種を蒔しよりはじめて、秋まで、田廬に守居つゝ、又稻穂を刈取る後までのことをかけて云るにて、何時までか、此田廬に家戀をらむことぞ、と云るなれば、秋部に収むに妨なし、(岡部氏が、玉纏田井は、纏田井てふ地名に玉まくと云かけしなり、上總の望陀郡も、本は馬來田なり、と云るは非なり、望陀は、本宇麻久陀とこそ云たれ)さてしからは、玉纏之田井とこそ云べきに、かく云るは猶いかゞと疑ふ人もあるべきなれど、既く一卷に、媛女乃袖吹反明日香風、と志貴皇子のよみたまへるも、藤原宮に遷りましゝ後なれば、袖吹反世之と云べき理なるに、かくのたまへるは古風なり、今の歌も、此に准へて疑ふことなかれ、○歌意は、春稻種を蒔しより、田廬に人居て守つゝ、今秋の最中に至りぬれど、猶かへることを得ず、かくては、いつまで妹に相見ることを得ずして、家路戀しく思ひつゝ居む事ぞ、となり、(さて田廬に入居て守るに、月日久しく、家妻にも相見ぬと云ばかりのことは、實にはあるまじきことなれど、こゝは戀情を甚く云むとてのことなるべし)

秋田之。穂上爾置。白露之。可消吾者。所念鴨。

歌意、本句は、消をいはむ料の序にて、身も消失ぬべく、甚く戀しく思はるゝ哉、さてもせむ方なき事ぞ、となり、此下に、秋芽子之上爾置有白露之消鴨死猿戀乍不有者、思合べし

秋田之。穂向之所依。片縁。吾者物念。都禮無物乎。

片縁は、二卷に、秋田之穂向乃所縁異所縁君爾因奈名事痛有登母、とあり、今は片縁に片向て、物を念ふよしなり、○歌意は、秋田の穂向の、片依により靡ける如くに、一方に打片向て、某人のうへをのみぞ、戀しく吾はおもふ、人は相思はねば、かくおもふとも知ず、つれなくてあれば、益なきものなるをとなり

秋田則。借廬作。五百入爲而。有藍君則。將見依毛欲得。

秋田則は、秋田を刈と云意に、借廬につゞけたりとも、いふまじきにあらねども、猶則は、刈の誤と云説に従て、アキタカルと訓べし、此上に、秋田刈借廬乎作、又、秋田刈借廬之宿、八卷に、秋田刈借廬毛未壞者、などあるを考合べし、○五百入爲而は、イホラシテと訓べし、其故は、上に借廬作とあれば、煩はしく又イホリシテと、同じことをかさね云べきに非ず、イホラシテとよむ時は、その廬に宿り賜ひてと云意になりて、體用の差別あれば、煩はしからず、○得字、舊本に將に誤、元曆本、古寫本、拾穂本等に從つ、○歌意は、秋田刈借廬を造りて、その廬に宿り賜ひて、朝暮



守り勞き座らむ夫君に離れ居て、戀しく思ふに堪がたきを、いかで其君に相見べきよしもがなあれかし、となり、これは班田使の妻などのよめるか、又たゞに田夫の妻にもあるべし  
鶴鳴之。所聞田井爾。五百入爲而。吾客有跡。於妹告社。

歌意は、家にありて、妹と二人居て聞ときはおもしろきに、今は其とは引かへて、朝暮鶴音の聞ゆる田中の廬に、獨入居てわびをよしを、いかで妹に告よかし、となり、これは本妻にはあらで、我旅なるほどを知らぬ妹を、思ひてよめるにやあらむ

春霞。多奈引田居爾。廬付而。秋田蒨左右。令思良久。

廬付而は、付は爲の誤なるべし、イホリシテとよむべし、○歌意は、春霞のたな引ときに、稻種を播しより、田中に廬して、今秋の稻穂を刈、収るまで、歸る事を得せずして、月日久しき間、吾に戀しく思はしむるは、さてもくるしき妹ぞ、となり、上の住吉之岸乎田爾壑云々の歌、思合べし

橋乎。守部乃五十戸之。門田早稻。蒨時過去。不來跡爲等霜。

橋乎は、枕詞なり、橋實は人の盗み易きものなれば、守部を居おきて守らするよしにて、橋を守とつゞけたるなるべし、三代實錄五十に、仁和三年五月十四日、是日始置下守三韓橋者二人、以山城國係丁充之、と見え、姓氏錄に、橋守と云姓あるも、公の橋樹を守る者を掌れる氏なるべしと云り、○守部乃五十戸は、守部と云郷なるべし、集中、散記などに、守部王と云人もあり、泉

沖、守部王は、守部と云所におはしける故の名なるべし、守部は、大和の名所なるべし、と云り、猶考べし、既に云如く、五十戸を里とすれば、戸令に、凡戸以五十戸爲里、と見ゆ、五十戸は、サトとよむべきことなるを知らずして、昔來イへとよみきたれるは、甚非なり、(それにつきて、或は守部氏の家といひ、守部といふ地の家なりといへるは、みなあたらす)○歌意は、守部郷なる家の門田早稻を、刈時節までには、必來らむと契りし人の、待と來ずてあるは、今は吾を忘れて、來らじとするならし、さてもつれなしや、となり

寄露。

秋芽子之。開散野邊之。暮露爾。沾年來益。夜者深去輒。

暮露と云るは、今此歌よめるとき、暮なればいへるのみにて、此見ゆる暮露に濕つゝ來ませ、たとひ障ることありて、速に來ますことを得ずして、夜は更るとも、と云るなり、○歌意は、初夜には障ることありて得來座すば、夜更てなりとも、露に濕つゝからうして來たまへ、たとひ夜更ぬとも、今は來座じと思ひて、吾も寢屋へはいらじ、必待居むぞ、となり、(六帖に、秋萩の咲る岡邊の夕露にぬれつゝもませ夜は更ぬとも、とて載たり)

色付相。秋之露霜。莫零根。妹之手本乎。不纏今夜者。

色付相は、色付を長たる詞なり、付は、その付ことを直にいひ、都可布は、その付ことの長緩しく、殘し餘すかたなく、いづくまでも行つくよしなり、チルをチラフと云例の如し、○根字、舊本には



なし、元曆本に従つ、○歌意は、草木の葉の色付わたる秋の露霜の降は、常はいとふべきにあらぬを、妹に得逢ずして、獨宿をする今夜は、寒さに甚堪がたければ、いかで今夜ばかりは、心して零ことなかれよ、となり

秋芽子之。上爾置有。白露之。消鴨死猿。戀乍不有者。

消鴨死猿は、契沖、死猿とかきたれど、爲まして死の意にあらず、と云り、○乍字、舊本に爾と作るは誤なり、今は元曆本に従つ、次下にも二首ともに、戀乍不有者と書り、○歌意は、かく戀しく思ひつゝ、苦しからむよりは、はぎの上に置たる露のはかなく消る如くに、消失なましか、さてもわびしや、となり、八卷に全同じき歌ありて、末を消可毛思奈萬思戀管不有者、と書り、次下の秋芽子之枝毛十尾爾の歌も、大方おなじ

吾屋前。秋芽子上。置露。市白霜。吾戀目八面。

歌意、木句は序にて、芽子の上に置たる露の、誰が目にもまぎれなく其と知るゝより、灼然とつどけたり、さていとく白く、誰が目にも其としらるゝ如く、色に出して戀しく思ふべき事かは、さはすまじきぞと、自吾心を制へたるなり(六帖に、本句を、秋萩の上に置たる白露の、と換て載たり)秋穂乎。之努爾押靡。置露。消毳死益。戀乍不有者。

秋穂乎、秋の稻穂なり、○死益は、これも上の如し、字は借字にて、爲なましなり、○歌意、上の秋芽子之上爾置有云々の歌に同じ

露霜爾。衣袖所沾而。今谷毛。妹許行名。夜者雖深。

歌意は、初夜は障る事ありて夜は更にけり、されども妹が持らむと思へば、かくては止じ、露霜に衣袖濕て、今なりとも、妹が許に急行む、いでさらば、となり

秋芽子之。枝毛十尾爾。置露之。消毳死猿。戀乍不有者。

死猿は、上の死益のごとし、○歌意は、上に秋芽子之上爾置有云々、秋穂乎之努爾押靡云々の歌どもに同じ

秋芽子之。上爾白露。每置。見管會思努布。君之光儀乎。

歌意は、秋芽子の上に白露の置度毎に、其美しきを見つゝ、君が光儀の麗しきを思出して、戀しくぞ思ふ、となり

寄風。

吾妹子者。衣丹有南。秋風之。寒比來。下著益乎。

歌意は、妹が身のやがて衣にてあらなむ、さらば秋風の寒き此頃、衣の裏に取著なましものを、となり(六帖に、わがせこが衣ありせば秋風の、とかへて載たり、)



泊瀬風。如是吹三更者。及何時。衣片敷。吾一將宿。

泊瀬風は、佐保風飛鳥風など云類にて、其處にふく風を云、○者字は、乎の誤ならむと略解に云り、舊本にもヨルヲと訓れば、さもあるべし、○衣片敷は獨宿の形なり、○歌意は、泊瀬風の、かく身にしみて甚く寒き夜も、妹と二人宿れば、かくまで寒さに堪がたく苦くはあるまじきを、かくていつまでか、衣を片敷て、吾獨宿をせむ事ぞ、となり

寄雨

秋芽子乎。令落長雨之。零比者。一起居而。戀夜會大寸。

歌意かくれたるところなし

九月。四具禮乃雨乃。山霧。煙寸吾何。誰乎見者將息。

本句は、煙寸を云むための序なり、煙寸は、むすぼれふさがるを云ば、かくつゞけたり、○吾の下に舊本に告字あり、岡部氏云、告は等の誤なるべし、等は吾に添て書る例多し、といへり、今は一本になきによる、又按に、舊本、一云十月四具禮乃雨降、と註せるを用ふべきか、さて第三句は、山霧合とありて、ヤマキラヒなりけむを、合を告に誤り、遂に混て、吾の下に入しならむ、○誰乎見者將息は、君を相見ずばやまじの意なり、○歌意は、むすぼれふさがりたる吾胸中が、誰を見れば晴けむ、君を相見ずば、止時はあらじ、との謂なり、(六帖に、九月の時雨の雨にぬれとほり

けぶきわがむねたれ見ばかやまむ、と載たるはいかゞ)

寄蟋蟀

蟋蟀を、舊本には蟋とのみ書り、下にも、歌に蟋とのみ書るところあれど、今は目錄并拾穂本に、蟋蟀と書るに従つ、蟋蟀と書る例多ければなり

蟋蟀之。吾床隔爾。嗚乍本名。起居管。君爾戀爾。宿不勝爾。旋頭

吾床隔爾は、アガトコノベニとよむべし、床隔は、床の邊と云むが如し、倭建命御歌に、登許能辨爾和賀淤岐斯都流岐能多知、とあり、今は床の下になくを云なるべし、(毛詩に、十月蟋蟀入我牀下)○宿不勝爾は、イネカテナクニと訓べし、寐難きことなるをの意なり、既に云り、○歌意は、君を戀しく思ひつゝ、夜もすがら起居つゝ、寐入難きことなるを、心なく吾床の邊に、蟋蟀のむさむざと鳴つゝ、いよく物思をまさしむる、となり

蟋蟀之。待歡。秋夜乎。寐驗無。枕與吾者。

待歡は、蟋蟀は秋の來るを待つて、時得がほに鳴ものなれば云り、契沖、源氏物語野分に、いかにぞ宮は待歡び給ひきや、とあるは、此歌にてかけるにや、と云り、○寐驗無は、宿かひなしと云が如し、○枕與吾者は、四卷は、玉主爾珠者授而勝且毛枕與吾者學二將宿、とあり、枕とわれば宿るかひなしと、倒にして、こゝは聞べし、○歌意は、蟋蟀の待つて、時得顔に歡びて鳴夜



なるを、吾は時経ても猶獨のみにて、枕より外に、共宿する人もなければ、時來れるかひなし、となり

寄蝦ヨスカハズニ

朝霞アサカスミ。鹿火カカヒ屋ヤ之下爾カシダニ。鳴蝦ナクカハヅ。聲谷コエダニ聞者キカバ。吾將アレコヒ戀メ八方ヤモ。

朝霞は、枕詞なり、此は霞の霧合といふ意なるを、キラヒはカヒと約れば、(キラの切カ)かくつづけたるならむ、霞の立おほふを、霧合と云るは、二卷に、秋田之穂上爾霧合朝霞云々、とあるこれなり、(冠辭考の説はわろし)○鹿火屋之下爾とは、江のほとり、川の岸などに造りかけたる廬を、飼屋と云、さるは水の下に、ふしつけと云物をして魚を飼つけむ爲に、米などをまけば、餌につき魚集りより來るを取なり、さて鳥などの水に入ば、魚のおどろきて失る故に、其を守るとて、その上に高く造りたるが故に、飼屋と云よし、舊き説に見えたり、(此集、仙覺抄、また顯昭が袖中抄などに、委しく見えたり)さてその飼屋の下の川水に鳴蝦とはつづけたるなり、(こゝに鹿火と書たるは借字のみなり、しかるを冠辭考に、鹿火と書るによりて、山田もるとて、鹿をおどすための火なり、といひ、又十一に、足日本之山田守翁置蚊火之、ともあれば、蚊遣火をいふべし、とあるに從て、世の學者は、皆さることどもと心得たるにやあらむ、されど蝦をよみ合せたるを思へば、右の説は決て非なり、然云所以は、まづ蝦は、後世には、田面に群集て、鳴さわぐ蝦臺をいふこととなれど、古人の可波豆とて、其聲をめではやせしは、川瀬にすむものにて、かの田面なるとはこよなく異りて、蝦も可波豆ものなり、此ことは、近世古學徒も、辨知たる處なれば、今はたゞ

論ふまでもなし、かゝれば、鹿火屋は、鹿火の字意、蚊火の字意、いづれにしても、田に由ることにしては、いはゆる可波豆によしなれば、あたためぬことをささるべし、〔頭註、奥義抄云、かひつととてすることなり、河もしは江などに、すといふ物をたてまはして、口をあけて、そのうちに、さゝの枝おどろなどなとりおきたれば、あたたまりに付て、魚のあつまるを取なり、そのうへに、高く屋をつくりて、くひ物をうちまきなどして、此魚をかひつけさせ〕夫木集に、俊成、かはづ鳴かひ屋にたてる夕煙賤がしわざば、此屋を、かひやといふ也、袖中抄、(夫木集に、俊成、かはづ鳴かひ屋にたてる夕煙賤がしわざも心すみけり、これは蚊火と書る字によりて、蚊遣火と心得てよまれしならむ、後のことは、證とするにたらず)○歌意は、本句は序にて、上の金山舌日下鳴鳥音聞何嘆、とあると、大方同じ謂にて、聲なりとも聞ば、かくばかりわれ戀しく思はむやは、嗚呼かくまではあらじ、となり、○十六にも、本句同じくして、末句之努比管有常將告兒毛欲得、とあり

寄鴈ヨスカリニ

出去者イデテナバ。天飛鴈アマトアカリノ之。可泣美ナキヌベミ。且今日ケケフ且今日ケフト云二トシゾヘニケケム。年會經去家類トシゾヘニケケム。

天字、舊本大に誤れり、今は活字本に從つ、○歌意は、妹許を出て他處に徙り行ば、音に立て妹が泣ぬべからむとて、今日は今日はと思ふうちに、はや年をぞ經にける、となり、伊勢物語に、いでていなば誰かわかれのかたからむ云々

寄鹿ヨスカニ

左小牡鹿之ササカシカノ。朝伏小野之アサフスヲノ。草若美クサワカミ。隱不得而カクロヒカネテ。於人所知名ヒトニシラユナ。

歌意は、鹿が獵人の目に觸じと、伏隠るとすれど、草が稚く短きが故に、うまく隠れ密ぶことを得



ずして、つひに獵人に獲らるゝ如く、そこと吾との中を、世人に知れじと、隠ぶとすれど、密び得ずして、つひに人に知れ賜ふなど、禁めたるなるべし、これは草若美とあれば、春の末、夏の初などによめる歌なるべし、さて鹿をよめる因チナミにひかれて、混れて秋、相聞には入たるなるべし  
左小牡鹿之。小野草伏。灼然。吾不問爾。人乃知良久。

吾不問爾は、契沖が、吾いはざるになり、言問ぬ木など云は、物いはぬ木といふなり、○歌意は、鹿のふしどをかくすとすれど、あとありて、誰が目にも其といちしるきが如く、しのびて、かりにも人にはいはぬことなるを、おもひの色にあらはれて、人の知ることの苦しき事、となり

寄鶴。

契沖、鶴は雜の鳥にすめるを、こゝには歌にも、外に秋のこと葉なくて、只鶴をのみよめるは、これも秋はことにわたりくればなり、と云り、按に、鶴を雜の鳥とするは、後のことにて、古は秋の季物とせる事、鷹に同じ趣なり

今夜乃。曉降。鳴鶴之。念不過。戀許增益也。

曉降は、夜の更て曉に至るなり、夜半を峠とする故に、曉の方は下り坂なれば、降と云り、クダチは、クダリと云に同じ、古今集にも、本くだちゆくわが盛はも、とよめり、○也は、徒に添たる字なり、○歌意、契沖云、夜一夜物思ひあかして、曉にたづの鳴を聞てよめる歌なり、曉になれども、たづともになきて、おもひをば得過しやらで、かれにもよほされて、戀のまさるとなり、今按に、此は序歌なるべし、鶴が鳴の餘處に過行をもて、吾思の過ることに云うつせるなるべし、何につけても慰むことなければ、思は過失ることなく、いよゝ戀しき心こそまされと、やがて曉に鶴音を聞て、其を序におきてよめるなるべし、さて序ながら、かゝる思のあらずば、鶴が音を聞て、心を慰さむべきにとの、意をもたせたるならむ

寄草。

皮酢爲寸。穗庭開不出。戀乎吾爲。玉蜻。直一目耳。視之人故爾。旋頭。

歌意は、たゞ一目ばかり見し人なれば、其時限にて、さて止べき事なるに、さはなくして、色に出ず、心中にこめたる思を常に爲て、くるしむよ、となり

道邊之。乎花我下之。思草。今更爾。何物可將念。

思草は、品物解に委説り、○今更爾は、今更々爾とありしを脱せるなり、と云説によるべし、さらばイマサラサラニと訓べし、○何物可將念は、ナニカオモハムと訓べし、何物二字を、ナニとよめる例、集中にあり、○歌意は、心はひたすらに、某人に依ぬるものを、今更々に、餘に何事をかはおもはむ、となり、本句は全序のみなり、四卷安倍女郎歌に、今更何乎可將念打摩情者君爾縁爾之物乎、とあるに同じ、(新古今集に、野邊見れば尾花がもとのおもひ草枯行冬に成ぞしにける) 寄花。



草深三。蟋多。鳴屋前。芽子見公者。何時來益牟。

歌意は、草深き故に、蟋蟀の如く集りて鳴おもしろき吾庭のはぎを、吾戀しく思ふ人の、いつか見に来座むぞとなり

秋就者。水草花乃。阿要奴蟹。思跡不知。直爾不相在者。

水草花は、字の如く、何にまれ水に生たる草の花を云、○阿要奴蟹は、荒木田氏、豊後國なる柴田三滿が云けるは、西國にて、菓の類の梢に在るを、おとし取をあやすといひ、おのづから落るをあえるといふ、すべてものゝ落こぼるゝをいふと云り、是古言なり、今血をあやすと云も、こぼるる意なり、阿要奴蟹は、こぼるゝ程にと云ことなり、と云り、さらば、此歌は、水草の花の滿盛にて、こぼるゝばかりに咲たるよしにいひつゞけて、さてあえぬばかりに思ふとは、思の充あまりて、溢れこぼるゝ意を云なるべし、蟹は、計といふと同意になる言なり、(本居氏は、この我爾と、我爾と云言と、差別あることを辨ずして、混に解て、我爾は、我爾の約れる言なりとせる故に、いたくたがへり、抑我爾は、之似にて、許にと云意となり、我爾は之根にて、其料にと云意になることにて、もとよりけぢめある言なるをや、)猶八卷橋長歌に、五月乎近美安要奴我爾花咲爾家里、とある歌に、委註したるを、披見て考べし、○思跡不知は、オモヘドシラジと訓べし、○歌意は、思の充あまりて、溢れこぼるゝばかりなれど、直に相見て詳に云されば、人は然とも得知じ、と云なるべし、第一二句は序なり

何爲等加。君乎將狀。秋芽子乃。其始花之。歡寸物乎。

歌意は、何とてか君をいとふべきぞ、相見るときは、芽子の初花の如く、珍しく歡しきものに思ふものを、となり、(略解に、右の歌の答歎といへれど、さともきこえず、)

展轉。戀者死友。灼然。色庭不出。朝容貌之花。

歌意は、よしやたとひ展轉つゝ、戀死に死はすとても、朝貌花の、誰が目にも其と灼然如く、色に出てはこひじ、となり、終句を、第三句の上に入れて心得べし

言出而。云者忌染。朝貌乃。穗庭開不出。戀爲鴨。

朝貌乃は、枕詞の如し、○穗庭開不出は、さきくも云る如く、すべて穂といふは、何にまれそれといちしるくあらはれたるを云ことにて、花にても、穂にても、秀あらはれたるを云言なれば、朝貌の花の、いちしるく開出る意に云つゞけ、うけたる上にては、色に出人の目につくよしなり、○歌意は、言に出て人はいはむは、忌々しく憚らしからむとて、言にも出さず、色にもあらはさず、心の内にのみこめて、戀しく思ひ居る哉、さてもいぶせしや、となり、さてふるの早田の穂には出ずと云如く、朝貌よりのつゞきは、穂に開といふへのみかゝりて、不出といふまでにはかゝらぬことなり、としるべし

鴈鳴之。始音聞而。開出有。屋前之秋芽子。見來吾世古。

鴈鳴之。始音聞而。開出有。屋前之秋芽子。見來吾世古。



見來吾世古は、見に來座吾夫子よの意なり、○歌意かくれたるところなし、上に、鴈鳴之來喧牟日  
及見乍將有此芽子原爾雨勿零根、又、秋芽子者於鴈不相言有者香音乎聞而者花爾散去流、とよめ  
る如く、大要芽子は鴈の來る時節は散ものなれど、大きに早晚のあるものなれば、外のちれるのち  
に咲ることもあるべし、さてこれもおそ櫻をめづる如く、遅きを賞てよみて、おくれる意もあるべし  
左小牡鹿之。入野乃爲醉寸。初尾花。何時加妹之。衣手將枕。

初句は、契沖、左小牡鹿の分入野と云こゝろにつゞけたり、と云り、○入野は、七卷に、劍後翰納  
野、とよめり、神名式に、山城國乙訓郡入野神社、とあれば、そこを云にやあらむ、略解に、舊訓  
にイルノとあれど、武藏の入間を、今いるまと唱ふるも、集中に伊里末とよみたれば是もイリヌと  
よむべし、と云り、○爲醉寸初尾花とつゞけ云るは、芒は大名、尾花はその花をいふ稱なれば、落  
る處は芒の初花と云ことなり、(契沖が、薄といひて初尾花と云るは、眞玉手の玉手といひ、みよ  
しぬの吉野といふが如しと云るは、いさゝかたがへり、○衣手將枕は、妹が袖を枕になして相宿む、  
と云るなり、舊本に將手枕とあるは、心得ぬ書様なり、又タマクラニセムとよみたるも、古歌の調  
にあらず、元曆本に、手將枕とあるはよし、故右の如く衣字を補ひて、ソテマクラカムと訓つ、妹  
が袖まきむくやまなどよめるをも、思合べし、(略解に、六帖によりて、たまくらをせむとよむべし、  
將の下爲字脱たるかといへれど、よくいにしへを考ざりしものなり、)○歌意は、本句は序にて、初  
と云にちなみて、いつしか始めて妹が袖を枕になして、相宿せむと云下したるか、又は尾花の秀に  
あらはれていつしか妹と夫婦になりて、相宿せむと云意を、含めたるにもあるべし

戀日之。氣長有者。三苑圃能。辛藍花之。色出爾來。

三苑圃能、元曆本には、三字を吾と作て、ワガツノ、とよめり、○辛藍花は、カラキノハナとよむ  
べし、品物解にいへり、○歌意は、初のほどは、色に出じと堪忍びてありしかど、一すぢに戀しく  
思ふ日數の久しくなるまゝに、堪かねて、此頃は色に出て、人にしられにけり、となり、第三四句  
は序なり

吾鄉爾。今咲花乃。女郎花。不堪情。尙戀二家里。

今咲花とは、本居氏、新に咲たるを云、はねかづら今する妹と云も同じ、新來、新參のたぐひな  
り、といへり、○女郎花、拾穂本には娘部四と作り、娘部四徹之とある本は、字あまれり、○歌意  
は、吾郷に、今新に咲出たる女郎花の美しさに、堪むとすれど得堪へあへずして、其女郎花を、な  
ほ戀しく思はるゝ、となり、さてこれは女郎花を、思ふ女にたとへたるならむ

芽子花。咲有乎見者。君不相。眞毛久一。成來鴨。

歌意は、芽子の開たるを見て、時節のうつりたるにおどろきて、さて、これにて見れば、君に相見  
ずして、まことに久しき間になりける哉、げにも戀しく思はるゝは理なりと、なげきたるなり

朝露爾。咲醉左乾垂。鴨頭草之。日斜共。可消所念。



咲酔左乾垂は、咲荒而有にて、咲みだれたると云意なり、(契沖が、すさびは、手すさび、口すさびなどのこゝろにて、花なれば、咲を、そのわざとするなり、と云るは、いさゝかわろし)○鴨頭草のことは、品物解に委云り、(歌意は、朝陰に露負て、さきみだれたる鴨頭草の、日たくるにつれて、萎み消入る如く、戀情につかれて、心ほそく物がなしくて、消入ぬべくおもはるゝとなり、げに鴨頭草は、後世露草ともいひて、日氣にあたれば、露の消る如く、はかなく萎入ものなれば、消ぬべくと云り、次下にも、朝開夕者消流鴨頭草可消戀毛吾者爲鴨、とよめり、(契沖は、此歌と、下の朝開の歌ともに、消ぬべくとつゞきたるをおもへば、此二首の鴨頭草は、ツユクサとよむべきにや、と云れど、いかゞなり、露草といへること、古く見えたることなければなり、)

長夜乎。於君戀乍。不生者。開而落西。花有益乎。

不生者は、生てあらむよりはの意なり、○歌意かくれたるところなし

吾妹兒爾。相坂山之。皮爲酢寸。穗庭開不出。戀渡鴨。

吾妹兒爾は、相とかゝれる枕詞なり、○歌意、本句は序にて、此上に、朝貌乃穗庭開不出戀爲鴨、とあると同じく、色に出して表にあらはさず、心裏にのみこめて、戀しく思ひて、月日を経渡る事哉、さてもくるしや、となり、此上旋頭歌にも、皮酢爲寸穗庭開不出戀乎吾爲云々、とあり、出雲風土記に、波多須須支穗振別而云々、と云るは、たゞ穂の一言のみにかゝりて、いさゝか別なり、○此歌、古今集墨滅歌に載て、第三句以下、しのすゝき穂には出ずもこひわたるかな、とあり

率爾。今毛欲見。秋芽子之。四槎二將有。妹之光儀乎。

四槎二將有は、本居氏、二は旦の誤にて、シナヒテアラムなるべし、と云り、四槎は、纏にて、しなやぎであるらむの意なり、藤のしなひ、柳のしなひなども云如く、芽子の垂ふるよしに云下して、女の婉なるにいひつゞけたり、書紀に、莫々然を、シナヒとよみ、文選に、璀璨とも、垂ともあるを然よめり、○歌意は、婉て美しき妹が容儀を、たゞ暫かりそめの間なりとも、ありし時の如く、今も見まくほし、となり

秋芽子之。花野乃爲酢寸。穗庭不出。吾戀度。隱孀波母。

隱孀波母は、隱妻は、いづらやと嘆きて尋ねしたふ意なり、○歌意は、第一二句は、序にて、色に出て表にあらはさず、心裏にのみこめて、戀しく思ひつゞ、月日を経渡る、その隱妻は、今何處にありやと、歎息きて、尋慕ふよしなり

吾屋戸爾。開秋芽子。散過而。實成及丹。於君不相鳴。

開は、サキシとよむべし、○歌意は、花に開し秋はぎの散失て、實になるまでもあはぬ君哉、さてく久しくあはぬ事ぞと、相見ぬことの久しくなるを云り、芽子の實になることを云るは、七卷に、欲見戀管待之秋芽子者花耳開而不成可毛將有、又、吾妹子之屋前之秋芽子自花者實成而許曾戀益家禮、などあり



吾屋前之。芽子開二家里。不落間爾。早來可見。平城里人。

歌意かくれたるところなし

石走。間間生有。貌花乃。花西有來。在筒見者。

石走は、上に處々出て、既に註つ、石橋なり、○間間生有は、マ、ニ、オ、ヒ、タルと訓べし、又ア、ハ、ヒ、ニ、サ、ケルともよむべきか、生字をサクとよめる例は、六卷に、春者生管、七卷に、姫押生澤邊之、十六に、八重花生跡、などあり、○貌花は、己が考ありて、品物解に云り、○歌意は、本句は序にて、貌花乃は、たゞ花と云む料のみなり、さて有々つゝ熟見れば、はじめ深く思ひたのみしには、事かはりて、たゞあだなることのみにて、實ならずありけり、と云るなり、花はあだなるを云ことにて、集中に、人は花物ぞなどもよみ、源氏物語などに、花心と云るも、あだなる心をいへり、(略解に、貌花と云名に依て、妹を在在て相見れども、いつも花の如く、珍らしと思ふとなりといへるは、いみじきひがことなり)

藤原。古郷之。秋芽子者。開而落去寸。君待不得而。

歌意は、咲たる間に、よも一度は見に來座べしとて、君を待て、芽子が自散ずありしに、心づよくつひに來まさざりしかば、せむ方なく、藤原故郷の芽子は散失にけりと、實は吾が待しことを花に負せて、花が自ら待しさまにいへること面白し、契沖、これは元明天皇和銅三年に、藤原宮よ

り奈良へうつらせ給ひて後、猶かの藤原にのこり居ける人の、奈良なる人へよみておくれるなるべし、藤原は高市郡なり、といへり

秋芽子乎。落過沼蛇。手折持。雖見不恰。君西不有者。

秋芽子乎といへるは、花を手折持とつゞく意なり、○落過沼蛇は、落過ぬべからむとての意なり、○歌意は、芽子のうるはしきが、ほどなく散失べきに、もし散失なば、後悔しからむとて、手折たるその花は、又たぐひなくめでたけれども、わが思ふ君にてあらねば、なほ心裏にあかすて、恰しからずさぶくし、といふならむ

朝開。夕者消流。鴨頭草。可消戀毛。吾者爲鴨。

歌意かくれたるところなし、上の朝露爾咲酢左乾垂鴨頭草の、と云歌に、委いへるを考合べし

蛭野之。尾花荳副。秋芽子之。花乎莢核。君之借廬。

蛭野は、吉野の秋津野なり、○歌意は、同じくは秋津野の尾花をかりそへ、秋芽子の花以て、君が借廬の屋根を茸賜ひて、旅の心をなぐさめ賜へよ、となり、契沖云、これは旅なる人に、よみておくれるなるべし

咲友。不知師有者。默然將有。此秋芽子乎。令視管本名。



第一二句は、咲たりとも、一向に知ずしてあらばの意なり、○默然將有は、たゞにあらむの意なり、○歌意は、芽子を折ておこせたる人に、よみておくれるにて、中々に咲たりと、ひたすらに知ずしてあらば、たゞにあらむを、むざくと、この芽子を折て見せにおこせたまへる故に、いよ／＼そなたをこひしく思ふ心のまさるぞ、といへるなるべし、(略解に、相見て中々に物思のます心をそたり、といへど、いかゞなり、)芽子を折ておこせたるを、恨むるやうにいひ、裏に深く歡べる意をおもはせたるなり

寄山

秋去者。鴈飛越。龍田山。立而毛居而毛。君乎思曾念。

歌意、本句は全序にて、立をいはむ料のみなり、起ても居てもわするゝひまなく、一すぢに君をのみぞ、戀しく思ふ、となり、上にも、夕去者鴈之越往立田山云々、とよめり

寄黄葉

我屋戸之。田葛葉日殊。色付奴。不來座君者。何情曾毛。

來字、舊本になきは脱たるなり、今は元曆本、拾穂本等に從つ、○歌意は、見れば、吾庭の田葛葉が、日ごとに色づきまされるを、今まで來まさぬ君は、何の心ぞや、となり、これは葛葉の紅色を見て、時節のうつれるにおどろきて、さて思ふ人の久しく來ぬを、うらみなけくなり

山佐奈葛は、山に生たる五味を云、品物解に云り、○歌意は、山佐奈葛の色づくまで、妹にあはずして、戀しくのみ思ひ居むか、となり、これも佐奈葛のみみぢせるを見て、時節のうつれるにおどろきなけきたるなり

黄葉之。過不勝兒乎。人妻跡。見乍哉將有。戀敷物乎。

黄葉之過とは、黄葉の散過る意につゞけ、過不勝とうけたる上にては、過しがてにする意にて、わが思ひを得やりすぐさず、心の切なるをいへり、○歌意は、思を過し失はむとすれども、淺き心ならねば、得やりうしなはずして、深く戀しく思はるゝものを、なほ他妻と思ひつゝ、あふ事も得せずして、あるべからむか、となり

寄月

於君戀。之奈要浦觸。吾居者。秋風吹而。月斜鳥。

之奈要は、萎なり、物思ひにあまりて、なえく／＼となるを云り、二卷に、夏草乃念之萎而、とあり、○鳥、異本には、焉と作り、鳥焉に通書ること既く云り、(略解に、焉の誤とせるは、あながちなり、)○歌意は、君を戀しく思ひつゝ、なえく／＼とうなだれてのみ吾居れば、秋風も寒く身にしみ通りて、夜更月かたぶきぬるよ、かくては今は逢よしもあるべからず、せむ方も、なき事にある哉となり

秋夜之。月疑意君者。雲隱。須臾不見者。幾許戀敷。



疑意は、義訓なり、(契沖が、意は裳の誤かといへるは、中々なり、)○歌意は、秋夜の月の雲隠れて見えぬほどは、甚こひしきものなるを、君は其月にてあればにや、しばしの間も見ねば、そこらく戀しく思はるゝよ、さても相見まほしや、となり

九月之。在明能月夜。有乍毛。君之來座者。吾將戀八方。

歌意、本句は、在乍毛を云む料の序なり、在々乍、いつまでも君が通ひ來まさは、かく戀しく思はむやは、中よどありて、つゞきて來まさねばこそ、嗚呼かく戀しく思ふなれ、との謂なり

寄夜。

忍咲八師。不戀登爲跡。金風之。寒吹夜者。君乎之曾念。

忍咲八師は、集中に、縦畫屋師、能咲八師、などかきて、心にはみたねども、假に縦す意の言なり、然れば、心に忍びこらへてゆるす意にて、忍字を書しものなれば、縦字を書しとおなじ、と岡部氏の云りしぞよき、(略解に、忍は吉の誤なるべしと云るは、あらぬことなり、)○歌意は、戀しく思ひてもあふ事のならねば、よしや、今は、戀しく思ふまじとすれども、なほ秋風の寒く吹夜は、堪忍かねて、君が一すぢに戀しく思はるゝ、となり、古今集に、素性、秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるゝよごと、この歌の心に似たり、と契沖いへり

惑者之。感字。元曆本に或と作るは非ず、(は、サドヒトシとよむべし、本居氏、惑者は、惑は借字にて、里人なり、十八に、惑はせると云ことを、左度波世流と云り、(已上)今按に、里人は、左登妣等と登を清妣を濁りていふぞ、定れる格なるを、惑は左度なれば、いかゞと人の疑ふことあらむ、此ことまで、本居氏はさだせざりしかばなり、故考るに、是は久志夫流を、古事記に久士布流と云

と同格にて、下の濁音を上へ轉す一の體あれば、これもその定なるべし、十三にも散度人と書たる、それも同じ、九卷葦屋處女墓をよめる歌にも、惑人と見えて、既くそこにも云り、○痛情無、アナコ、ロナシとよみて句とすべし、(跡を此句へつけて、アナコ、ロナトとよみ來れども、いと古の詞づかひにあらず、)あはれ情なしの意なり、跡は、第三句の頭へ屬て、トオモフラムとよむべし、○寐師耳(寐師、元曆本には寤臥と作り、)は、未詳ならず、舊訓に、ネサメテシノミとあれど、釋べきやうなし、(略解に、耳は在の草の手より誤れるならむ、さて寐の上に不字あるべきを、集中に略ける例多ければ、不字はもとより略けるならむ、イネズシアレバとよむべしと云れど、通がたし、又不字を略けりと云るも、甚おぼつかなし、さる例集中にあることをしらす、)せめて思ふに、寐は寒の誤、耳は有の誤にて、サムクシアレバとよむべきか、○歌意は、長き夜なるを、そのうへにかく寒くさへあれば、あはれ心無の秋の長き夜やと、里人のいかに一すぢにわびしくおもふらむと、わが獨宿の床の寒るより、里人のうへをまでおもひやれるにて、相聞に收たるか、又たど何となく、聞えたるまゝなるが、まがひて相聞に收たるか、こはなほよく考べし

秋夜乎。長跡雖言。積西。戀盡者。短有家里。

秋夜乎。長跡雖言。積西。戀盡者。短有家里。